

透行道唱高聲念佛。南北明匠歸西土之教。信男  
信女參禮聽衆老若諸人疑心中誠。各異口同音三  
日三夜間高聲不斷念佛。譬如六方恒沙諸佛證  
誠。又座主發一大願。此寺立五坊一向專念行  
相續。稱名外更不交餘行。一度始以來今不退  
轉。入尋此門後妹尼公爲勸書念佛勸進消  
息。湛歎上人發願。來迎院松林院等不斷念佛始  
之。自爾以降洛中邊土處處道場無所不勸  
修之。大佛上人俊乘房重源起一意樂云。此國  
道俗男女閻魔王宮跪交名答時。爲令唱佛名  
可付阿彌陀佛之名。先吾名名爲南無阿彌陀  
佛。吾朝阿彌陀佛名之流布此時始。顯眞法印  
被召出補天台座主。任僧正。末代高僧本山  
賢哲也。諸宗碩學率莫不歸上人。一天四海  
併以念佛爲口遊。得智慧第一名。  
建久三年於靈山寺。三七日不斷念佛問雖無  
燈明有光明。第五日之夜各行道交勢至菩薩同  
列立。或人如夢拜之。上人此由被申。然事侍

覽有返答。月輪禪定殿下歸依深厚也。從此始  
人人爲奇。此三七日不斷念佛時衆十二人。法蓮  
房眞觀房定蓮房藏人入道住蓮房安樂房蓮光房西  
仙房清淨房念佛房蓮乘房阿證房。其先達上人  
也。右十二人守三番被勤行。三七日云丑時  
異香滿室音樂聞耳。聽聞人人見四十八燈。三  
七日已時阿彌陀如來觀音勢至顯現。上人俄五體  
投地禮西方。流歎喜淚高聲念佛。化佛菩薩  
現眼前如星列。或人閉目見開目不見。爾  
時上人口放光。見之人人住蓮房安樂房西仙房  
法蓮房清淨房等也。無燈暗夜披見聖教。御口  
放光。唐善導和尚者口現化佛。此上人口出  
光明。末代念佛祖師誰敢背之哉。上人行道時  
或人夢見勢至菩薩行道。夢覺驚奉見即上人行  
道也。如是見三度。又燈消無火道場明如炬燈。  
遙久燃火。是又不思議光明也。首楞嚴經勢至章  
云。我本因地以念佛心入無生忍。今於此界  
攝念佛人歸於淨土云云。此文可思合也。

源空上人生年五十四歲

## 六 法然聖人御說法事

經論の中に。佛の功德をとけるに。無量の身あり。あるひは總じて一身をとさ。あるひは二身をとさ。あるひは半三身をとさ。乃至華嚴經には。十身の功德をとけり。いまだ眞身化身の二身をもて。彌陀の功德を。讚嘆したてまつらむ。この眞化二身を。わかつこと。雙卷經の三輩の文の中にみえたり。まづ眞身といふは。眞實のみもとにして。四十八願をよこしてのち兆載永劫のあひだ。布施持戒忍辱精進等の。六度萬行を修して。あらはしたまへるところは。修因感果の身なり。觀經にときて云。その身量。六十萬億那由他。恒河沙由旬也。眉間の白毫右に

附錄 法然聖人御說法事

めぐりて。五須彌山のごとし。その一須彌山のたかさ。出海入海のノノ八萬四千那由多なり。また青蓮慈悲の御まなこは。四大海水のごとくにして。清白分明なり。身のもろくの毛孔より。光明をはちたまふこと。須彌山のごとし。うなじにめぐれる圓光は。百億の三千世界のごとし。かくのごとくして。八萬四千の相まします。一一の相にものノノ八萬四千の好あり。一一の好にまた八萬四千の光明まします。その一一の光明。あまねく十方世界の。念佛の衆生を攝取してすてたまはず。御身のいろは。夜摩天の閻浮檀金のいろのごとしといへり。これ彌陀一佛にかぎらず。一切諸佛はみな黄金のいろなり。もろくのいろの中には。白色をもて本とすとまよせば。佛の御いろも。白色なるべしといへども。そのいろなほ損ずるいろなり。たゞ黄金のみあつて。不變のいろなり。このゆへに十方三世の一切の諸佛。みな當住不變の相

をあらわさむがために。黄金のいろを現じたまへるなり。これ觀佛三昧經のこゝろなり。たゞし眞言宗の中に五種の法あり。その本尊の身。色法にしたがふて各別なり。しかれども暫時方便の化身なり。佛の本色にはあらず。このゆへに佛像をつくるにも。白檀採色なども。功德をえざるにあらずといへども。金色につくりければ。すなはち決定往生の業因なり。即生の功德略を存するにかくのごとし。即生。乃至三生に。必得往生といへり。これ彌陀如來の。眞身の功德略を存するにかくのごとし。次に化身といふは。無而歎有を化といふ。すなはち機にしたがふ。ときに應じて。身量を現すること。大小不同なり。經にあるひは大身を現して虚空にみつ。あるひは小身を現して。丈六八尺といへり。化身につきて多種あり。まづ圓光の化佛經には。圓光のなかにあいて。百萬億那由他恒河沙の。化佛まします。一一の化佛に。衆多

無數の化菩薩をもて。侍者とせりといへり。つぎに攝取不捨の化佛。光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨といふは。この眞佛の攝取なり。このほかに化佛の攝取あり。三十六萬億の化佛。おのゝ眞佛とともに。十方世界の念佛衆生を。攝取したまふといへり。次に來迎引接の化佛。九品の來迎に。おのゝ化佛まします。品にしたがふて多少あり。上品上生の來迎には。眞佛のほかに。無數の化佛まします。上品中生には。千の化佛まします。上品下生には。五百の化佛まします。乃至かくのごとく。次第におとり。下品上生には。眞佛は來迎したまはず。たゞ化觀音勢至とをつかはす。その化佛の身量。あるひは丈六。あるひは八尺なり。化菩薩の身量も。それにしたがふて。下品中生は天華の上に。化佛菩薩ましまして。來迎したまふといへり。下品下生は命終してのち。金蓮華をみる。猶如日輪住其人前といへり。文のごとくは。化佛の來

迎もなきやうにみえたれども。善導の御心は。觀經の疏の十一門の義によらば。第九門に命終のとき。聖衆の迎接したまふ不同。去時の遅疾をあかすといへり。またいまこの十一門の義は。九品の文に約對せり。一一の品のなかに。みなこの十一ありといへり。しかれば下品下生にも。來迎あるべきなり。しかるを五逆の罪人。そのつみをもきによりて。まさしく化佛菩薩をみることあたはず。たゞわが座すべきところの。金蓮華ばかりをみるなり。あるひはまた文に隱顯あるなり。次にまた十方の行者の本尊のために。小身を現じたまへる化佛あり。天竺の鷄頭摩寺の五通の菩薩。神足通をして極樂世界にまうて。佛にまうしてまうさく。娑婆世界の。衆生往生の行を。修せむとするに。その本尊なし。佛ねがわくばために。身相を現したまへと。佛すなはち菩薩の請にもむき。樹の上に化佛五十體を現じたまへり。菩薩すなはちこれをう

つしてよにひろめたり。鷄頭摩寺の五通の菩薩の。曼陀羅といへるすなはちこれなり。また智光の曼陀羅とて。世間に流布したる本尊あり。その因縁は人つねにしりたる事なり。つぶさにまふすべからず。日本往生傳をみるべし。また新生の菩薩を教化し。說法せむがために。化して小身を現じたまへることまします。これはこれ彌陀如來の化身の功德。また略してかくのごとし。いまこの造立せられたまへる佛は。祇園精舎の風をつたへて三尺の立像をうつし。最後終焉のゆふべを期して。來迎引接につくれり。およそ佛像を造畫するに種々の相あり。あるひは說法講堂の像あり。あるひは池水沐浴の像あり。あるひは菩提樹下。成等正覺の像あり。あるひは光明遍照攝取不捨の像あり。かくのごとき形像を。もしはつくり。もしは畫したてまつる。みな往生の業なれども。來迎引接の形像は。なほその便宜をえたるなり。盡虛空界の莊嚴を

み。轉妙法輪の音聲をきき。七寶講堂のみぎりにのぞみ。八功德池のはまにあそび。あよそかくのごとく。種種微妙の依正二報をまのあたり。視聽せむことは。まづ終焉のゆふへに。聖衆の來迎にあづかりて。決定してかの國に往生してのうそに候也。しかればふかく往生極樂のこころさしあらむ人は。來迎引接の形像をつくりたてまつりて。すなはち來迎引接の誓願をあおぐべきものなり。その來迎引接の願といふは。すなはちこの四十八願の中の。第十九願なり。人師これを釋するに。おほくの義あり。まづ臨終正念のために。來迎したまへり。おもはく病苦身をせめて。まさしくせめんとするときは。かならず境界自體當生の三種の愛心をおこすなり。しかるに阿彌陀如來大光明をはなちて。行者のまへに現じたまふとき。未曾有の事なるがゆへに。歸敬の心のほかに他念なくして。三種の愛心をほろぼして。さらにおこること

なし。かつはまた佛行者にちかづきたまひて。加持護念したまふがゆへなり。稱讚淨土經に。慈悲加祐して。こころをしてみたらざらしむ。すてに命をすておはりて。すなはち往生を得。不退轉に住すといへり。阿彌陀經に。阿彌陀佛もろくの聖衆と。そのまへに現せむ。この人あわらむとき。心顛倒せずして。すなわち阿彌陀佛國土に往生を多むとけり。令心不亂と。心不顛倒とは。すなはち正念に住せしむる義なり。しかれば臨終正念なるがゆへに。來迎したまふにはあらず。來迎したまふがゆへに。臨終正念といふ義あさらかなり。在生のあひだ往生の行。成就せむひとは。臨終にかならず聖衆來迎をうべし。來迎をうるとき。たちまち正念に住すべしといふ。こころなり。しかるにいまのときの行者。おほくこのむねをわさまへずして。ひとへに尋常の行にありては。怯弱を生じて。はるかに臨終のときを期して。正念をいひのる。

もとも僻韻なり。しかればよくく。このむねをこころえて。尋常の行業にありて。怯弱のこころをおこさずして。臨終正念にありて。決定のおもひをなすべきなり。これはこれ至要の義なり。さかひ人こころをととひべし。この臨終正念のために來迎すといふ義は。靜慮院の靜照法橋の釋なり。次に道の先達のために。來迎したまふといへり。あるひは往生傳に。沙門志法が遺書に云。

我在<sup>二</sup>生死海<sup>一</sup> 幸値<sup>二</sup>聖船筏<sup>一</sup>  
我所<sup>レ</sup>顯眞聖 來<sup>二</sup>迎卑穢質<sup>一</sup>  
若欣<sup>二</sup>求淨土<sup>一</sup> 必造<sup>二</sup>畫形像<sup>一</sup>  
臨終現<sup>二</sup>其前<sup>一</sup> 示<sup>二</sup>道路攝心<sup>一</sup>  
念念罪漸盡 隨<sup>レ</sup>業生<sup>二</sup>九品<sup>一</sup>  
其所<sup>レ</sup>顯聖衆 先讚<sup>二</sup>新生輩<sup>一</sup>  
佛道樂增進<sup>三</sup>。これすなはちこの界にして。造畫するところの。形像先達となりて。淨土におくりたまふ證據なり。また藥師經をみるに。淨

土をねがふともがら。行業いまださらざし。往生のみちまごふことあり。すなはち文にはく。よく受<sup>二</sup>持入分齋戒<sup>一</sup>あらむ。あるひは一年をへ。あるひはまた三月受持せむ。まなぶところの善根をもて西方極樂世界。無量壽佛のみもとに。ひまれむと願じて。正法を聽聞すれどもいまださらざらざるもの。もし世尊藥師瑠璃光如來の名號をさかひ。命終のときにのぞみて。入菩薩あて神通に乗じてきたりてその道路をしめさむ。すなはちかの界にして。種々の雜色。衆寶華の中に。自然に化生すといへり。もしかの八菩薩。その道路をしめさず。ひとと往生すること多かたきにや。これをもておもふにも。彌陀如來もろくの聖衆とともに。行者のまへに現じて。きたりて迎接したまふも。みちびきて道路を。しめしたまはむがためなりといふ義。まことにいはれたることなり。娑婆世界のならひも。みちをゆくにはかならず。先達

といふものを具する事なり。これにて御願の僧正は。かの來迎の願をば。現世導生の願となづけたまへり。次に對治魔事のために。來迎すといふ義あり。道さかりなれば。魔さかりなりとまふして。佛道修行するには。かならず魔の障難のあひそふなり。眞言宗の中には。誓心決定すれば。魔宮振動すといへり。天台止觀の中には。四種三昧を修行するに。十種の境界ある中に。魔事境來といへり。また菩薩三祇百劫の行すてになりて。正覺をとまふるときも。第六天の魔王きたりて。種種に障礙せり。いかにいはずや。凡夫具縛の行者。たとひ往生の行業を修すといふとも。魔の障難を對治せずば。往生の素懷をとげむことかたし。しかるに阿彌陀如來。無數の化佛菩薩聖衆に圍繞せられて。光明赫灼として。行者のまへに現じたまふときは。魔王もこゝにちかづき。これを障礙するのとあたはず。しかればすなはち。來迎引接は魔

障を對治せむがためなり。來迎の義略を存するにかくのごとし。これらの義につきて。おもひ候にも。おなじ佛像をつくらむには。來迎の像をつくるべきとおぼへ候なり。佛の功德大概かくのごとし。

次に三部經は。いま三部經となづくることは。はじめたまふすにあらず。その證これおほし。いはく大日の三部經は。大日經金剛頂經蘇悉地經等これなり。彌勒の三部經は。上生經下生經成佛經等これなり。鎮護國家の三部經は。法華經仁王經金光明經等これなり。法華の三部經は。無量壽經法華經普賢經等これなり。これすなはち三部經と。なづくる證據なり。いまこの彌陀の三部經は。ある人師のいはく。淨土の教に三部あり。いはく雙卷無量壽經。觀無量壽經。阿彌陀經等これなり。これにていま淨土の。三部經となづくるなり。あるひはまた彌陀の三部經ともなづく。またある師のいはく。かの三部經

に。鼓音聲經をくわえて。四部となづくといへり。おもそ諸經の中にあるひは。往生淨土の法をとくあり。あるひはとかね經あり。華嚴經にはこれをとけり。すなはち四十華嚴の中の。普賢の十願これなり。大般若經の中に。すべてこれをとかず。法華經の中にこれをとけり。すなはち藥王品の即往安樂世界の文これなり。涅槃經にはこれをとかず。また眞言宗の中には。大日經金剛頂經蓮華部に。これとくといふとも。大日の身分なり。別とけるにはあらず。もろもろの小乘經には。すべて淨土をとかず。しかるに往生淨土をとくことは。この三部經にはしかず。かるがゆへに淨土の二宗には。この三部經をもて。その所縁とせり。またこの淨土の法門におひて。宗の名をたつることはじめてまふすにあらず。その證據これおほし。少々これをおたさば元曉の遊心安樂道に。淨土宗意本爲凡夫兼爲聖人といへる。その證なり。かの元

曉は華嚴宗の祖師なり。慈恩の西方要決に。依此一宗といふるなり。またその證なり。かの慈恩は法相宗の祖師也。迦才の淨土論には。此一宗竊要路たりといへる。またその證なり。善導觀經の疏に。眞宗匠遇といへる。またその證なり。かの迦才善導は。ともにこの淨土一宗を。もはらに信ずる人なり。自宗他宗の釋。すてにかくのごとし。しかのみならず。宗の名をたつることは。天台法相等の諸宗みな。師資相承による。しかるに淨土宗に。師資相承血脉次第あり。いはく菩提流支三藏。惠龍法師。道場法師。曇鸞法師。法上法師。道綽禪師。善導禪師。懷感禪師。小康法師等なり。菩提流支より法上にいたるまでは。道綽の安樂集にいだせり。自他宗の人師。すてに淨土一宗となづけたり。淨土宗の祖師。また次第に相承せり。これにていま相傳して。淨土宗となづくるものなり。しかるをこのむねをしらざるもがらは。むかしよ

りいまだ八宗のほかには浄土宗といふことをまか  
ずと。難破することも候へば。いさゝかまふし  
ひらき候なり。あよと諸宗の法門。淺深あり廣  
狭あり。すなはち眞言天台等の。諸大乘宗は。  
ひろくしてふかし。俱舎成實の小乗宗は。ひろ  
くしてあさし。この浄土宗は。せやくしてあさ  
し。しかればかの諸宗は。いさゝかまふし。ひて。  
機と教と相應せず。教はふかし機はあさし。教  
はひろし機はせばきがゆへなり。たとへば韻た  
かくしては。和することなきがごとし。またち  
ぬさき器に。大なるものをいゝがごとし。た  
この浄土の正宗のみ。機と教と相應せる法門  
なり。かるがゆゑにこれを修せば。かならず成  
就すべきなり。しかればすなはち。かの不相應  
の教におひては。いたはしく身心をついやすこ  
となかれ。たゞこの相應の法に歸して。すみや  
かに生死をいづべきなり。今日講讀せられたま  
へるところは。この三部の中の。雙卷無量壽經

と。阿彌陀經となり。まづ無量壽經には。はじめ  
に彌陀如來の。因位の本願をとく。次にはかの  
佛の果位の。二報莊嚴をとけり。しかればこの  
經には。阿彌陀佛の修因感果の功德をとくな  
り。乃至一一の本誓悲願。一一の願成就の文にあ  
さらかなり。釋するにいとまあらず。その中に  
衆生往生の。因果をとくとふは。すなはち念佛  
往生の願成就の。諸有衆生聞其名號の文。および  
三輩の文これなり。もし善導の御こゝろによら  
ば。この三輩の業因について。正雜の二行をたて  
たまへり。正行についてまた二あり。正定。助業  
なり。三輩ともに一向專念といへる。すなはち正  
定業なり。かの佛の本願に願するがゆへに。また  
そのほかに助業あり雜行あり。乃至まほよその  
三輩の中に。あつて。菩提心等の。餘善をとくと  
いへども上の本願をのぞむには。もはら彌陀の  
名號を稱念せしむるにあり。かるがゆへに一向  
專念といへり。上の本願といふは。四十八願の中

の第十八の。念佛往生の願をさすなり。一向の  
ことは。二三向に對する義なり。もし念佛のほか  
にならべて餘善を修せば。一向の義にそむくべ  
きなり。往生をもとめむ人は。もはらこの經に  
よて。かならずこのむねをこゝろすべきなり。  
次に阿彌陀經は。はじめに極樂世界の依正二報  
をとく。次には一日七日の念佛を修して。往生  
することをとけり。のちには六方の諸佛。念佛  
の一行にまひて。證誠護念したまふむねをとけ  
り。すなはちこの經には。餘行をとかずして。  
えらびて念佛の一行をとけり。乃至あよと念佛往  
生は。これ彌陀如來の本願の行なり。教主釋尊選  
要の法なり。六方諸佛證誠の説なり。餘行はし  
からず。そのむね經の文。および諸師の釋つぶ  
さなり。乃至また經を釋するに。佛の功德もあら  
はれ。佛を讀すれば經の功德もあらわるゝな  
り。また疏は經のこゝろを釋したるものなれば。  
疏を釋せむに經のこゝろあらはるべし。みなこ

れまなじものなり。まぢく釋するにあたは  
ず。乃至いさこの觀無量壽經に。二のこゝろあり。  
はじめには定散二善を修して往生することをあ  
かし。つきには名號を稱して。往生することを  
あかす。乃至清淨覺經の。信不信の因縁の文をひ  
けり。この文のこゝろは浄土の法門をとくとをさ  
いて。信向してみのけいよたつものは。過去に  
もこの法門をさきて。いさかかねてきく人な  
り。いま信するがゆへに。決定して浄土に往生  
すべし。またきけどもさかざるがごとくにて。  
すべて信ぜぬものは。はじめて三惡道よりきた  
りて。罪障いまだつきずして。こゝろに信向な  
きなり。いま信ぜぬがゆへに。また生死をいづ  
ることあるべからずといへるなり。證するところ  
ろは。往生人のこの法をば信じ候なり。乃至天台  
等のこゝろは。十三觀の上に。九品の三輩觀を  
くわへて。十六想觀となづく。この定散二善を  
わかつて。十三觀を定善となづけ。三福九品を

散善となづくることは。善導一師の御こゝろなり。乃至抑近來の僧尼を破戒の僧。破戒尼といふべからず。持戒の人破戒を制することは。正法像法の時となり。末法には無戒名字比丘なり。傳教大師末法燈明記に云。末法中に持戒の者ありといはく。これ怪異なり。市に虎あらむがごとし。たれかこれを信ずべきといへり。またいはく末法の中には。たゞ言教のみあて行證なし。もし戒法あらば破戒あるべし。すてに戒法なし。いづれの戒をか破せむ。破戒すらなほなし。いかにいはむや持戒をやといへり。まことに受戒の作法は。中國には持戒の僧。十人を請して戒師とす。邊地には五人を請して。戒師として戒をばうくるなり。しかるにこのころは。持戒の僧一人もとめ。いださむにえがたきなり。しかればうけての上にも。破戒といふことばもあれ。末代の近來は破戒なほなし。たゞ無戒の比丘なりとまふすなり。この經に破戒をとく

ことは。正像に約してときたまへるなり。乃至次に名號を稱して。往生することをあかすといふは。佛阿難につげたまはく。なんぢよくこの語をたもて。この語をたもてといふは。すなわちこれ無量壽佛の。御名をたもてとなりとのたまへり。善導これを釋していはく。佛告阿難汝好持是語と。いふより已下は。まさしく彌陀の名號を付屬して。退代に流通することをあかす。かみよりこのかた。定散兩門の益をとくといふども。佛の本願をのぞむには。こゝろ衆生をして。一向にもはら彌陀佛の。みなを稱するにありとのたまへり。あよそこの經の中には。定散の諸行をとくといへども。その定散をもては。付屬したまはず。たゞ念佛の一行をもて。阿難に付屬して。未來に流通するなり。退代に流通すといふは。はるかに法滅の百歲までをさす。すなわち末法萬年ののち。佛法みな滅して。三寶の名字もさかざらむとき。たゞこの念佛の一

行のみとてまりて。百歲ましますべしとなり。しかれば聖道門の法文もみな滅し。十方淨土の往生もまた滅し上生都率もまたうせ。諸行往生もみなうせたまはむとき。たゞこの念佛往生の一門のみとてまりて。そのときも一念にかならず。往生すべしといへり。かるがゆへにこれをさして。とをき世といふなり。これすなわち遠をあげて。近を攝するなり。佛の本願をのぞむといふは。彌陀如來の四十八願の中の。第十八の願ををしるなり。いま教主釋尊。定散二善の諸行をすて。念佛の一行を付屬したまふことも。彌陀の本願の行なるがゆへなり。一向專念といふは。雙卷經にとくところの。三輩のものの中の。一向專念をしるなり。一向のことは餘をすつることばなり。この經にははじめにひろく定散をとくといへども。のちには一向に念佛をえらびて付屬し流通したまへるなり。しかればとくは彌陀の本願にしたがひ。

ちかくは釋尊の付屬をうけんともはく。一向に念佛の一行を修して。往生をもとむべきなり。あほよそ念佛往生は。諸行往生にすぐれたること。あほくの義あり。一には因位の本願なり。いはく。彌陀如來の因位。法藏菩薩のとき。四十八の誓願をおこして。淨土をまふけて佛にならむと。願じたまひしとき。衆生往生の行をたて。えらびさだめたまひしに。餘行をばえらびすて。たゞ念佛の一行を選定して。往生の行にたてたまへり。これを選定の願といふことは。大阿彌陀經の説なり。二には光明攝取なり。これは阿彌陀佛因位の本願を稱念して。相好の光明をもて。念佛の衆生を攝取して。すてたまはずして。往生せさせたまふなり。餘の行者をば攝取したまはず。三には彌陀みづからのかまはく。これはこれ跋陀和菩薩。極樂世界にまうて。いづれの行を修してか。このくに往生し候べきと。阿彌陀佛にとひたてまつりし

かば。佛こたへてのたまはく。わがくに生ぜむとちもはゞ。わが名を念じて。休息することなかれ。すなわち往生することぞ。えむとのたまへり。餘行をばすゝめたまはず。四には釋迦の付屬にいはく。いまこの經に。念佛を付屬流通したまへり。餘行をば付屬せず。五には諸佛證誠。これは阿彌陀經にときたまへるところなり。釋迦佛えらびて。念佛往生のむねをときたまへば。六方の諸佛のくおなじくほめ。おなじくすゝめて。廣長の御したをのべて。あまねく三千大千世界におほふて。證誠したまへり。これすなはち一切衆生をして。念佛して往生することは。決定してうたがふべからずと。信ぜしむ料なり。餘行をばかくのごとく。證誠したまはず。六には法滅の往生。いはく萬年三寶滅斯經住百年爾時聞一念皆當得生彼と。いふて末法萬年ののち。たゞ念佛の一行のみとゞまりて。往生すべしといへることなり。餘行はしからず。し

かのみならず。下品下生の十惡の罪人。臨終のとき聞經と稱佛と二善をならべたりといへども。化佛來迎してほめたまふに。汝稱佛名故。諸罪消滅我來汝とほめて。いまだ聞經の事をばほめたまはず。また雙卷經に。三輩往生の業をとく中に。菩提心および起立塔像等の。餘の行をもとくといへども。流通のところにいなりて。其有得聞。彼佛名號。歡喜踊躍。乃至一念。當知此人。爲得大利。則是具足。無上功德とほめて餘行をさして。無上功德とはほめたまはず。念佛往生の旨要をとるに。これにありと。又云佛の功德を百千萬劫のあひだ。晝夜にとくともさわめつくすべからず。これによつて。教主釋尊。かの阿彌陀佛の功德を稱揚したまふにも。要の中の要をとりて。略してこの三部妙典をときたまへり。佛すてに畧したまへり。當座の惡僧。いかゞはしくするにたえむ。たゞ善根成就のために。かくのごとく讚嘆したてまつるべし。

阿彌陀如來の内證外用の。功德無量なりといえども。要をとるに名號の功德にはしからず。このゆへに阿彌陀佛も。ことにわが名號をして。衆生を濟度し。また釋迦大師も。おほくかのほつけの名號をほめて。未來に流通したまへり。しかればいまその名號について。讚嘆したてまつらば。阿彌陀といふは。これ天竺の梵語なり。こゝには翻譯して。無量壽佛といふ。無量光といへり。または無邊光佛無碍光佛炎王光佛清淨光佛歡喜光佛智慧光佛不斷光佛難思光佛無稱光佛超日月光佛といへり。こゝにしりぬ名號の中に。光明と壽命との。二の義をそなへたりといふことを。かの佛の功德の中には。壽命を本とし。光明をすぐれたりとするゆゑなり。しかればまた光明壽命の。二の功德をほめたてまつるべし。光明の功德をあかさば。はじめに無量光は。經にのたまはく。無量壽佛に八萬四千の相あり。一一の相にをの。八萬四千の隨形

好あり。一一の好にまた八萬四千の光明あり。一一の光明あまねく。十方世界をてらすに。念佛の衆生を攝取して。すてたまはずといへり。惠心これをかむがへていはく。一一の相の中に。おのく七百五俱胝六百萬の光明を具せり。熾然赫灼たりといへり。一相よりいづるところの光明かくのごとし。いはむや八萬四千の相をや。まことに算數のちよぶところにあらず。かるがゆへに無量光といふ。つぎに無邊光といふは。かの佛の光明そのかずかくのごとし。無量のみにあらず。てらすところも。また邊際あること。なきがゆへに無邊光といふ。つぎに無碍光は。この界の日月燈燭等のごときは。ひとへなりといへどもものをへだつれば。そのひかりとほることなし。もしかの佛の光明。ものにさえらるれば。この界の衆生。たとひ念佛すといふとも。その光輝をかぶることを得べからず。そのゆゑはかの極樂世界と。この娑婆世界とのあひ

だに。十萬億の三千大千世界をへだてたり。その一二三千大千世界に。あの一四重の鐵圍山あり。いはゆるまづ一四天下をめぐれる鐵圍山あり。たかさ須彌山とひとし。つぎに小千界をめぐれる鐵圍山あり。たかさ第六天にいたる。つぎに中千界をめぐれる鐵圍山あり。たかさ色界の初禪にいたる。次に大千界をめぐれる鐵圍山あり。たかさ第二禪にいたれり。しかればすなはち。もし無碍光にあらずば。一世界をすら。なほとほるべからず。いかにいはむや十萬億の世界をや。しかるにかの佛の光明。かれこれそばくの大小。諸山をとほりてらして。この界の念佛衆生を攝取したまふに。障碍あることなし。餘の十方世界を照攝したまふことも。またかくのごとし。かるがゆへに無碍光といふ。次に清淨光は人師釋していはく。無貪の善根より。生ずるところのひかりなり。食に二あり姪食財食なり。清淨といふは。たゞ汚穢不淨を除却す

るにはあらず。その二の食を斷除するなり。食を不淨となづくるゆへなり。もし戒に約せば。不姪戒と不慳貪戒とにあたれり。しかれば法藏比丘。むかし不姪不慳貪所生の光といふ。この光にふるゝものは。かならず貪欲のつみを滅す。もし人あて貪欲さかりにして。不姪不慳貪の戒を。たもつことゑされども。こゝろをいたして。もはらこの阿彌陀佛の。名號を稱念すれば。すなはちかの佛。無貪清淨の光をはなちて。照觸攝取したまふゆへに。姪食財食の不淨のぞこる。無戒破戒の罪徳滅して。無貪善根の身となりて持戒清淨の人とひとしきなり。次に歡喜光は。これはこれ無瞋善根所生の光なり。ひさしく不瞋恚戒をたもちてこの光をゑたまへり。かるがゆへに無瞋所生の光といふ。この光にふるゝものは。瞋恚のつみを滅す。しかれば瞋増盛の人なりといふとも。もはら念佛を修すればかの歡喜光をもて。攝取した

まふゆゑに。瞋恚のつみ滅して。忍辱のひとあなじ。これまたささの清淨光の貪欲のつみ滅するがごとし。次に智慧光は。これはこれ無癡の善根所生の光なり。ひさしく一切智慧をまなふて。愚癡の煩惱をたちつくして。この光をゑたまへるがゆへに。無癡所生の光といふ。この光はまた愚癡のつみを滅す。しかれば無智の念佛者なりといふとも。かの智慧の光をして。てらし攝たまふがゆへに。すなはち愚癡の徳を滅して。智慧は勝劣あることなし。またこの光のごとくしりぬべし。かくのごとくして。十二光の名ましますといふとも。要をとるにこれにあり。凡かの佛の光明。功德の中にはかくのごとさの義をそなふたり。くはしくあかさば多種あるべし。あほきにわかちて二あり。一には常光。二には神通光なり。はじめに常光といふは。諸佛の常光。あの一〇意樂にしたがふて。遠近長短あり。あるひは常光をもて。あの一〇一尋相

といへり。釋迦佛の常光のごときこれなり。あるひは七尺をてらし。あるひは一里をてらし。あるひは一由旬をてらし。あるひは二三四五乃至百千由旬をてらし。あるひは一四天下をてらし。あるひは一佛世界をてらし。あるひは二佛三佛。乃至百千佛の世界をてらせり。この阿彌陀佛の常光は。八方上下。無央數の諸佛の國土にあひて。てらさずといふところなし。八方上下は極樂につゐて。方角ををしふるなり。常光について異説あり。すなはち平等覺經には。別して頭光をしへたり。觀經にはすべて身光といへり。かくのごとき異説あり。往生要集に勸たり。みるべし。常光といふは。長時不斷にてらす光なり。次に神通光といふは。ことに別時にてらす光なり。釋迦如來の法華經をとかむとしたまひしとき。東方萬八千の土をてらしたまふがごときは。すなはち神通光なり。阿彌陀佛の神通光は。攝取不捨の光明なり。念佛の衆生ある



ときはてらし。念佛の衆生なきときは。てらすことなきがゆゑなり。善導和尚觀經の疏に。この攝取の光明を釋したまへるしたに。光照の遠近をあかすといへり。この念佛衆生の居所の遠近について。攝取の光明も遠近あるべしといふ義なり。たとひ一ついそのうちに住したりとも。東によりてゐたらむ人の。念佛まふさむには。攝取の光明とをくてらし。西によりてゐたらむ人の。念佛まふさむには光明ちかくてらすべし。これをもてこゝろうれば。一城のうち一國のうち。一閻浮提のうち。三千世界の内。乃至他方各別の世界まで。かくのごとしとするべし。しかれば念佛衆生につれて、光照の遠近ありと釋したまへる。まことにいわれたることこそおぼゑ候へ。これすなはち阿彌陀佛の神通光なり。諸佛の功德はいづれの功德も。みな法界に遍ずといえども。餘の功德は。その相あらはるることなし。たゞ光明のみまさしく。法界に遍ず

る相を。あらわせる功德なり。かるがゆへにもろくくの功德の中には。光明をもて最勝なりと釋したるなり。また諸佛の光の中には。彌陀如来の光明。なほまたすぐれたまへり。このゆへに教主釋尊。ほめてのたまはく。無量壽佛。威神光明。最尊第一。諸佛光明。所不能及とのたまへり。またいはく。我說無量壽佛光明威神巍巍殊妙。晝夜一劫。尙未能盡とのたまへり。これはこれかの佛の光明と。餘の佛の光明とを相對して。その勝劣を较量せむに。彌陀佛におよばざる佛を。かすきむによるひる一劫すとも。そのかずをしりつくすべからずとのたまへるなり。かくのごとく殊勝の光をえたまふことは。すなはち願行にこたへたり。いはくかの佛。法藏比丘のむかし。世自在王佛のみもとにして。二百一十億の諸佛の光明をみたてまつりて。選擇思惟して。願じていはく。設我得佛光明有能限量下至不照百千億那由他諸佛國者不取正覺と

のたまへり。この願をまこしてのち。光載永劫のあひだ。積功累徳して。願行ともにあらわして。この光をえたまへり。佛の在世に燈指比丘といふ人ありき。生しとて指より光をはなちて。十里をてらすことありき。のちに佛の御弟子となりて。出家して羅漢果をえたり。指より光をはなつ因縁によりて。なづけて燈指比丘といへり。過去九十一劫のむかし。毘婆尸佛のときに。ふるき佛像の指の損じたまひたるを。修理したてまつりたりし功德によりて。すなはち指より。光をはなつ報をうけたるなり。また梵摩比丘といふ人ありき。身より光をはなちて。一由旬をてらせり。これ過去に佛に燈明をたてまつりたりしがゆへなり。また佛の御弟子阿那律は。佛の説法の座に睡眠したることありき。佛これを種々彈呵したまふ。阿那律すなはち懺悔のこゝろをまこして睡眠を斷ず。七日をへてのち目開ながら。そのまなこみえずなりぬ。これ

を醫師にとふに。醫師こたえていはく。人は食をもて命とす。眼はねぶりをもて食とす。もし人七日食せざらむに。命あにつきざらむや。しかればすなはち。醫療のまよふところにあらず。命つさぬる人。醫療由なきことといへり。そのとき佛これをあはれみて。天眼の法をしへたまふ。すなはちこれを修して。かへりて天眼通をえたり。すなはち天眼第一阿那律といへるこれなり。過去に佛のものをぬすまむとおもふて。塔の中にいたるに。燈明すてにきえなむとするをみて。弓のはずをもてこれをかきあぐ。そのときに忽然として。改悔のこゝろをおこして。あまつさへ無上道心をおこしたりき。それよりこのかた生々世々。無量の福をえたり。いま釋迦出世のとき。ついに得脱して。またかくのごとく天眼通をえたり。これすなわちかの燈明をかゝげたりし功德によてなり。乃至次に壽命の功德といふは。諸佛壽命意樂にしたがふ

て長短あり。これにて惠心僧都。四句をつくれり。あるひは能化の佛は命ながく。所化の衆生は命みじかきあり。花光如來のごとし。佛の命は八十小劫。衆生の命は十二小劫なり。あるひは能化の佛の命みじかく。所化の衆生は命ながきあり。月面如來のごとし。佛の命一日一夜。衆生の命は五十歳なり。あるひは能化所化。ともに命みじかきあり。釋迦如來のごとし。佛もともに命ながきあり。阿彌陀如來のごとし。佛も衆生もともに無量歳なり。かるがゆへに經にのたまはく。佛告阿難。無量壽佛壽命長久不可勝計。汝寧知乎。假使十方世界無量衆生皆得人身。悉令成就。就聲聞緣覺。都共集會。禪思一心。竭其智力。於百千萬劫。悉共推計其壽命長遠之數。不能窮盡。知其限極。聲聞菩薩天人之衆。壽命長短亦復如是。非算數譬喻所不能知也。とのたまへり。たゞもし神通の大菩薩等のかずへたまはむには。

一大恒沙劫なりと。大論のころをもて惠心勸たり。この數二乘凡夫のかずへて。しるべきかすにあらす。かるがゆへに無量とはいへるなり。すべて佛の功德を論ずるに。能持所持の二義あり。壽命をもて能持といひ。自餘のもろくの功德をば。ことごとく所持といふなり。壽命はよくもろくの功德をたもつ。一切の萬徳みなことごとく。壽命にもたるとがゆへなり。これは常座の道師がわたくしの義なり。すなはちかの佛の。相好光明說法利生等の一切功德。まよび國土の一切莊嚴等の。もろくの快樂のごとく。たゞかの佛の命のながく。ましますがゆへの事なり。もし命なくば。かれらの功德莊嚴等。なにによりてかともまるべき。しかれば四十八願の中にも。壽命無量の願に。自餘の諸願をばあさめたるなり。たとひ第十八の念佛往生の願。ひろく諸機を攝して。濟度するにたりといへども。佛の御命もしみじかくば。その願な

ほひろまらじ。そのゆへはもし百歳千歳。もしは一切二劫にても。ましまさまじかばいまのときに衆生は。ことごとくその願にもれなまし。かの佛成佛してのち十劫をすぎたるがゆへなり。これをもてこれをあもへば。濟度利生の方便は。壽命の長遠なるにすぎたるはなく。大慈大悲の誓願も壽命の無量なるにあらはるゝものなり。これ娑婆世界の人も。命をもて第一のたからとす。七珍萬寶をくらの内にみてたれども。綾羅錦繡をはこのそにたくわへたるも。命のいきたるほどこそ。わか資にてもある。まなこ閉ぬるのちは。みな人のものなり。しかれば乃至彌陀如來の壽命無量の願を。こゝしたまひけむも。御身のため長壽の果報を。もとめたまふにはあらず。濟度利生のひさしかるべきために。また衆生をして欣求のころを。あこさしめんためなり。一切衆生はみな。命ながくらむことをねがふがゆへなり。凡かの佛の功德の中に

は。壽命無量の徳をとなへたまふに。すぎたることは候はぬなり。このゆへに雙卷經の題にも。無量壽經といへども。無量光經とはいはず。隋朝よりさきの舊譯には。みな經の中に宗とあることをえらびて。證をぬき略を存して。その題目とするなり。すなはちこの經の詮には。阿彌陀如來の功德をとけるなり。その功德の中には光明無量。壽命無量の二の義をとなへたり。その中にはまた壽命を最勝なるゆへに。無量壽經となづくるなり。また釋迦如來の功德の中にも。久遠實成の。宗をあらわせるをもて。殊勝甚深のこととせり。すなはち法華經に。壽量品とてとかれたり。二十八品の中には。この品をもてすぐれたりとす。まさにするべし諸佛の功德にも。壽命をもて第一の功德とし。衆生のたからにも命をもて。第一のたからとすといふことを。その命ながき果報をうることを。衆生に飲食をあたへ。またもの命をころさざるを業因

とするなり。因と果と相應することなれば。食はすなはち命をつくがゆへに。食をあたふるはすなはち命をあたふるなり。不殺生戒をたもつも。また衆生の命をたすくるなり。かるがゆへに飲食をもて衆に施與し。慈悲に任して不殺生戒をたもてば。かならず長命の果報をえたり。しかるにかの阿彌陀如來は。すなはち願行あひたすけて。この壽命無量の徳をば成就したまへるなり。願といふは四十八願の中の。第十三の願にいはく。設我得佛壽命有能限量。下至百千億那由他劫。不取正覺。とのたまへり。行といふはかの願をたてたまふてのち。無央數劫のあひだ。また不殺生戒をたもてり。また一切の凡聖におひて。飲食醫藥を供養し施與したまへるなり。これは阿彌陀如來の壽命の功德なり。乃至かの佛かくのごとく壽命無量なりといえども。また涅槃隱沒の期まします。これについてあわれなることを候へ。道綽禪師念佛の衆

生におひて。始終兩益ありと釋したまへる。その終益をあかすに。すなはち觀音授記經をひきていはく。阿彌陀佛住世の命兆載永劫のち。滅度したまひて。たゞ觀音勢至衆生を接引したまふことあるべし。そのときに一向にもはら念佛して。往生したる衆生のみ。つねに佛をみたてまつる。滅したまはぬがごとし。餘行往生の衆生は。みたてまつることあらずといへり。往生をえてむ上に。そのときまでのことはあまりことぞ。とてもかくても。ありなむとぞばえぬべく候へども。そのときにのぞみては。かなしかるべきことにてこそ候へ。かの釋迦入滅のありさまにても。おしはかられ候なり。證果の羅漢深位の大士も。非滅現滅のことはりをしりながら。當時別離のかなしみにたえず。天にあらざ地にふし。哀哭し悲泣しき。いはんや未證の衆生をや。淺識の凡愚をや。乃至龍神八部も五十二類も。凡そ涅槃の一會悲歎の。なみだをな

がさずといふことなし。しかのみならず婆羅林のこすえ抜提河の水。すべて山川溪谷草木樹林も。みな哀傷のいろをあらはしき。しかれば過去をさきて。未來をおもひ。穢土にならずらへて淨土をするに。かの阿彌陀佛の衆寶。莊嚴の國土をかくれ。涅槃寂滅の道場にいたりたまひてのち。八萬四千の相好。ふたゝび現することなく。無量無邊の光明はながくてらすことなくば。かの會の聖衆人天等。悲哀のおもひ戀慕のこゝろざし。いかばかりかは候べき。七寶自然のはやしなりとも。八功如意の水なりとも。名華軟草のいろも。鳧雁鴛鴦のこえも。いかゞそのとさをしらざらむや。淨穢は土ことなりといへども。世尊の滅度すてにことなることなし。迷悟はこゝろかわるといへども。所化の悲戀なんぞかはることあらむや。この娑婆世界の凡夫具縛の人の心事相應せず。意樂各別にて。つねに違背し。たがひに厭惡をするだにも。あるひ

は夫妻のちぎりをむすび。あるひは朋友のこばをもなして。しばらくもなつさひ。また馴ねれば遠近のさかひをへだて。前後の生をあらため。かくのごとく生をも死をも。わかれをつぐるときには。なごりをおしひこゝろ。たちまちにもよほし。かなしみにたえず。なみだをさへがたきことにてこそは候へ。いかにいはむや。かの佛内には慈悲哀愍のこゝろをのみたくはへてまします。なれたてまつるにしがふて。いよゝむつまじく外には見者無厭の徳をなへてまします。みまいらすること。いやめづらなるをや。まことに無量永劫があひだ。あさゆふに萬徳圓滿のみかほをおがみたてまつり。晝夜に四辨無窮の御音になれたてまつりて。恭敬瞻仰し隨逐給仕して。すてたらむこゝちに。ながくみたてまつらざらむこと。なりたらむばかりかなしかるべきことや候べき。無有衆苦のさかひ。離諸妄想のところなりといふ

とも。このこと一事はさこそおぼへ候らめとぞ  
おぼえ候。それにもとのごとくみたてまつり  
て。あらたまることなからむことは。まことに  
あはれにありがたきことこそおぼへ候へ。こ  
れすなはち念佛一行。かの佛の本願なるがゆへ  
なり。おなじく往生をねがはむ人は。専修念佛  
の一門よりいべきなり。

康元元年丙辰十月十三日

愚禿親鸞八十四歳書之

康元二年三月五日書寫之

次に雙卷無量壽經。淨土三部經の中にはこの經  
を根本とするなり。其故は一切の諸善は願を根  
本とす。而に此經には。彌陀如來の因位の願を  
ときていはく。乃往過去久遠無量無央數劫に佛  
ましましき。世自在王佛とまふしき。そのとき  
一人の國王ありき。佛の説法をきいて。無上道  
心をおこして國をすて王をすて。家をいて、  
沙門となれり。なづけて。法藏比丘といふ。す

なはち世自在王佛の所に詣て。右にめぐること  
三市して。頂跪合掌して佛をほめたてまつり  
てまうしてまうさく。われ淨土をまうけて。衆  
生を度せむとおもふねがわくばわがために。經  
法をときたまへと。そのとき世自在王佛。法藏  
比丘のために。二百一十億の諸佛の淨土の天人  
の善惡。國土の微妙とき。また現じてこれを  
あたへたまふ。法藏比丘佛の所説をき。また  
嚴淨の國土をことごとくみをはりてのち。五劫  
のあひだ思惟し取捨して。二百一十億の淨土の  
中よりえらびとりて。四十八の誓願をまうけた  
り。この二百一十億の諸佛のくの中より。善  
惡の中には惡をすて、善をとり。微妙の中には  
塵をすて、妙をとる。かくのごとく取捨し選擇  
して。この四十八願をこそせるがゆへに。この  
經の同本異譯の大阿彌陀經には。この願を選擇  
の願ととかれたり。その選擇のやう。おろく  
まうしひらき候はむ。まづはじめの無三惡趣の

願は。かの諸佛の國土の中に。三惡道あるをば  
えらびすて。三惡道なきをば。えらびとりて  
わが願とせり。次に不更惡趣の願は。かの諸佛  
のくの中に。たとひ三惡道なしといへども。  
かの國の衆生。また他方の三惡道に。おつるこ  
とあるくにをば。えらびすて。すべて三惡道  
にかへらざるくにをえらびとりて。わが願とせ  
るなり。次に悉皆金色の願。次に無有好醜の願。  
二の願みなかくのごとしとしるべし。第十八の  
念佛往生の願は。かの二百一十億の諸佛の國土  
の中に。あるひは布施をもて往生の行とするく  
にあり。あるひは持戒および。禪定智慧等。乃  
至發菩提心。持經。持呪等。孝養父母奉事師長  
等。かくのごとき種種の行をもて。おのく  
往生の行とするくにあり。あるひはまたもは  
ら。そのくにの教主の名號を稱念するをもて。  
往生の行とするくにあり。しかるにかの法藏  
比丘餘行をもて。往生の行とする國をばえらび

すて。ただ名號を稱念して。往生の行とする  
國をえらびとりて。わが國土の往生の行も。か  
くのごとくならむとたてたまへるなり。次に來  
迎引接の願。次に係念定生の願。みなかくのご  
とく。えらびとりて願じたまへり。凡そはじめ  
無三惡趣の願より。あわり得三法忍の願にいた  
るまで。思惟し選擇するあひだ。五劫をばおろ  
りたるなり。かくのごとく選擇し攝取してのち  
に佛のみもとに詣して一一にこれをとく。その  
四十八願ときおはりてのち。また偈をもてまふ  
さく。我建超世願。必至無上道。斯願不滿足。誓  
不成正覺。乃至斯願若剋果。大千應感動。虛空諸  
天人。當雨珍妙華と。かの比丘この偈をときお  
はるに。ときに應じて。あまねく地六種に震動  
し。天より妙華そのうゑに散じて。自然の音樂  
空の中にさこへ。また空の中にほめていはく決  
定してかならず。無上正覺なるべしと。しかれ  
ばかの法藏比丘の四十八願は。一一に成就して。

決定して佛になるべしといふことは。そのはじめ發願のとき。世自在王佛の御まへにして。諸魔龍神八部。一切大衆の中にして。かねてあらわれたることなり。しかればかの世自在王佛の法の中には。法藏菩薩の四十八願經とて。受持讀誦しき。いま釋迦の法の中なりといふともかの佛の願力をあそぎて。かのくに、むされむとねがふは。この法藏菩薩四十八願の法門にいるなり。すなはち道綽禪師善導和尚等も。この法藏菩薩の四十八願法門にいりたまへるなり。かの華嚴宗の人は。華嚴經をたもち。あるひは三論宗の人は。般若經等をたもち。あるひは法相宗の人は。瑜伽唯識をたもち。あるひは天台宗の人は。法華をたもち。あるひは善無畏は。大日經をたもち。金剛智は。金剛頂經をたもち。かくのごとくをのく宗にしたがふて。依經依論をたもちたり。いま淨土宗を宗とせむ人は。この經によつて四十八願法門をたもちべきなり。この

經をたもちといふは。すなはち彌陀の本願をたもちなり彌陀の本願といふは。法藏菩薩の四十八願法門なり。四十八願の中に第十八の念佛往生の願を本體とするなり。かるがゆへに善導のたまはく。弘誓多門四十八。偏標念佛最爲親といへり。念佛往生といふことは。みなもこの本願よりふこれり。しかれば觀經彌陀經にとくところの。念佛往生のひねも。乃至餘の經の中にとくところも。みなこの經にとけるところの。本願を根本とするなり。なにをもてかこれをしるとならば。觀經にとけるところの光明攝取を。善導釋したまふに。唯有念佛蒙光攝。當知本願最爲強といへり。この釋のこゝろ本願なるがゆへに。光明も攝取するときこへたり。またおなじ。經の上品上生に聞經と。稱佛とをならべて。とくといふども。化佛きたりてほめたまふには。たゞ稱佛の功をのみほめて。聞經をほめたまはずといへり。善導釋していはく。望佛願

意者。唯勸正念稱名。往生義疾。不同雜散之業といへり。これまた本願なるがゆへに。稱佛をほめたまふときこへたり。またおなじ經の付屬の文を釋したまふにも。望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名といへり。これまた彌陀の本願なるがゆへに。釋尊も付屬し。流通せしめたまふときこへたり。また阿彌陀經にとけるところの。一日七日の念佛を。善導ほめたまふに。直爲彌陀弘誓重致使凡夫念即生といへり。これまた一日七日の念佛も。彌陀の本願なるがゆへに往生するときこへたり。乃至雙卷經の中にも。三輩已下の諸文はみな。かみの本願によるなり。凡そこの三部經にかざらず。一切諸經の中に。あかすところの念佛往生は。みなこの經の本願を。のぞまむとてとけるなり。しるべし。抑法藏菩薩いかなれば餘行をすて。たゞ稱名念佛の一行をもて。本願にたてたまへるといふに。これに二の義あり。一には念佛は殊勝の功德なるがゆ

へに。二には念佛は行じやすきによつて。諸機にあまねきがゆへに。はじめに殊勝の功德なるがゆへにといふは。かの佛の因果總別の一切の萬德。みなことごとく名號にあらわるゝがゆへに。一たびも南無阿彌陀佛となふるに。大善根をうるなり。こゝをもて西方要決にいはく。諸佛願行。成此果名。但能念號。具包衆德。故成大善。不廢往生といへり。またこの經にすなはち一念をさして。無上功德とほめたり。しかれば殊勝の大善根なるがゆへに。ゑらびて本願としたまへるなり。二には修しやすきがゆへにといふは。南無阿彌陀佛とまふすことは。いかなる愚癡のものも。おさなきも老たるも。やすくまふさるゝがゆへに。平等の慈悲の御こゝろをもて。その行をたてたまへり。もし布施をもて本願とせば。貧窮困乏のともがら。さだめて往生ののぞみをたゝむ。もし持戒をもて本願とせば。破戒無戒のたぐひ。また往生ののぞみを

たつべし。もし禪定をもて本願とせば。散亂鹿動のともがら。往生すべからず。もし智慧をもて本願とせば。愚鈍下智のもの往生すべからず。自餘の諸行もこれにならずらへてしるべし。しかるに布施持戒等の諸行にたえたるものは。きはめてすくなく。貧窮破戒散亂愚癡のともがらは。はなはだおほし。しかればかみの諸行をもて。本願としたまひたらましかば。往生をうるものはすくなく。往生せぬものはおほからまし。これにて法藏菩薩平等の慈悲にもよをされて。あまねく一切を攝せむがために。かの諸行をもてば往生の本願とせず。たゞ稱名念佛の一行をもて。その本願としたまへるなり。かるがゆへに法照禪師のいはく於未來世惡衆生。稱念西方彌陀號。依佛本願出生死。以直心故生極樂と云。又云

彼佛因中立弘誓。聞名念我總迎來。不簡貧窮將富貴。不簡不智與高才。

歡喜踊躍。乃至一念。當知此人。爲得大利。即是具足。無上功德といへり。善導の御こゝろは。上盡一形。下至一念。無上功德なりと。餘師のこゝろによらば。たゞ少をあげて。多をあらはすなりといへり。次に當來之世。經道滅盡。我以慈悲。哀愍特留此經。止住百歲。其有衆生。值此經者。隨意所願。皆可得度といへり。この末法萬年のち。三寶滅盡のときの往生をまもふに。一向專念の往生の義をあかすなり。そのゆへは菩提心をとさたる。諸經みな滅しなば。なによてか菩提心の行相をもしらむ。大小の戒經みなうせなば。なによてか二百五十戒をも。四十八戒をもたもたむ。佛像あるまじければ造像起塔の善根もあるべからず。乃至持經持咒等もまたかくのごとし。そのとさになほ一念するに。往生すといへり。すなはち善導いはく。爾時聞一念。皆當得生彼といへり。かれをもていまをおもふに。念佛の行者は。さらに餘

不簡多聞持淨戒。不簡破戒罪根深。但使回心多念佛。能令瓦礫變成金云云。かくのごとく誓願をたてたりとも。その願成就せずば。まさにたのむべきにあらず。しかるにかの法藏菩薩の願は。一一に成就して。すてに佛になりたまへり。その中にこの念佛往生の願成就の文にはく。諸有衆生。聞其名號。信心歡喜。乃至一念。至心迴向。願生彼國。即得往生。住不退轉と云。次に三輩の往生は。みな一向專念無量壽佛といへり。この中に菩提心等の諸善ありといへども。かみの本願にのぞむに一向にもはらかの佛の名號を念ずるなり。例せばかの觀經の疏に釋せるがごとし。かみよりこのかた定散兩門の益をとくといへども。佛の本願にのぞむには。こゝろ衆生をして。一向にもはら彌陀佛のみなを稱するにありといへり。望佛本願といふは。この三輩の中の一方向專念をさすなり。次に流通にいたて。其有待聞。彼佛名號。

の善根におひて。一塵具せずとも決定して往生すべきなり。しかれば菩提心をまこさば。いかてか往生すべき。戒をたもたずしては。いかて往生すべき。智慧なくしては。いかて往生すべき。妄念をしづめずしては。いかて往生すべきなりと。かくのごとくまふす人々候は。この經をこゝろぬにて候なり。懷感禪師この文を釋せるに。說戒受戒もみな成すべからず。甚深の大乗もしるべからず。ささながらて隱没しぬれば。たゞ念佛のみ。さとりやすくして。淺識の凡愚。なほよく修習して。利益をうべしといへり。まことに戒法滅しなば。持戒あるべからず。大乘みな滅しなば。發菩提心讀誦大乘もあるべからずと。いふことあきらかなり。淺識凡愚といへりしるべし。智慧にあらずといふことを。かくのごとくともがらの。たゞ稱名念佛の一行を修して。一聲にて往生すべしといへるなり。これすなはち彌陀の本願なるがゆへなり。すなは

ちかの大悲本願の。ととく一切を攝する義なり。次に阿彌陀經は。不可以少善根。福德因縁。得生彼國。舍利弗若有善男子。善女人。聞說阿彌陀佛。執持名號。若一日乃至七日といへり。善導和尚釋にいはく。隨緣雜善恐難生。故使如來選要法といへり。こゝにしりぬ。雜善をもてば。少善根となづく。念佛をもて多善根となづく。念佛をもて多善根といふことを。この經はすなはち。少善根なる雜善をすて。もはら多善根の念佛をとけるなり。ちかごろ唐よりわたりたる。龍舒淨土文とまふす文候。それに阿彌陀經の脫文とまふして。二十一字ある文をいだせり。一心不亂の下に。專持名號。以稱名故。諸罪消滅。即是多善根。福德因縁といへり。すなはちかの文をいだしていはく。いまのよにつたわるところの本に。この二十一字を脱せりといへり。この脫文なしといふとも。たゞ義をもておもふに。多少の義ありといへどもまゝしく念

佛をさして。多善根といへる文。まことに大切なり。次に六方如來の證誠をとけり。かの六方諸佛の證誠。たゞこの經にのみかぎりて。證誠したまふににたれども。實をもて論ずれば。この經のみにかぎらず。すべて念佛往生を證誠するなり。しかれどもし雙卷經について證誠せば。かの經に念佛往生の本願をとくといへども。三輩の中に菩提心等の行あるがゆへに。念佛の一行にかぎるとみゆべからず。又觀經について證誠せば。かの經にえらむて。念佛を付屬すといへども。まづは定散の諸門をとくがゆへに。また念佛の一行にかぎるとみゆべからず。こゝをもてたゞ一向にもはら念佛をときたる。この經を證誠したまふなり。たゞ證誠のみことは。この經にありといへども。證誠の義はかの雙卷觀經にも通ずべし。雙卷觀經のみにあらずもし念佛往生のむねをとかむ經をば。ことごとく六方如來の證誠あるべしとこゝろうべきな

り。かるがゆへに。天台の十疑論にいはく。阿彌陀經。大無量壽經。鼓音聲陀羅尼經等にいはく。釋迦佛經をときたまふとき。有十方世界各恒河沙諸佛。舒其舌相。遍覆三千世界。證誠一切衆生念阿彌陀佛本願。大悲願力故。決定得生極樂世界といへり乃至次に往生淨土の祖師の。五の影像を圖繪したまふに。おほくこゝろあり。まづ恩徳を報ぜむがため。次には賢をみては。ひとしからむことをおもふゆへなり。天台宗を學せん人は。南岳天台を見たてまつりて。ひとしからばやとおもひ。眞言をならはむ人は。不空善無畏をみては。ひとしからむとおもひ。華嚴宗の人は。香象惠遠のごとく。ならむとおもひ。法相宗の人は。玄奘慈恩のごとく。ならむとおもひ。三論の學者は。淨影大師をもたらやみ。持律の行者は。道宣律師をもとせからずおもふべきなり。しかればいま淨土をねがはむ人。その宗の祖師をまなぶべきなり。し

かるに淨土宗の師資相承に二の説あり。安樂集のごときは。菩提流支。惠龍法師。道場法師。曇鸞法師。齊朝法上法師等の六祖をいだせり。今また五祖といふは。曇鸞法師。道綽禪師。善導禪師。懷感禪師。小康法師等なり。曇鸞法師は。梁魏兩國の無雙の學生也。はじめ壽長して。佛道を行せむがために。陶隱居にあふて。仙經をならふて。その仙方によて修行せんとしき。のちに菩提流支三藏にあひたてまつりて。佛法の中に長生不死の法の。この土の仙經にすぐれたるや候と。とひたてまつりたまひければ。三藏もていひならふべきにあらず。この土いづれのところにか。長生の方あらむ。命ながくして。しばらくしなぬやうなれども。つゝにかへりて三有に輪回す。たゞこの經によて。修行すべしすなはち長生不死の所にいたるべしといふて。觀經を授たまへり。そのときたちまちに。改悔

のこゝろをよこして。仙經を焼て。自行化他。一向に住生淨土の法をもばらにしき。往生論の注。また畧論。安樂土義等の文造也。并州の玄忠寺に三百餘人門徒あり。臨終のときその門徒三百餘人あつまりて。自は香呂をとりて西に向て。弟子どもに聲を等して。高聲念佛して命終しぬ。そのとき道俗もほく。空中に音樂を聞といへり。道綽禪師は本は涅槃の學生なり并州の玄忠寺にして。曇鸞の碑文をみて發心して云。かの曇鸞法師智徳高遠なり。なほ講説をすて、淨土の業を修しすてに往生せり。いはむやわが所解所知。おほしとするにたらむやと云て。すなはち涅槃の講説をすて。一向にもはら念佛を修して。相續してひまなし。つねに觀經を講じて人を勸たり。并州の晋陽大原汝水の三縣の道俗。七歳已下は悉く念佛をさとり往生をとげたり。又人を勸て涕唾便利西方に向ず。行住坐臥西方を背ず。又安樂集二卷これを作り。凡往

生淨土の教法弘通は道綽の御力なり。往生傳等を見にも多道綽の勸を受往生をとげたり。善導もこの道綽の弟子也。しかれば終南山の道宣の傳に云。西方の道教の弘ことはこれより起と云。又曇鸞法師七寶の船に乗て空中に來をみる。又化佛菩薩空に住する事七日。そのとき天華雨て來集人人袖にこれをうく。かくのごとく不可思議の靈瑞多。終のとき白雲西方より來て。三道の白光と成て房中を照す。五色の光空中に現す。又墓の上に紫雲三度現する事あり。善導和尚いまだ觀經をえざるまに。三昧をえたまひたりけると覺候。そのゆへは道綽禪師にあふて觀經をえてのち。この經の所説わが所見におなじとのたまへり。導和尚の念佛したまふには。口より佛出たまふ。曇省讀云善導念佛從口出といへり。同念佛をまふすとも。かまえて善導のごとく。口より佛出たまふばかりまふすべきなり。欲如善導妙在純熟とまふして。誰な

りとも念佛をだにもまことに申て。その功熟しなば口より佛は出たまふべき也。道綽禪師は師なれども。いまだ三昧を發得せず。善導は弟子なれども。三昧をえたまひたりしかば。道綽わが往生は一定か不定かと。佛にとひたてまつりたまへとのたまひければ。善導禪師命をうけて。すなはち定に入て阿彌陀佛にとひたてまつりしに。佛言。道綽に三の罪ありすみやかに懺悔すべし。その罪懺悔して定て往生すべし。一には佛像經卷をばひさしに安て。わが身は房中に居す。二には出家の人をつかふ。三には造作のあひだ虫の命を殺。十方の佛前にして第一の罪を懺悔すべし。諸僧の前にして第二の罪を懺悔すべし。一切衆生の前にして第三の罪を懺悔すべしと。善導すなはち定より出。このひねを道綽につげたまふに。道綽の云。しづかにむかしのとがをもふに。これみな空からすと云て。こゝろをいたして懺悔すと云。しかれば師に勝たる

也。善導はことに火急の小聲の念佛を勸て數をさだめたまへり。一萬二萬三萬五萬乃至十萬と云。懷感禪師は法相宗の學生也。廣經典をさとりて念佛をば信せず。善導に問云念佛して佛を見たてまつりてむや。導和尚答云。佛の誠言なんぞうたがはむや。懷感この言についてたちまち。解をひらき信を起て道場に入て。高聲に念佛して見たてまつらむと願するに。三七日までその靈瑞をみず。そのとき感禪師自罪障の深して。佛をみたてまつらざることを恨て。食を斷じて死せんとす。善導制してゆるさず。のちに群疑論七卷を造と云。感師はことに高聲念佛を勸めたまへり。小康法師は本とは持經者也。十五歳にして法華。華嚴等の經五部を讀覺たり。これにて高僧傳には。讀誦の篇に入たれども。たゞ持經者のみにあらず。瑜伽唯識の學生也。のちに白馬寺に詣。堂内をみれば光りはなちたる物あり。これを探



取て見れば。善導の西方化導の文也。小康これをみてこゝろ忽に歡喜して願を發て云。われもし淨土に縁あらば。この文再光を放と。かくのごとく誓了見れば重て光を放つ。その光の中に化佛菩薩まします。歡喜やめがたくして。つゝに又長安の善導和尚の影堂に詣して。善導の眞像を見れば。化して佛身となりて小康にのたまはく。汝わが教にて衆生を利益し。同淨土に生ずべしと。これを聞て小康所證あるがごとし。後に人を勸めむとするに。人その教化にしたがはず。しかるあひだ錢をまうけて。まづ小童等を勸て。念佛一返に錢一文をあたふ。のちに十遍に一文かくのごとくするあひだ。小康の行に小童等ついでをのゝ念佛す。又小童のみにあらず。老少男女をさらはず。みなことごとく念佛す。かくのごとくしてのち淨土堂を造て。晝夜に行道して念佛す。所化にしたがふて道場に來集聲三千餘人也。又小康高聲に念佛するを見れば。

口より佛出たまふこと善導のごとし。このゆへに時人後善導となづけたり。淨土堂とは唐のならひ。阿彌陀佛をすえたてまつりたる堂をば。みな淨土堂となづけたる也。五祖の御徳要をとるにかくのごとしと。又無量壽經は如來の教をまうけたまふこと。みな濟度衆生のためなり。かるがゆへに衆生の機根まち／＼なるゆへに。佛の經教も又無量なり。しかるに今の經は往生淨土のために。衆生往生の法を説たまふ也。阿彌陀佛修因感果の次第。極樂淨土の二報莊嚴のありやうを。くはしく説たまへるも。衆生の信心を勸て欣求のこゝろをおこさせむがため也。しかるにこの經の證には。われら衆生の往生すべきむねを説たまへる也。たゞしこの經を釋するに。諸師の意不同なり。今しばらく善導和尚のこゝろを以て心得候に。この經はひとへに專修の念佛のむねを説を。衆生往生の業としたまへるなり。なにをもてこれをするといふに。ま

づかの佛の因位の本願を説中に。設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺と云。かの佛の因位法藏比丘のひかし。世自在王佛のみもとにして。二百一十億の諸佛妙土の中よりえらびて。四十八の誓願を起て淨土をまふけて佛になりて。衆生をしてわがくに生さすべき行業をえらびて願じたまひしに。またく餘行をばたてずして。たゞ念佛の一行をたてたまへる也。かるがゆへに大阿彌陀經にはすべて。かの佛の願をば選擇して。たてたまふゆへなりと。大阿彌陀經。この經は同本異譯の經也。しかるに往生の行は。われらがさかしく。いまはじめてはからふべきことにあらず。みなさだめおけることなり。法藏比丘もし惡をえらびてたてたまはく。世自在王佛なほさておはしますべきか。かの願どもとかせてのち。決定無上正覺なるべしと授記したまはひ。法藏菩薩かの願をたて給て。兆載永劫のあひだ。難行苦行積功

累徳して。すでに佛になりたまふたれば。ひかしの誓願一一に不可疑。しかるに善導和尚の本願の文を引て曰。若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在成佛當知本誓重願不虛衆生稱念得往生と云。まことにわれら衆生自力ばかりにて。往生をもとむるにとりてこそ。この行業は佛の御こゝろにかなひやすらむ。またなにとも不審にもおぼへ。往生も不定には候べき。念佛を申て往生を願人は自力にて往生すべきにはあらず。たゞ他力の往生也。本より佛のさだめあきて。わが名號をとなふるものは。乃至十聲一聲までも。むまれしめむとちかひたまひたれば。十聲一聲の念佛みな。一定往生すべければこそ。その願成就して。成佛したもふと云道理の候へば。唯一向に佛の願力をあをきて。往生をば決定すべきなり。わが自力の強弱をさだめて。不定にもふへからず。かの願成就の文この經の下巻にあり。その文に

云く。諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心  
回向願生彼國即得往生不退轉と云。凡そ四十  
八願淨土を莊嚴せり。華池寶閣願力にあらずと  
云ことなし。その中にひとり念佛往生の願のみ  
うたがふべからず。極樂淨土もし成就ならば。  
念佛往生も決定往生也。次に往生の業因は念佛  
の一行に定と云へども。行者の根性にしたがつ  
て。上中下あり。かるがゆへに三輩の往生を説  
すなわち上輩の文に云く。其上輩者。捨家棄  
欲而作沙門。發菩提心一向專念無量壽佛と  
云。中輩の文云。雖不能行作沙門大修功德當發  
無上菩提之心一向專意乃至十念念無量壽佛と云  
り。當座の導師私に一の釋をつくり候。この三  
輩の文の中に菩提心等の餘行ありといへども。  
上の佛の本願を望には。こゝろ衆生をしてもは  
ら無量壽佛を念せしむるにあり。かるがゆへに。  
一向と云。又觀念法門に善導釋して云。又此經  
下卷初云。佛說一切衆生。根性不同。有上中下。

隨其根性。佛皆勸專念。無量壽佛名。其人命欲  
終時。佛與聖衆。自來迎接。盡得往生と云。こ  
の釋のこゝろ三輩ともに念佛往生也。まことに  
一向言は。餘をすつる言なり。例せばかの五天  
竺の三寺ごとし。一には一向大乘寺。二には一  
向小乘寺。三には大小兼行寺。かの一向大乘寺  
中には。小乘を學することなし。一向小乘寺に  
は。大乘を學するものなし。大小兼行寺の中に  
は。大乘小乘ともに兼學する也。大小の兩寺は  
ともに一向の言をぞく。二を兼たる寺には一向  
の言ををかず。これを以てこゝろを候に。今の  
經の中に一向の言もまたしかなり。もし念佛の  
外に餘行をならぶれば。すなわち一向にあらず。  
かの寺にならずらへば兼行と云べし。すてに一向  
と云。しるべし餘行をすつといふ事を。たゞこ  
の三輩の文の中に。餘行を説について三の意あ  
り。一には諸行をすて念佛に歸せしめむがた  
めに。ならべて餘行を説て。念佛にあひて一向

の言をぞく。二には念佛の人をたすけむがため  
に諸善を説。三には念佛と諸行とをならべて。  
ともに三品の差別をしめさむために諸行を説。  
この三の義の中には。たゞはじめの義を正とす。  
のちの二は傍義也。次にこの經の流通分の中に  
説て云。佛語彌勒其有得聞彼佛名號歡喜踊躍乃  
至一念當知此人爲得大利則是具足無上功德と云  
。上の三輩の文の中に。念佛のほかにもろく  
の功德を説といへども餘善をばほめず。たゞ念  
佛の一善をあげて。無上の功德と讚嘆して未來  
に流通せり。念佛の功德は餘の功德に勝たるこ  
とあきらかなり。大利と云は小利に對する言な  
り。無上と云はこの功德の上する功德なしと云  
義也。すてに一念を指て大利と云。又無上と云。  
いはひや二念三念十念をや。いかにいはひや百  
念千念乃至萬念をや。これ則少を上げて多を決す  
る也。この文をもて餘行と念佛と相對してこゝ  
ろするに。念佛すなわち大利也。餘善はすなわ

ち小利也。念佛は無上なり。餘行は又有上也。す  
べては往生を願せむ人。なんぞ無上大利の念佛  
をすて。有上小利の餘善を執せむや。次にこ  
の經の下卷の奥に云。當來之世。經道滅盡。我以  
慈悲哀愍。特留此經。止住百歲。其有衆生。值  
此經者。隨意所願。皆可得度と云。善導此  
文を釋して云。萬年三寶滅。此經住百年。爾時  
聞一念。皆當得生。彼といへり。釋尊の遺法  
に。三時の差別あり。正法像法末法也。その正  
法一千年のあひだは。教行證の三つともに具足  
せり。教のごとく行するにしたがふて證をえたり。  
像法一千年のあひだは。教行はあれども證  
なし。教にしたがふて行すといへども。悉地を  
うるることなし。末法萬年のあひだは。教のみあ  
て行證なし。わづかに教門はのこりたれども。  
教のごとく行するものなし。行ずれどもまた證  
をうるものなし。その末法萬年のみちなむのち  
は。如來の遺教みなうせて。住持の三寶ことく

く滅して。おぼよそ佛像經典もなく。頭を剃衣を染僧もなし。佛法と云こと名字をだにもきくべからず。しかるにそのときまで。たゞこの雙卷無量壽經一部二巻ばかりのこりとゞまりて。百年まで住して衆生を濟度したまふこと。まことにはおはれにおぼへ候。華嚴經も般若經も法華經も涅槃經も。おぼよそ大小權實の一切の諸經。乃至大日金剛頂等の眞言秘密の諸經も。みなことごとく滅したらむとき。たゞこの經ばかりとゞまりたまふことは。なに事にかとおぼへ候。釋尊の慈悲をもとゞめたまふことさだめてふかきこころ候らむ。佛智まことにはかりがたし。たゞし阿彌陀佛の機縁。この界の衆生にふかきましたすゆへに。釋迦大師もかの佛の本願をとゞめたまふなるべし。この文について按じ候に。四のこころあり。一には聖道門の得脱は機縁あさく。淨土門の往生のみ機縁ふかし。かるがゆへに三乘一乘の得脱をとける諸經はさ

きだちて滅して。たゞ一念十念の往生を。とけるこの經ばかりひとりとゞまるべし。二には往生につきて。十方淨土は機縁あさく。西方淨土は機縁ふかし。かるがゆへに十方淨土を勤たる諸經はことごとく滅して。たゞ西方の往生勤たる。この經ひとりとゞまるべし。三には兜率の上生は機縁あさく。極樂の往生は機縁ふかきゆへに。上生心地等の兜率を勤たる諸經は。みな滅して。極樂を勤たるこの經ひとりとゞまるべし。四には諸行の往生は機縁あさく。念佛の往生は機縁ふかきゆへに。諸行を説諸經はみな滅して。念佛を説この經のみひとりとゞまりたまふべし。この四の義の中に眞實には第四の念佛特留此經止住百歳ととかれたれば。この二軸の經典ひとり。のこるべきかときこへ候へども。まことには經卷はうせたまひたりとも。たゞ念佛の一門ばかりとゞまりて。百年あるべきにや

とおぼえ候。かの秦の始皇が書を燒。儒を埋しとき。毛詩と申す文ばかりはのこりたりと申すこと候。それも文はやかれたれども。詩はとゞまりて口にあると申して。詩をば人々そらにおぼへたりけるゆへに。毛詩ばかりはのこりたりと申すこと候をもてこころえ候に。この經とゞまりて百年あるべしと云も。經卷はみな隱滅したりとも。南無阿彌陀佛とまふすことば。人の口にとゞまりて百年までも。さゝつたへむする事とおぼへ候。經といふはまた説ところの法を申すことなれば。この經はひとへに念佛の一法を説り。されば爾時開一念皆當得生彼とは。善導も釋したまへる也。これ秘藏の義也。たゞすく申すべからず。すべてこの雙卷無量壽經に。念佛往生の文七所あり。一には本願の文。二には願成就の文。三には上輩の中に一向專念の文。四には中輩の一向專念の文。五には下輩の中の一向專念の文。六には無上功德の文。七に

は特留此經の文。この七所の文をまた合して三とす。一には本願これに二つを攝す。はじめの發願成就也。二には三輩これに三を攝す。上輩中輩下輩なり。この下輩について二類あり。三には流通これに二を攝す。無上功德特留此經なり。本願は彌陀にあり。三輩已下は釋迦の自説也。それも彌陀の本願にしたがふて説たまへる也。三輩の文の中にをのく一向專念と勸たまへるも。流通の中に無上功德と讚嘆したまへるも。特留此經ととゞめたまへるも。みなもと彌陀の本願に。隨順したまへるゆへなり。しかれば念佛往生とまふすことは。本願を根本とする也。詮ずるところこの經は。はじめよりをはりまで。彌陀の本願を説ところらうべき也。雙卷經の大意をこころへむとおもはむ。かならず教相を知べき事なり。教相を沙汰せねば。法門の淺深差別あきらかならざるなり。しかるに諸宗に

みな立教開示あり。法相宗には三時教をたて、一代の諸教を攝す。三論宗には二藏教をたて、大小の諸教を攝す。華嚴宗には五教をたて、天台宗には四教をたつ。いまわが淨土宗には。道綽禪師安樂集に。聖道淨土の二門をたてたり。一代聖教五千餘軸。この二門をばいでず。はじめに聖道門は。三乘一乘の得道也。すなわちこの娑婆世界にして斷惑開悟する道なり。すべてわかつて二あり。謂大乘の聖道。小乗の聖道也。別して論ずれば四乗の聖道あり。謂聲聞乘。緣覺乘。菩薩乘。佛乘也。淨土はまづこの娑婆穢惡のさかひをいで。かの安樂不退のくにむまれて。自然に増進して。佛道を證得せむともむる道也。この二門をたつる事は。道綽一師のみにあらず。曇鸞法師も。龍樹菩薩の十住毘婆沙論を引て。難行易行の二道をたてたまへり。難行道は陸路より歩行するがごとし。易行道は水路を船に乗ずるがごとしと。たとへたり。この二道

を立る事。曇鸞一師にかぎらず。天台の十疑論にもおなじく引て釋したまへり。また迦才の淨土論にもおなじく引り。かの難行道者。すなわち聖道門也。易行道者。すなわち淨土門なり。しかのみならず。また慈恩大師の云。親達。聖化。道悟。三乘。福薄因疎。勸歸淨土と云。この中三乘者すなはち聖道門也。淨土者すなはち淨土門也。難行易行三乘淨土。聖道淨土その言ことなりといえども。そのころみなおなじ。凡そ一代の諸教この二門をいでず。經論のみこの二門に攝するにあらず。乃至諸宗の章疏みなこの二門をばいでざる也。天台宗には正は佛乘の聖道をあかす。傍には往生淨土をあかす。即往生安樂といへり。華嚴宗にもまた天台宗のごとし。聖道を修してえがたくば。淨土に生ずべしと云。願我臨欲命終時。盡除一切諸障礙。面見彼佛阿彌陀。即得往生安樂國と云。しかるに今の經は往生淨土の教也。即身頓悟のむねをも

あかさず。歷切迂回の行をもとかず。娑婆のほかに極樂あり。わが身のほかに阿彌陀佛ましますと説て。この界をいとひて。かのくに生じて。無生忍をもえむと願ずべきむねを明也。善導の釋に云く。定散等回向。速證無生身といへり。凡この經にはあまねく往生の行業を説り。すなはちはじめには定散の二善を説て。總じて一切の諸機にあたへ。次には念佛の一行を選て。別して未來の群生に流通せり。かるがゆへに經云。佛告阿難。汝好持是語。等と云。善導これを釋して云。從佛告阿難。汝好持是語。已下。正明。付。阿彌陀名號。流通於遐代。等云。しかればこの經のころによりて今聖道をすて。淨土の一門に入也。その往生淨土につきて。又その行これおほし。これによて善導和尚專雜二修を立。諸行の勝劣得失を判じたまへり。すなはちこの經疏に云く。行につきて立信者就。行有二種。一正行二雜行と云。もはらかの正行

を修するを專修の行者と云。正行をば修せずして。雜行を修するを雜修の者と申也。その專雜二種の得失について。今私に料簡するに五の義あり。一には親疎對。二には近遠對。三には有間無間對。四には回向不回向對。五には純雜對也。はじめに親疎對者。正行を修するは阿彌陀佛に親。雜行を修すればかの佛に疎なり。すなはち疏に云く。衆生起行口常稱佛佛即聞之。身常禮敬佛佛即見之。心常念佛佛即知之。衆生憶念佛者佛亦憶念衆生。彼此三業不相捨離。故名親縁と云へり。その雜行の者口に佛を稱せざれば。佛すなはち聞たまはず。身に佛を禮せざれば佛すなはち見たまはず。心に佛を念せざれば佛しろしめさず。佛を憶念せざれば佛又憶念したまはず。彼此三業常捨離するかゆへに疎となづくる也。次に近遠對者。正行はかの佛に近。雜行はかの佛に遠なり。疏に又云。衆生願見佛佛即應念現在目前故名近縁

と云。雜行者佛を見たてまつらむとねがはざれば。佛すなほ念に應じたまはず。目の前にも現じたまはず。かるがゆへに遠となつたる也。たゞ常の義には親近と申つれば。一事のやうにこそは聞ども。善導和尚は親と近とのごとしと。別しては釋したまへり。これによて今又親近を分て二とするなり。次に有間無間對者。無間は正行を修するに於ての佛に於いて。憶念無間なるがゆへに。文に憶念不斷名爲無間と云これ也。有間者雜行のものは。阿彌陀佛にこそるをかくる事間ちほし。かるがゆへに。文に心常間斷と云これ也。次に回向不回向對者。正行は回向をもちぬざれども。自然に往生の業となる。すなはち疏の第一云く。今觀經の中に。十聲稱佛。即有二十願十行具足。云何具足。言南無者。即是歸命。亦是發願回向之義也。言阿彌陀佛者。即是其行。以斯義故。必得往生。かるがゆへに不回向といふ。雜行はかならず回向をもちぬ

るとき往生の業となる。もし回向せざれば往生の業とならず。かるがゆへに文に。雖可回向得生と云これなり。次に純雜對者。正行は純に極樂の行也。餘の人天ちよび三乘等の業に通せず。又十方淨土の業因ともならず。かるがゆへに純となづく。雜行は純極樂の行にはあらず。人天の業因にも通じ。三乘の得果にも通じ。又十方淨土の往生の業因ともなるがゆへに雜と云也。しかればこの五の相對をもて二行を判するに。西方の往生をねがはむ人は。雜行をすて、正行を修すべき也。又善導和尚往生禮讚の序に。この專雜の得失を判じたまへり。專修の者は十即十生百即百生。雜修の者は百に一二。千に五三と云。なにももてのゆへに。專修の者は雜縁なし。正念をえたるがゆへに。又彌陀の本願に相應するがゆへに。又釋迦の教にたがはざるがゆへに。佛語に隨順せるがゆへにと云り。雜修の者は雜縁亂動す正念を失するがゆへに。又佛の本願と

相應せざるがゆへに。また佛語にしたがはざるがゆへに。釋迦の教に違するがゆへに。又保念相續せざるがゆへに。回顧懇重眞實ならざるがゆへに。乃至名利と相應するがゆへに。又自の往生を障るのみにあらず。他の往生の正行を障がゆへにと云。しかのみならず。やがてその文のつゞきに。余この諸方の道俗を見聞するに解行不同にして專雜異あり。しかるに專修の者は十ながら生じ。雜修の者は千中一もなしとのたまへり。さきの義をもて判じ候に。千中五三とゆるしたまへりといへども。今正見には一もなしとのたまへるなり。そのときの行者だにも。雜行にて往生する者なかりけるにこそ候なれ。ましていよく時も機もくだりたる當世の行者。雜行往生と云事はあもひすつべき事也。たとひまた往生すべきにても。百中一二。千中五三の内にてこそ候はむすれ。さわめて不定の事也。百人九十九人は往生して。今一人すまじ

ときかひだにも。もしその一人にあたる身にてもやと。不審に不定にまぼえぬべし。いかにいはむや百一二の内。一定入へしとあもひ事。かたぐど候はむす。しかれば百即百生の專修をすて。千中無一の雜行を執すべからず。唯一向に念佛を修して。雜行をすつべきなり。これすなほちこの經の大意也。望佛本願。意在衆生一向專稱彌陀佛名と云。返々も本願をあきて念佛を修すべき也と。

建保四年四月廿六日。園城寺長吏公胤僧正之夢。空中告云。源空本地身大勢至菩薩衆生教化故來此界度度

かの僧正の弟子大進の公實名をしらず記之  
康元二丁己正月一日書之

愚禿親鸞 八十五歳

康元二年丁己正月二日拔之

此御說法事一書は四方指南針に出づ。彼針には本末二巻として之をかゝく。是即漢語證錄に載する道徳説法の假字の

本なるべし。拾遺古德傳には此一篇の文を抄出せり。但し此篇中用語正しからざるもの少なからざれども。今は原文のまゝに之を誦す。

## 七 臨終行儀

### 臨終行儀

佛子年來之間。止此界希望。唯修西方業。所憑者彌陀本願。所待者聖衆來迎。今既臥病床。可恐可悅。須閉目合掌一心誓期。自非佛相好。勿見餘色。自非念佛音。勿聞餘聲。自非淨土教。勿說餘言。自非佛本願。勿思餘事。如是乃至命終之後。坐寶蓮臺上。從彌陀佛後。在菩薩衆中。過十萬億國土之間。亦復如是。勿緣餘境界。唯至極樂世界七寶池中。始應舉目合掌見彌陀尊容。聞甚深法音。聞諸佛功德香。普法喜禪悅味。頂禮海會聖衆。悟入普賢行願。今有六事。應當一心聽一心念。

每一念莫生疑心。一先應厭離此界。今此娑婆世界。是惡業所感。苦本原也。生老病死輪轉無際。三界獄縛無一可樂。若於此時不厭離之。當於何生。離輪迴耶。然阿彌陀佛有不思議威力。若一心稱名。念中滅八十億劫生死重罪。是故今當一心念。彼佛離此苦界。應作是念。願阿彌陀佛。決定拔濟我。

南無阿彌陀佛

大眾同心厭三界 三途永絕願無名

三界火宅難居止 乘佛願力往西方

二應欣求淨土。西方極樂是大乘善根界。無苦無惱處。一託蓮胎永離生死。眼瞻彌陀聖容。耳聞深妙導教。一切快樂無不具足。若人信彌陀誓願。稱彼佛名號。上盡一形。下至一聲。決定往生彼安樂國。佛子宿因多幸。深馮本願。永渡生死愛河。速至安養彼岸。今正是時也。願佛今日決定引攝我往生極樂。

南無阿彌陀佛

### 五濁修行多退轉

不如念佛往西方

到彼自然成正覺

還來苦海作津梁

三應思惟本願。彼佛願云。設我得佛。十方衆生。至心信樂欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。善導述云。若我成佛。十方衆生。稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺。彼佛今現在。世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生。當知五劫思惟。只在十念本願。佛子是罪惡生死凡夫。曠劫已來常沒常流轉。無有出離緣。然決定深信無疑無慮。乘彼佛願力。定得往生。今既臨命終時。本願引導在。今不可疑。故重發真實信心。可迴向發願。

南無阿彌陀佛

弘誓多門四十八

偏標念佛最爲親

人能念佛々還念

專心想佛々知人

四應念攝取光明。觀無量壽經云。無量壽佛有八萬四千相。一一相各有八萬四千隨形好。一一好復有八萬四千光明。一一光明遍照十方世界。

念佛衆生攝取不捨。同經疏問云。備修衆行。但能迴向皆得往生。何以佛光普照。唯攝念佛者。有何意也。答曰。自餘衆行雖名是善。若比念佛者。全非比擬也。是故諸經中。處處廣讚念佛功能。如無量壽經四十八願中。一日七日專念彌陀名號得生。又十方恒沙諸佛證誠不虛也。又此經定散文中。唯標專念名號得生。此例非一。又觀念法門曰。又如前身相等光。一一遍照十方世界。但有專念阿彌陀佛。衆生。彼佛心光常照。是人攝護不捨。惣不論照攝餘雜業者。愛佛子專念彌陀名號。專修念佛一行。攝取光明久照。我身不捨誓約豈非此時哉。惑障相隔雖不能見。願力不可疑。決定來照我身。故閉眼念慈光。開口唱名號。

南無阿彌陀佛

彌陀身色如金山 相好光明照十方

唯有念佛蒙光接 當知本願最爲強

五應念來迎儀。彼佛願云。設我得佛。十方衆

生。發善提心。修諸功德。至心發願欲生我國。臨壽終時。假令不與大衆團遠現其人前。者。不取正覺。佛子久願極樂。是則發善提心也。又修念佛行。豈非多善根哉。今臨壽終時。定與大衆共來動法性山。入生死海。當知是時也。應作是念。彌陀如來與觀音勢至恆沙聖衆無數化佛菩薩俱。只今出極樂東門。入此室。故歡喜合掌一心應念佛。

南無阿彌陀佛

行者見已心歡喜

終時從佛坐金蓮

一念乘花到佛會

即證不退入三賢

六應念後生得益。行者生彼國已。蓮花初開後。所見悉是淨妙色。所聞无不解脫聲。香味觸境亦復如是。時觀音勢至來至行者前。出大悲音種種慰喻。汝知不名此處極樂世界。此界主號彌陀佛。汝念佛。汝又念汝。乘本願。故今此來生。即從菩薩漸至佛前。舉目合掌瞻仰尊顏。鳥瑟高顯晴天翠浪。白毫右旋秋月光

滿。青蓮之眼。丹葉之唇。迎陵頻之聲。師子相之聲。仙鹿王之膺。千輻輪之狀。如是八萬四千相好纏絡紫金身。無量塵數光明如集億千日月。梵音深妙。悅可乘心。又普賢文殊彌勒地藏等諸大菩薩。德行不可思議。俱會一處。互交言語。問訊恭敬。或經行寶樹下。自然微風吹七寶樹。無量妙花隨風四散。其香微妙出念佛音。聞已即悟無生法忍。或遊戲寶池邊。入功德水。充滿其中。微瀾迴流轉相灌注。其聲微妙無不佛法。鳧雁鸞鷲孔雀鸚鵡迦陵頻迦等。晝夜六時出和雅音。凡水鳥樹林皆讚嘆佛法僧寶。演暢根力覺道。寶池中有寶花。各坐蓮臺。互說宿命事。我本在其國發心。我本修其行。往生。具陳來生之本末。兼憶往昔之同行。或端坐念彌陀。自行自然增進。或遊戲導有緣。利他速疾圓滿。如此行願相並。功德具足不歷塵劫。早唱正覺。此等快樂又在何處。故倍發欣樂之心。可稱念佛號。

南無阿彌陀佛

直入彌陀大會中

見佛莊嚴無數億

六通三明皆具足

憶我閻浮同行入

西方進道勝娑婆

緣無五欲及邪魔

成佛不勞諸善業

花臺端坐念彌陀

一々池中華盡滿

華々物是往生人

各留半坐乘花臺

待我閻浮同行入

教化文

佛子知不。只今即是最後心也。臨終一念勝百年業。過此剎那生處可定。今正是其時。將一心念佛往生彼西方極樂微妙淨土。八功德池中寶蓮臺上。可爲此念。如來本誓一毫無謬。願佛引攝。

南無阿彌陀佛。

建久元年十月日 法然御筆

この古本は今融州乘蓮寺に在り。

阿闍梨成時花押

附錄 往生要集略料簡

### 八 往生要集略料簡

源 空

序云是故依念佛一門聊集經論文披之修之易覺易行。私云夫序者預畧述於一部與旨以示部內元意。然序中既云依念佛一門。明知此集意以諸行不爲往生要。正以念佛爲要也。加之處々多以念佛爲往生要。云其文非一。總結要行云。往生之業念佛爲本。又念佛證據門云不。如直辨往生要多云念佛。又云明知契經多以念佛爲往生要。所以諸業至第九門。雖明之。不。慙慙。義又无。勸進。任各樂欲而已。觀察門云初心觀行不堪深奧。乃至是故當修色相觀。此分爲三一別相觀二他相觀三雜略觀也。隨。意樂。應。用。之。初別相觀。云。一。他相觀。云。二。雜略觀。云。三。若有不堪。觀念相好。或依歸命想。或依引攝想。或依往生想。應一心稱念。已上。意樂。不同。行住坐臥語默作々常以此

念在於胸中。如飢念食如渴追水。或低頭舉手或舉聲稱名。外儀雖異。心念常存。念念相續。寤寐莫忘。云云。私云。是則此集肝心也。行者能可留心。惣結要行云。同上諸門中所陳既多。未。知何業爲往生要。答。大菩提心護三業。深信至誠常念佛隨。願決定生極樂。況復具餘諸妙行。私云。初問意者。上諸門者。指厭離等五門也。所陳既多者。厭離有七。欣求有十。證據有二。正修有五。助念有七。如是諸門中所陳既多。未。知何業爲往生要。問也。次答意者。且准問選七法。以爲往生要也。上五門中。厭離欣求證據三門非要。故捨不取。大菩提心者。上正修念佛門中。有五念門。其中取作願門也。護三業者。上止惡修善中取止惡邊也。問止惡中有十重四十八輕。共取之歟。答不然。正取十重也。故下文云。三業重惡能障正道。故須護之。深信者。上行相貌中有四修三心。々々中取深信。至誠者。取至誠心也。常者。四修中取無間修也。念佛

者。上五念之中。取觀察門也。問觀察門中有稱念。有觀念。正取何念乎。答取稱念也。故下文云。稱念佛是行善。隨願者。上三心中。取迴向發願心也。故云。大菩提心護三業。深信至誠常念佛。隨願決定生極樂也。此中准問雖簡。要否。是且助念門意也。非此集正意也。問以何得。知非正意。答。上止惡修善中。云問念佛自滅罪。何必堅持戒。答。若一心念誠如所責。然盡日念佛。開檢其實。淨心一兩其餘皆濁亂。乃至是故要當精進持戒。猶如護明珠。故知如說念佛必不可具持戒等矣。念佛證據門云。一切善業各有利益。各得往生。何故唯勸念佛一門乎。答。今勸念佛。非是遮餘種々妙行。只是男女貴賤。不簡。行住坐臥。不論時處。諸緣修之。不難。乃至臨終。願求往生。得。其便宜。不如念佛。木槵經云。難陀國波瑠璃王。乃至復諸聖教中。多以念佛爲往生要。其文甚多。略出十文。一。占察經下卷。若人欲生他方。現在淨國者。應當隨彼世

界之佛名字。專意誦念。一心不亂。如上觀察者。得生彼佛淨國。善根增長。成不退。如上觀察。二。雙卷經三輩之業。雖有淺深。然通皆云。一向專念。无量壽佛。三。四十八願中。於念佛門。別發一願。云。乃至十念若不生者。不取正覺。四。觀經云。極重惡人云云。五。同經云。若欲至心云云。六。同經云。光明遍照云云。七。阿彌陀經云。不可以少善根云云。八。般舟經云。阿彌陀佛言。欲來生我國云云。九。鼓音聲經云。若有衆生云云。十。往生論云。以觀念彼佛。依正功德。爲往生業。已上此中。觀經下々品。阿彌陀經。鼓音聲經。俱以念名號爲往生業。何況觀念相好功德。耶。問。餘行寧無勸進文耶。答。其餘行法。因明彼法種種功德。其中自說。往生之事。不。如直辨。往生之要。多云念佛。何況佛自既言。當我乎。亦不云。佛光明攝。取餘行人。此等文分明也。何重生疑耶。問。諸經所說。隨機萬品。何以管見。執一文耶。答。馬鳴菩薩大乘起信論云。復次衆生初學此法。其心怯弱。懼畏難。可成就。意欲退

者。當知如來有勝方便。攝護信心。隨以專意念佛。因緣隨願。得往生他方佛土。如修多羅說。若人專念西方阿彌陀佛。所作善業。迴向願求。生彼世界。即得往生。已上明知契經。多以念佛爲往生要。若不爾者。四依菩薩。即非理盡。私云。此中有三番問答。初問意可見。此中勸詞。正指上觀察門中行住坐臥等文也。其故遍尋一部始末。殷勤勸進。只在觀察門。餘處全所不見也。答中有二義。一。難行易行。諸行難修。念佛易修。二者少分多分。謂諸行勸進甚少。念佛諸經多勸進之。次問答中問意可知。答中有三義。一者因明直辨。諸行專爲往生不說之。念佛專爲往生。選說之。二。自說不自說。謂諸行阿彌陀如來不自說。當修之。念佛自說。當念我。三。攝取不攝取。謂修諸行者。佛光不攝取之。行念佛者。佛光攝取之。次問答中問意可知。答中有二義。如來隨機四依理盡。謂諸行釋迦如來隨衆生機說之。念佛四依菩薩盡理勸之。是則此集



本意也。委可思之。往生階位云問若凡下輩得往生云何近代於彼國求者千萬得者无一。二。答綽和尚云信心不深若存若亡故。信心不一。決定故。信心不相續。餘念間故。此三不相應者不能往生。若具三心不往生者无有是處。導和尚云若能如上念念相續畢命爲期者十即十生百即百生。若欲捨專修雜業者百時希得一二。二千時希得三五。言如上者指禮讚等五門至誠等三心長時等四修也私云惠心盡。理定。往生得否。以導和尚專修雜行文爲指南也。又處處多用於彼師釋可見。然則用惠心之聲必可歸善導哉矣。

世有古本漢語燈錄一卷。內載往生要集釋同略料簡同略料簡及同證要四篇。就中釋則連。觀前釋下所出往生要集大綱。同略料簡二篇者而已。又證要者則二本互同。唯略料簡及料簡二篇則今之版本無之。然對照此二篇。字句粗同。但料簡文少廣。而其廣文却與釋文不異。故今唯錄略料簡一篇耳。

## 九 彌陀本願義疏

南無阿彌陀佛

沙門源空記之

彌陀本願有惣有別。惣舉二二別分六八。惣統萬行別釋一行矣。今此大經有大意有三釋名。有文段焉。  
第一大意者明。菩提金輪之發心。述法藏菩薩之誓願。月支活人草活于死者。雪山靈若草漏金玉精。六八本誓活無明醉倫。一乘之名號漏无作量醍醐焉。玉義壁止之一字者費金錢萬倍之酒直。東朔雲氣之五色者施草樹五露之甘味焉。三輪二藏之教相者互于諸教分差。百即百生之行門者攝于萬機成益。超世本願之金言者示凡夫往生之直路也。聖凡同往于淨刹。十聲一聲之念佛者指道俗運載之寶車也。寶惡齊乘于花臺。彌陀之悲母者彼喚。釋迦之慈父者此道。稱名

引萬機。信心彰一實。受得三法忍。豈容指遠劫乎。是畧釋其大意畢。

第二釋其名者經言佛說无量壽經卷上。佛者西國正語。此言爲覺。始本一時之覺也。說者正明口說。傍指身說。無量壽者彼佛名號也。即以本願爲經題目。又兼光明義。經者常也。常者指法身常恒之德也。卷者借漢土三聖弘典之卷也。上者對下之詞也。此經兩軸也。本云上末云下。故云佛說无量壽經卷上。是則畧釋其名義畢。

第三入文解釋者。始自我聞如是。下至願樂欲聞。已來明其序分。二從佛告阿難乃往過去。下至我今爲汝畧說之耳。已來明其正宗分。三從佛語彌勒。下至靡不歡喜。已來明其流通分。矣。已上一師所判畢。又一師曰。始自我聞如是。下至此諸佛皆悉已過。已來正明其序分。次從爾時次有佛名世自在王。下至應當信順如法修行。已來正明其正宗分。三從爾時世尊說此經

法下至靡不歡喜。已來正明其流通分焉。此所判好矣。已上大意等三門畢。又付正宗分中。亦有三分。一從佛告比丘。汝今可說。下至當具說之。已來正明其序分。二從无三惡趣願。終至得三法忍願。已來正明其正宗分。三從我建超世。下至當雨珍妙花。已來正明其本願流通分。矣。今正釋本願。序云佛告比丘。佛者正指世自在王佛。問云彼世自在王佛者報。爲當化耶。答曰世自在佛始終應同。八相具足化身。以何得知。諸佛刹土有五種別。一化土亦名穢刹。亦名忍土。是具足八相劣化身之所居。二世界種。是勝化身之所居。三世界海。實報身之所居。四世界性。諸佛法身之所居。五花藏界。毘盧遮那如來之所居也。此之五種佛之中。化土成佛故是化身。問云世自在王佛若言化身。法藏比丘隨于化佛。發心修行。師範既化身。弟子豈報耶。答曰凡佛有具足三身之道理。若有其道理者。此難不可來。所以者何。其三身中。法身无始无終。報身有始无終。化身

有始有終。若論報身有始修行。必於化佛所發心修行也。然則報化二身師範者必是化佛。例如悲華經說明。无諍念王與寶海梵志二人發心者。遇寶藏佛教化。念王者期淨土成佛。梵志者願忍土成佛。是雖師範一佛於一佛所而發心。其發心趣是異。念王既期淨土成佛。故報身寶海梵志願忍土成佛。故是化身。問云若如所引悲花經。本號彼安樂國。爲尊善无垢。教主號尊音。彼佛入涅槃轉世界名彌陀光明。佛號不可思議功德。彼佛涅槃後有佛出世名寶光明。轉世界號善堅。如是展轉國名安樂。念王成佛號无量壽。彼佛涅槃後。念王子觀音成佛號遍出一切光明功德山王如來。彼佛涅槃後。勢至成佛號善住珍寶山王如來。乃至若依彼說。者定知彌陀即是化身也。答汝勿致此疑。涅槃言者通報化二身也。報身涅槃者智鉢常住名之爲涅槃。若有弟子依報佛教化。究竟大悟號涅槃。弟子若悟究竟。師弟更无別无二。故化道緣即息且號爲涅槃。

報佛補處者指印可爲補處。全非師滅付屬弟子。化佛涅槃者入滅也無常也。補處者有爲无常補處也。況如觀音授記經舉二種見。一者是見佛入滅之機。是即疑心往生之類。不信佛智等之人。生蓮胎是約外相蓮花。即雜行往生之類所生也。依內相云宮殿。但於一種蓮約內外二見名蓮花云宮殿。四生之中胎生者蓮花之內相也。經言生彼邊地七寶宮殿。今言邊地者何者乎。付之有二種邊地。一者穢土邊地。即遠王城處名邊地。亦无佛法處言邊地。遠王宮難也。无佛法難也。故田舍名邊地。八難所云邊地。今例彼等處九品蓮胎之間不見佛而生佛入滅之念。不聞法而生佛法滅之念。故約無見佛聞法緣之方。指彼蓮臺云邊地。或人云於極樂世界有九品土。隨業之淺深所生。此義不然。言極樂有九品土者何經何論說乎。正依三經惣无其說。若廣論花嚴真言者毘盧遮那所傳也。於釋迦一代教。有已結集未結

集。或收天上。或收龍藏。或留具嚴。或入仙廟。或文殊結集。或迦葉結集。或阿難之結集。何經說極樂世界云有九品差別乎。或人疑迦師云往生見土亦有萬別。加之觀念法門云或得三萬六萬。皆是上品上生人。當知三萬已上是上品上生業。會云彼迦師釋者約雜行往生之人。依疑心處蓮胎機之果報。一往指蓮內爲土之邊。又觀念法門且約念數之多少。分上中下。土非云有九品。但彼極樂世界十三觀之中第二第三觀所明土也。彼觀音授記經所說深厚善根衆生。念佛往生之衆生也。當知見入滅者疑惑者也。故日發等釋疑多邊地久見不入滅。正行往生之者無雜疑二過。故問云淨土門意數返多少云何。答上古人智惠深道心厚器量強。猶以不過七萬十萬。矧末世无智惠淺道心。多六萬中三萬已上。縱於末世。雖爲上根人。言過十萬八七六萬。无有是處。問云若重數遍人可用念珠乎否。答曰上根上智人无餘念間斷。

不及用念珠。一向愚者尤可用念珠。其念數形外道平形。佛弟子念珠圓形也。問曰法藏於何位發四十八願乎。答曰於頓教發超位發此願也。問云比丘本願既經云緣致滿足无量。然今何限四十八願乎。答曰於願有廣有畧。无量廣。六八畧。問云四十八願者表何事乎。答曰表八萬四千法門。八萬四千者十界十波羅蜜四大因果之開合也。所謂十界一界分持四十一十界四百。百界四千。千界四萬也。十波羅蜜之中一波羅蜜分持八十波羅蜜八十。百波羅蜜八百。千波羅蜜八千。合因果四千萬。故成八萬四千也。又以四大表之一波羅蜜分持四大。十波羅蜜四十大。百度四百大。千度四千大也。凡八萬四千法藏皆收此四十八願也。其四十八願者釋云四十八願中有三段。初二願者序分。自悉皆金色願至第四十七得不退轉願正宗分。第四十八得三法忍願流通分也。又願願皆有二段。初設我得佛一句四字者一

願序分。其中間者正宗分。終不取正覺一句四字者其一願流通分也。其序舉三期得果。正宗明衆生拔苦與樂益。流通立菩薩大誓言焉。

第一无三惡趣願。經云設我得佛國有地獄餓鬼畜生者不取正覺。此是期淨土之成佛。報佛之菩提也。何以得知。化佛者唱穢土之成道。然穢土而不有無三惡趣土。既无三惡道者即可是淨土。故悲花經說乃往過去名尊善无垢時之相云。尊音如來。今現在爲諸菩薩說於正法。彼界无有聲聞辟支佛名。亦无有說小乘法者純一大乘清淨无雜。其中衆生等純一化生。亦无有女人及其名字。乃至又彼經說今安樂土相云。彼世界之中无有聲聞辟支佛乘。所有大衆純諸菩薩无量无边。乃至當知彼土即報土矣。

頌曰  
極樂界中无三惡。亦無二乘女人名。  
純諸菩薩大乘衆。當知彼國實報土。

第二不更惡趣願。經云設我得佛國中人人壽終之後復更三惡道者不取正覺。釋云所彼觀見諸佛刹土之中有淨土有穢土。其穢土衆生更三惡道。淨土衆生不更惡道。捨其更惡道之濁穢土取不更惡道之清淨刹。爲其本願。發此願故知極樂者是報土。彌陀亦是報佛也。

頌曰  
極樂世界人天衆。不更惡趣住不退。  
舊住新往大乘衆。見佛聞法常快樂。  
第三悉皆金色願。經云設我得佛國中人人悉皆金色者不取正覺。釋云譬如明鏡雖塵積曇其性无曇。故巾其塵其拂垢之時明相現。巾煩惱罪濁之塵去无明癡愛之垢。法性真如之真金色形。大悲實相之光現也。

頌曰  
極樂人天大海衆。因順餘方入天名。  
其相黃金微妙色。悟性鉢相身膚現。  
第四无有好醜願。經云設我得佛國中人人形色

不同有好醜者不取正覺。釋云法藏比丘所親見諸佛之刹土之中有淨有穢。淨者報佛報土也。即純諸菩薩境界。更无形色不同相矣。穢者化佛化土也。即具有六道四生之故。而有形色好醜之不同。捨彼好醜不同之穢土取无有好醜之報土發此願焉。

頌曰  
捨彼好醜雜穢土。無有好醜真報土。  
極樂人天諸大衆。形色一類純菩薩。

第五通識宿命願。經云設我得佛國中人不識宿命下至不知百千億那由他諸劫事者不取正覺。釋云彼二百一十億諸佛刹土之中有淨有穢。化佛化土之衆生猶不知一生之事。何況二生三生前事乎。生報土見報佛衆生者不聞于三明十明。於六通十通懸鏡照臨。然見彼淨土發此願焉。

頌曰  
忍土衆生不識宿。何況具足通三世。

淨土菩薩識三世。萬億宿業悉通達。

第六必得天眼願。經云設我得佛國中人人不得天眼。下至不見百千億那由他諸佛國者不取正覺。釋云然彼穢土之衆生者肉眼猶不明。况天眼乎。然天眼有二種。一世天眼。即有漏之天眼。是三界之中果報。二无漏天眼。即出世之菩薩之所感得之性相圓滿之果報也。

頌曰  
等覺菩薩名天人。非是三界人天類。  
所得天眼非有漏。即是真如聖天眼。

第七自得天耳願。經云設我得佛國中人不得天耳。下至聞百千億那由他諸佛所說不悉受持者不取正覺。釋云凡天耳有二種。一忍土人天所得天耳者有漏之天耳。更不開出世之事。淨土之菩薩之所得天耳者淨穢共並聞。十方同時共聽。即是無漏之天耳也。

頌曰  
安樂報土諸聖衆。皆得无漏天耳通。

大小十方諸音聲。同時同聽皆受持。

第八得見他心願。經云設我得佛國中人不見他心智下至不知百千億那由他諸佛國中衆生心念者不取正覺。釋云三界有漏之他心智者知下智念慮不知上智心念。然安樂報土之衆衆者上知見諸佛之心念。下覺悟三惡之苦心。於大小凡聖之心念莫不覺悟焉。

頌曰

性海人天諸聖衆。見覺凡聖他心智。非是有漏五神通。即是无漏大悲智。

第九神足隨念願。經云設我得佛國中人不神足於一念頃下至不能超過百千億那由他諸佛國者不取正覺。釋云三界有漏之神通者起之時得自在不起之時失通。如彼目連尊者起神通之時一念之頃匝四天下百千匝不起通之時爲外道竹杖被害了。彼安樂國聖衆之神通不然。是不退之神足。即堅遍大之上下橫亘大之四域焉。

頌曰

世界海中諸聖衆。自然身備神足通。非是有漏退神通。常住不退性神通。

第十無貪着身願。經云設我得佛國中人不若起想念貪計身者不取正覺。釋云比丘所親見諸佛土之中。化身所居之穢土之衆生者貪着現生有漏之身爲苦提慳身命爲世事施珍財爲名利不慳身財焉。然安樂報土之人天海衆不貪着身命。凡夫計者共其着也。无念寂靜安樂之智不開發故也。

頌曰

西方極樂聖人天。不着身命住无念。自行化他兩滿足。隨願得度十方界。

第十一住正定聚願。亦必至滅度願。經云設我得佛國中人不住正定聚必至滅度者不取正覺。釋云今就此願有二種義。一者定聚者除邪不定二種正定聚。其定者即不退之故。生彼國者住等覺已上之念不退。不至有爲

之滅度願也。二者滅度者非是有爲无常之滅度。滅度者但是恒常住之義也。滅者自行之自寂也。度者化他之滿足也。然一師云指佛稱兩足尊者自行化他之兩滿足故。云是不可順化佛土之人之滅度焉。

頌曰

舊住新往諸菩薩。不住定聚真滅度。自行圓滿化他足。正覺滿月光獨燈。

第十二光明普照願。經云設我得佛光明有能限量下至不照百千億那由他諸佛國者不取正覺。釋云已前十一願皆明所化菩薩證。今此願者舉能化如來報之功德焉。凡言報者西天云爲盧舍那。此翻云光明。小經云彼佛光明无量照十方國无所障礙。是故號爲阿彌陀。即知阿彌陀者梵語也。光明者漢語也。其所照十方者可知大之十方矣。

頌曰

光明普照十方界。即是報身佛相光。

化佛更无普照義。何況不斷照十方。

第十三佛壽无量願。經云設我得佛壽命有能限量下至百千億那由他劫者不取正覺。釋云此願同明彌陀報佛之功德焉。小經云彼佛壽命及其人民无量无边阿僧祇劫。故名阿彌陀。當知梵語多含也。今兼二種義。阿彌陀者梵語也。此翻光明。翻无量壽也。是故十二三兩願者正是彌陀報佛之明證。况大經十二光。觀經光明遍照。小經光明无量文以銘肝落淚數行也。

頌曰

彼佛壽命无際限。人天聖衆亦復然。是故往生彼國者。不聞生老病死名。

第十四聲聞無數願。經云設我得佛國中聲聞有能計量下至三千大千世界聲聞緣覺於百千劫悉共計按知其數者不取正覺。釋云彼二百一十億刹土有淨土有穢土。今此願明彼淨穢二土之二乘焉。今彼國中聲聞者指大乘極位菩薩也。凡諸佛說法有二種。一者口說是名教內。

二者身說是名。教外。聞彼口說音聲之教。證果之人。名聲聞。十信聲聞。十住聲聞。十行聲聞。十迴向聲聞。十聖乃至聲聞佛果。故知國中聲聞者。指報身所化大菩薩焉。諸天人民者。因願除方。故立其名。更不願穢土之人民。豈聲聞獨覺同化佛所化聲聞乎。何況三千大千世界之聲聞之外。舉國中聲聞。若不指大乘之薩埵。是何聲聞入乎。次三千大千世界聲聞緣覺者。正是化佛所化之小乘之二乘也。小經所說聲聞無數弟子以之例可知。智者應知焉。

頌曰

聞聲得道名聲聞。非是小乘愚二乘。三千界中小二乘。不知界外有淨土。第十五聖衆壽命无量願化也。經云。設我得佛。國中人人壽命無能限量。除其本願修短自在。若不爾者。不取正覺。釋云。第十二願明佛壽之長遠。今此願明所化壽命長遠。同小經彼佛壽命及其人民无量无边阿僧祇劫。

頌曰

彼佛壽命無數劫。聖衆人天壽命同。念彼本願往生者。證得无生住正覺。第十六遠離不善願。經云。設我得佛。國中人人乃至聞有不善名者。不取正覺。釋云。彼所親見諸佛刹土之中。有化土。有報土。其化土具有六道。故有諸不善名。擇捨其有一切不善諸佛穢土。擇取无諸不善報佛淨土。發此願也。

頌曰

化佛出世諸濁刹。盈滿一切不善事。本願所成眞報土。遠離六道不善名。第十七諸佛稱揚願。經云。設我得佛。十方世界无量諸佛。不悉咨嗟稱我名者。不取正覺。釋云。就此願有二意。一就佛解。二就衆解。一就佛解者。若我成佛。爲十方諸佛。被稱讚佛果功德。佛果者覺也。一切菩薩。爲得其覺。發心修行。十方諸佛。皆同心莫不讚嘆其性相。故極覺言。被讚嘆矣。二就衆解者。於稱彌陀本願之

名號。行者。十方諸佛。同心言可讚嘆之。悲花經云。願我成阿耨菩提。已令十方諸佛。稱揚讚嘆我名字。已此合前義。即此願成就文同之。小經六方證誠亦以同之。第二義。凡諸佛本心。皆令衆生出離矣。然十萬萬易。出離者念佛也。故歸彌陀本願。念佛是稱諸佛意。故諸佛同心讚歎念佛行者矣。

頌曰

諸佛本心一法身。是故同讚本覺心。亦讚稱名諸佛者。稱名易故皆出離。第十八念佛往生願。經云。設我得佛。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆。誹謗正法。問云。見此願始終。總無稱名之證。何云念佛往生願乎。答曰。乃至十念。豈非念佛乎。問云。夫念三寶云。三念。念六法云。六念。念十戒云。十念。或亦經云。如一念之頃。此一念者。即時節之一念也。此念若延可云。三念之頃。五念十念之頃。何以知稱名十

念。耶。答曰。觀念法門。往生禮讚等云。稱名十念。其文分明。私不及明釋。問云。彼釋彌不審。

何云。稱名十念乎。答曰。此願願成就文云。諸有衆生。聞其名號。故知是名號十念也。問云。稱名云。十念。義尤可然。但稱名念佛。易修行。易往生。何除五逆誹謗正法。案此道理。此教若權教者。尤可除。權教不能轉定業。故若言實教者。何不轉之耶。答曰。光明院一家之意。教相分明。所謂立二藏二教。攝一代聖教。故二藏中收菩薩藏。又就菩薩藏。有漸有頓。漸頓二教中言。頓教攝。知是實教也。問云。實有漸權有頓耶否。答云。頓一向限實。漸一向限權。問云。實頓可有斷惑義耶。答云。此問不可來。實教頓教若言。有斷惑之義。者無有是處。絕無一分道理。問云。二藏中菩薩藏。二教中頓教者。立三法輪。可定諸教說時。耶否。答曰。雖不見四部八卷中。依菩提三藏。案道理。必可立三法輪。定諸教說時。問云。若立三法輪者。今此

三經攝何法輪耶。答曰既云實之頓也。當歸本法輪之攝也。何以故阿難有三種。一阿難陀。此云慶喜持聲聞藏。二阿難拔陀。此云喜賢持獨覺藏。三阿難伽羅。此云喜海持菩薩藏。但是於一人隨德立三名。其中前二阿難共攝聲聞藏。第三喜海是此教能聽之人。然如來說法之時者四十九歲也。如彼十二遊經說。如來成道一年不說法。從如來卅一歲始說法。終二十五年奉事故。般若已前經无能聽之義也。既大經觀經共告阿難說之。若如是者阿難奉事者雖有自般若中間。此經說時者已定。但信尋如來遊化之時節。轉定業所權教之力不堪。既轉五逆謗法等之重罪。令得无生忍之深益。况阿闍世發菩提心。列法花之座。隨涅槃之砌。闍王之逆罪其相最委細。故法花同時之說也。次論三經前後大經序。觀經正。小經流通也。以何得知。大經說法藏發心因位之相。知是序分也。觀經說願成就果後之相。知是正宗也。小經說本願

所成之身土。及捨難行。取正行。定其行已後。有諸佛之證誠。故知是流通也。問云既言轉定業。是實教者。何云唯除五逆誹謗正法耶。若言除重罪者。汝何言轉定業。故言是實教耶。答云此當教之肝心。今此六八願之中。一願設我得佛之一句。願序分也。其中間正宗也。不取正覺之一句。流通也。然餘四十七之願。皆不取正覺之後更无有一字。何十八願獨流通之後。有別之言乎。此有二義。一非法藏比丘誓言。釋迦爲抑止門。且置之語也。二法藏且爲抑止之置之也。當知不置不取正覺之中。故知實攝也。故觀經攝已造業之五逆。猶抑止未造業之謗法。經文分明也。上天竺漢家日域現證滿日滿耳耶。問云第十八願既爲本願中王。何此不說來迎耶。答十八願一向說行門。至十九願別說來迎之功德。其相如後說焉。

頌曰

彌陀本願唯一行。爲攝萬機令往生。

萬行各々雖微妙。凡夫難解難入故。

第十九聖衆來迎願。經云說我得佛十方衆生發菩提心。修諸功德。至心發願。欲生我國。臨壽終時。假令不與。大衆圍繞。現其人前者不取正覺。釋云上願說往生之正業。此願說聖衆來迎之相貌。問曰此願既說發菩提心修諸功德。願成就三輩文學諸行。知十八願不說來迎。說念佛一行。故念佛者萬行中其一行也。修諸功德之願下說來迎念佛之來迎在萬行之中。故也。何言念佛之來迎耶。答云或人云發菩提心者非餘菩提心。但往生門隔時之菩提心也。修諸功德者非餘善。但彌陀名號攝彌陀內證外用功德。故也。欲往生者發菩提心也。修八願從初發心。至臨終舉修念佛一人相。此十九願根性多途。始或有期。娑婆之得道人。或有前修諸行。捨後歸念佛一人。說捨其本所修之業。歸念佛往生人之相也。以何得知。以願

成就之文。分三輩爲令此道理易得。意也。上輩說捨家棄欲而作沙門行。又說一向專念之行。然言中輩雖不能行沙門。是即捨上輩出家之功德。勸進修行之一門。雖然猶勸一向專念之行。又中輩所說諸行皆悉以至下輩云雖不能作諸功德者。指中輩所說齋戒造塔等諸善。例如如來始說阿含等小乘。後捨彼小乘。說權乘。復闍權乘。說空乘。而復後體空乘。說法花。又如法花先說三車。後說白牛。攝萬機。此亦爾。先說上輩行作沙門大行。而後捨上輩之業。勸中輩諸善。又後捨萬行。取念佛一行。與三心令具足也。問曰今前說餘行。後說念佛。其理可然。今此文中云乃至十念云乃至一念。何一文中。有念數多小不同乎。答曰此從上盡一形。至臨終一念。從多向少義。其相如別紙釋。問云今是至誠心者。指觀經所說三心隨一歟。答曰凡三心者。念佛行者之安心。十八願云至心者。至誠心也。故可云至心可云誠心。觀

經疏云至者真。誠者實。此可云真心。可云實心。但是同讀之字可。懇懇之時重于二字。例如云善哉善哉諦聽諦聽。零上之時唱一字。故。十八願至心。下輩至誠心。觀經至誠心。小經一心是一鉢也。又本願中信樂。下輩文信樂。觀經深心。小經不亂皆是一鉢。所以何者。觀經疏釋深心云深信之心。乃至云一者決定深信二者決定深信。信樂與深信是一鉢。又小經一心不亂解行不同耶。雜人等雖加種種疑難念佛信心不亂故。本願中欲生。下輩願生其國。觀經迴向發願心。小經三發願是亦一鉢。凡迴向發願心者但願生心也。問云大經三輩。觀經九品。本是開合異也。然觀經所說之三心者見被諸行之機。何以故。若有衆生願生彼國者發三種心即便往生者安心。復有三種衆生當得往生者起行也。心行並說故。當知萬行共具三心可往生。故疏云三心既具无行不成行願既成若不生者无有是處云也。又此三心亦通攝定善之義此之心。答曰今三心者但偏被

念佛之機。以何得知。如問端云三輩九品開合之異也者先以之可知。捨上中兩輩之諸行。成念佛之一機。後說三心可知。三心者在念佛之行。至九品之文舉二類之機也。發三種心者念佛之機也。必定之言尤有憑。當得往生者雜行之機也。當之言是不定也。其不定者用迴向之時成往生之因。不用迴向之時不成往生之因。如別紙釋。三輩既有二類。九品豈无二類乎。但九品之中說三心者勸諸行之人。爲令入念佛。凡具三心者捨諸行。移念佛。當知疏文具三心者歸念佛。歸念佛者行必成。此散善之前之定善歸入三心具足念佛可遂往生者也。問云就所言三心第一至誠心者真實心也。其真實者不改不動不廢之義也。身子之證第六住猶退菩薩行。自非斷惑之菩薩。難具真實。五濁五苦之凡夫何具真實。言往生者凡夫往生有名无實爲之。答曰誠如疑難。真實若凡夫之真實者何凡夫可遂往生耶。且以

道理會之。往生淨土法門者本是不似餘教之道理。但憑佛本願所施利他真實也。法藏菩薩之五劫思惟悉真實。永劫修行皆至誠。迴彼思惟之本懷所修萬行之真實至誠。施我等。彼本願真實之至誠。歸真實之願。心故云真實心。然真實者本願之真實也。所歸心者行者之心也。其真實者行者真實者无有是處。本願中至心者真也。然其至者本願之至也。本願之真也。下輩之至誠與觀經之至誠亦以如是。小經一心一者專之義也。不改義也。然能化之至誠能化之一心。至心之心與一心之心是所化之心。能所合云至心云至誠心云一心耳。

第二深心者經云如來智惠海深廣无涯底。釋云彌陀智願海深廣无涯底。當知信自深廣佛智出之本願故。深者能化之深也。心者所化之心也。本願之中信樂信深廣之本願。下輩之中若聞深法不生疑惑聞本願深廣无疑惑之心言樂。觀經深心如。小經不亂信樂深廣之佛智一心不亂。然

深心者能化之深也。心者所化之信心也。故能所合云深心也。第三回向發願心者回向之義通能所。先欲生我國者。欲生者所化之心也。我國者佛五劫之思惟永劫之修行回向念佛行者也。故龍樹釋云所獲善根清淨者回施衆生彼國。乃至蓋其意也。然憑能化之回向之本願。迴向所化之心。故能所合云回向發願心。翻內之三心。施外之義。爲名號。翻外之稱名。播內名三心。但安心之三心。起行之稱名一而非一。內外異故。二而非二。心行一鉢故。又已前雜行有二種。行鉢之雜行與雜修之雜行也。若此雜行言具三心者无有是處。又三心有二義。行具之三心智具之三心是也。然就三經有三于四種之來迎。第十九願。三輩。九品。小經是也。此皆就念佛行者也。經云諸法皆有六相圓融之義。是故彌陀佛是總相。五根差別爲別相。共萬行緣起是同相。六根各不相知是異相。諸根一不缺一身上會是成相。諸根各住自位是壞相。此六相爲六事。惣別一對。同異

一對。成壞一對。合爲一之時六者三也。此六相各具六相。故名號有六事三對。三十六義功德喻之屋舍。舍是惣相。棟梁椽柱等爲別相。諸法材木共但一緣起是同相。棟梁等各限其分互不。如相是異相。材木一缺家不成。諸材木共會是成相。諸具皆柱棟住自位是壞相也。此德必然而具。故名號喻屋舍具三十六義也。問云彌陀名號若具如是德无上功德者。一念發信心唱一念已後可有。心退耶否。答曰豈先不言耶。外凡十信喻輕毛易改。六住之菩薩退其位。况五濁之凡夫住不退位耶。是必往生已後可住不退之位也。但相續不退可勵者也。

頌曰

我說彼尊功德事。衆善无邊如海水。所獲善根清淨者。回施衆生之彼國。第二十植善遂生願。經云設我得佛十方衆生聞我名號。係念我國。植諸德本。至心回向欲生我國。不果遂者不取正覺。釋云是指

四〇〇

二生三生往生。所以何者既第十八願說往生之正行。十九願明聖衆來迎。重不及說正行。明來迎。但是今生念佛者若信心淺若值惡緣雖不遂。順次之往生。其本願念佛不唐捐。順次還人界。云必可遂往生之望。設雖不遂。一生之往生猶不可。等閑念佛。臨終值惡緣。猶以不隨惡道。何況正念往生入耶。問云既云植諸德本。全不云一向專念。何於念佛之行。云指二生三生之外。諸行往生乎。答云今言植諸德本者。全非指諸餘之雜行。念佛具三十六義之諸德。故指念佛云植諸德本矣。

頌曰

若人念佛雜疑心。信心微小念佛者。不遂一生往生者。二生定得生極樂。第二十一具三十二相願。經云設我得佛國中。人天不悉成滿三十二大人相者不取正覺。釋云問云彼佛及土既言報者。報身或云具九十七之大相。无量小相。或云自受用身諸相好一一遍

滿十方界四智圓明受法樂前佛後佛皆同。或云。佗受用身諸相好隨緣應現无增減爲化十地諸菩薩一佛現於十種身。何報佛報土之聖衆具足三十二相乎。答云是非云定報佛報土之相。因順餘方。故云具三十二相。是彼佛土聖衆實非具三十二相。三十二相者似同轉輪聖王。轉輪聖王者人中王。安養界諸聖衆豈以人中之果報爲望乎。

頌曰

安養界之諸聖衆。因順餘方三十二。實言彼國真相好。无量相好皆具足。第二十二必至補處願。經曰設我得佛佗方佛土諸菩薩衆來生我國。究竟必至一生補處。除其本願自在所化爲衆生。故被弘誓鑿積累德本。度脫一切遊諸佛國。修菩薩行。供養十方諸佛如來。開化恒沙无量衆生。使立无上正真之道。超出常倫諸地之行。現前修習普賢之德。若不爾者不取正覺。釋云此經舉萬二千大比丘

衆了云。又與大乘衆菩薩俱。舉普賢妙德慈氏菩薩等三菩薩。云斯賢劫中一切菩薩。云又實護等十六等。次下云皆遵普賢大士之德。與今願云修習普賢之德。一同而无異。若佗方佛土之菩薩來生極樂世界。預彌陀如來之授記。修習普賢之德。者正覺也。以何得。知如此經初說言。於無量世界現成等覺。云現成等覺者非等妙二覺之中等覺。即等正覺之等覺也。既云於无量世界現成等覺。說上天下天等之八相之化儀。來生極樂世界者皆悉可備此德。問云言佗方佛土者。有淨土。有穢土。佗方淨土之菩薩者。爲助。如來之行化。來蒙授記。佗方化佛穢土之菩薩者。詣淨土。而同已得深心之菩薩。蒙授記。又於補處。有二種。一者化佛之補處。例如釋尊補處之彌勒也。二者報佛之補處。即以印可。爲補處。即今願補處者。即印可之補處也。

頌曰

一切化佛唱入滅。一生補處涅槃後。



化佛補處即彌勒。彌陀補處即印可。

第二十三供養諸佛願。經云設我得佛國中菩薩承佛神力供養諸佛一食之頃不能遍至無數无量那由他諸佛國者不取正覺。釋云極樂舊住新往諸聖衆不云其遠近。遍至大千十方諸佛國。延二種供養。二種供養者內事之供養以法味供養也。二者外事之供養即四事及百味供養也。

頌曰

內事供養最爲尊。外事供養亦殊勝。

二種供養亦隨意。二種但是菩提因。

第二十四供物如意願。經云設我得佛國中菩薩在諸佛前現其德本諸所欲求供養之具若不如意者不取正覺。釋云法藏比丘所親見諸佛刹土之中有佛穢土。其化佛所化之士六趣雜居。其中地獄餓鬼畜生修羅等四惡趣。人天之二類者善趣。生其善趣者之中有供佛施僧之志者雖有志无供物者將徒其志。設雖有供物

亦少是有。一者亦少就无身心不安也。彼報之淨利者萬物自然涌出。一事而无不足。若不如意者无有是處矣。

頌曰

極樂无爲諸薩埵。每時供養億諸佛。

四事百味諸供物。如意隨願常涌出。

第二十五說一切智願。經云設我得佛國中菩薩不能演說一切智者不取正覺。釋云彼國既報土。故聖衆皆是得忍大悟之薩埵也。口音轉唱一切智。六根演說无寻法。時而无不說法。四威儀皆是說法也。

頌曰

安樂人天諸聖衆。每時演說一切智。

口音相好四儀等。常說諸法實相儀。

第二十六得金剛身願。經云設我得佛國中菩薩不得金剛那羅延身者不取正覺。釋云那羅延者西國正音也。此翻云極大力士。今所言者非指有漏那羅延。即名无漏金剛心菩薩之極位

爲金剛那羅延身是也。生彼國者必住正受金剛心之位。令彼得生之人至一生補處之覺位。故名金剛那羅延身。若不然而者豈生无爲涅槃之界。人得受有漏那羅延身乎矣。

頌曰

若人得生極樂界。無漏金剛那羅延。

如彼等覺金剛位。是名金剛那羅延。

第二十七萬物光麗願。經云設我得佛國中一天一切萬物嚴淨光麗形色殊特窮微極妙無能稱量。其諸衆生乃至逮得天眼有能明了辨其名數者不取正覺。釋云凡三界有爲果報者財物隨時貧福因果業好醜不平等緣亦不足。然彼國永劫修因萬善所成故。萬物極微其類巨稱爲令得此益發是願也。

頌曰

念佛往生一切衆。所得萬物形色妙。

縱有逮得天眼者。不能明了辨其數。

第二十八知見寶樹願。經云設我得佛國中善

薩乃至少功德者不能知其道場樹无量光色高四百萬里者不取正覺。釋云道場樹者道者菩提也。場者得菩提之處之名也。問云彌陀既成正覺已來經十劫者其義勿論也。但約依彼佛教化往生彼國者說道場也。問云知其見彼寶樹之機少功德者約何物名耶。曰答少功德者即雜善也。問云以何得知少功德即雜善。况雜業往生者明知見道場樹乎。答曰既云國中菩薩了言乃至少功德者。國中菩薩者舊住新往共本願念佛往生臨終得忍之人。少功德者自非雜業以何說少。小經少善根可思合者也。但雜行往生者雖有花合之障障盡預花開益之時必可知見之也。問云其寶樹既云卅二萬里者何正報高依報低有何所以耶。答曰卅二萬里者彼國之里也。更非娑婆之里也。

頌曰

寶樹高顯三十二。非指娑婆穢國里。

即指彼國稱量里。見者乃得无生忍。

第二十九必得辯才願。經云設我得佛國中菩薩若受讀經法諷誦持說而不得辯才智惠者不取正覺。釋云經法有三種。一者色之經法。即多羅葉梵本。及翻譯書寫之卷軸。此先令得眼根之益。次通口意之二業。二者言語之經法。只唱口業。後通意業。三者實相之經法。是覺智之分之經法。但彼國有後之二種說法耳。諷誦持說而得无生辯才焉。

頌曰

二種經法常在彼。聖衆諷誦持說悟。

不借世天辯才智。自辯自才常誦說。

第三十辯才无窮願。經云設我得佛國中菩薩若得辯才若可限量者不取正覺。釋云舉先得无生辯才明不借世天之力。今亦明彼辯才无限量也矣。

頌曰

已得辯才无限量。

三賢十聖難測量。

皆修諸佛已證之行。即昇諸法實相之臺也。

頌曰

反魂樹香聞有益。衆病悉除老成少。

何況安樂依報香。聞者自然修佛行。

第三十三光觸滅罪願。經云設我得佛十方無量不可思議諸佛世界衆生之類蒙我光明觸其身者身心柔軟超過人天若不爾者不取正覺。釋云天有甘露。服者長生。地有甘酒泉。飲者除愁。山雪觸春日流深水。檀花向朝日。色忽萎。然彌陀永劫之修行之萬善遂照觸一念稱名之行者。身心柔軟超人中天上之思量。實躋圓明入諸佛悟入之真門焉。

頌曰

十方无量諸衆生。蒙佛光明觸其身。

身心柔軟過人天。即除滅无量惡業。

第三十四聞名得忍願。經云設我得佛十方无量不可思議諸佛世界衆生之類。聞我名字不得菩薩无生法忍諸深忍持者不取正覺。釋此有

衆生得生極樂界。必得辯才无限量。

第三十一得見十方願。經云設我得佛國土清淨皆悉照見十方一切无量無數不可思議諸佛世界猶如明鏡觀其面像。若不爾者不取正覺。釋云彼國既報土故譬如因陀羅網互出无盡。乍坐觀十方淨土。如明鏡見面像矣。

頌曰

彼國現是實報土。互見十方如天珠。

亦如明鏡觀面像。自界他方便无礙。

第三十二雜物薰香願。經云設我得佛自地以上至于虛空宮殿樓觀池流花樹國中所有一切萬物皆以无量雜寶百千種香而共合成。嚴飾奇妙超諸人天。其香普薰十方世界菩薩聞者皆修佛道若不如是者不取正覺。釋云聚窟州在西方界中。彼有大樹與机木相似窟林芳。其香聞數百里。名反魂樹也。至老者聞此香忽還若。疾病者更成強壯之身。此是有漏之反魂樹香之德。况彼無漏實相之海。一切萬物其香聞之者

二義。一者聞名字即得忍。問云聞彌陀名字。真得忍。十方世界何類不得忍乎。答曰聞者即聞持也。聞持者起信也。聞而持持而信者必可得益也。例如因我之咒青虫成蜂。假蓋在王泉。飲之者長生。况聞報佛難思之名號而不得益乎。二者聞而信信而行者臨終乘臺之時即證悟无生法忍也。問云何物乘臺得忍。答曰有三義。一衆生有魄有魂。魂乘臺。二每衆生皆有二性。其中依佗乘臺。三自性即依念受生。解第三義正義也。問云今言无生者何教何地无生耶。答曰就之有二意。一者借漸教後分之次位。初住无生。生報土得忍故。二者无別位。但大悟之无生。凡斷无明證中道之菩薩居報土者漸教之意也。若言有斷惑之義者无有是處矣。

頌曰

若聞彌陀佛名號。自然得悟无生忍。

若得即悟无生智。即同佛位无差別。

第三十五女人往生願。經云設我得佛。十方無量不可思議諸佛世界共有女人。聞我名字。歡喜信樂發善提心。厭惡女身。壽終之後復為女像者。不取正覺。釋云問云今見此願意。變成男子之願。更不說女人往生。何云女人往生之願乎。答曰凡言男女者。限一生之形相。敢非不變之相。謂其魂引者小乘及漸教初分之義也。依佗性受後生者。後分之意也。自性引後果者。頓教之義也。二義共魂无男女之相。依佗无男女之相。自性无男女之形。男女同捨此身。生彼國。厭惡女身。壽終之後復不成女像。豈非女人往生乎。觀經章提等往生豈非此願願成就耶。

頌曰  
若有女人能念佛。往生極樂定无疑。  
臨終一念生彼時。只令必成黃金鉢。  
第三十六聞名常修願。經云設我得佛。十方无量不可思議諸佛世界諸菩薩眾聞我名字。壽終之

後常修梵行至成佛道。若不爾者不取正覺。釋云十方世界有淨有穢。此指穢土菩薩。故云壽終也。此等聞彌陀本願之名字。願於願意念佛得生彼國之後可修梵行。梵行者淨行也。如云既生彼國更无所畏長持起行等也。

頌曰  
佗方世界菩薩眾。捨彼本身生極樂。  
常修梵行至成佛。還來本土化群類。  
第三十七人天恭敬願。經云設我得佛。十方无量不可思議諸佛世界諸天人。聞我名字。五鉢投地稽首作禮歡喜信樂修菩薩行。諸天人莫不致敬。若不爾者不取正覺。釋云若一佛所居之國限三千大千世界。者是化佛化土。聲聞藏之說相也。今言十方者即大十方也。大十方者報佛所作之處也。釋云如來尊號甚分明。十方世界普流行者蓋此之心也。彌陀名號普流行十方世界之時其人天聞之。我等人天曠劫希聞得

彌陀名號。乘此佛本願。生西方淨土。入法性真如之大海。是時也。五鉢投地悲喜交流。修念佛行。修菩薩行者念佛也。

頌曰  
彌陀名號極深善。十方六道皆得聞。  
得聞新類身投地。踊躍歡喜歸命禮。  
第三十八衣服隨念願。經云設我得佛。佛國中入天欲得衣服。隨念即至。如佛所讚應法妙服。自然在身。若有裁縫染濯者。不取正覺。釋云衣服有六種。一者法衣。即柔和忍辱之心是也。佛菩薩境界此衣為最。二者俗諦之衣。三者非情自然衣。即一切草木等自然生得之皮以為衣服。四者畜生自然衣。以自然生得之毛為衣服。五者天上自然衣。六者人中有作衣也。然彼極樂世界有二種衣。忍辱法衣與自然事衣是也。

頌曰  
彼國人天妙衣服。无有裁縫染濯。

但有往昔修行因。今成自然微妙衣。  
第三十九自然漏盡願。經云設我得佛。佛國中人所受快樂。不如漏盡比丘者。不取正覺。釋云於漏有二種。一者有漏。即三界之中漏。盡此漏名漏盡比丘也。二者无漏。即約界外。盡界內漏盡之癡惑是也。是分喻也。

頌曰  
今言漏盡快樂者。非指三界內漏盡。  
界外漏盡則正覺。除非正覺無漏人。  
第四十普見十方願。經云設我得佛。佛國中菩薩隨意欲見十方無量嚴淨佛土。應時如願於寶樹中。皆悉照見猶如明鏡。視其面像。若不爾者不取正覺。釋云若穢土眾生者。雖竹紙不見其外。是業障報障煩惱深隔故。肉眼之所見皆以如是。彼國聖眾悉是自然得無漏天眼。故隔於寶樹。莫不見十方矣。

頌曰  
肉眼不見晝夜色。雖晝不見一紙外。

彼國人天得天眼。大小巨細皆得見。  
 第四十一具足諸根願。經云設我得佛，佛作方國土諸菩薩衆，聞我名字，至于得佛諸根，闕陋不具足者，不取正覺。釋云：問淨土之意，或立聖道淨土二教。或云成佛往生二門。若於彌陀本願言有成佛之言者，無聖道淨土差別。無成佛往生殊異。然安樂集立二身二土，更无二身三土等之教相。此之義云何通釋矣。答曰：今言成佛者，敢非濁世八相等之成佛，即隔時之成佛，往生已後之得果。何以故？凡彌陀本願三經大意者，如云：一發心已後誓畢，此生無有退轉。唯以淨土爲期。但就安樂集而今言立一身二土者，此事更得得意。今對娑婆極樂二土，對釋迦彌陀二佛者，釋迦彌陀之教主，彌陀安樂之能化。因此穢土之釋迦之勸，生彼淨土之彌陀之國也。此自娑婆至極樂之教相也。凡論佛身者，娑婆所厭之處，極樂所致之處。所期者三身也。故云證法性常樂。云長時起行果極菩提者是。

頌曰

若人聞名欲往生，乃至得成佛道時。  
 不斷煩惱淨諸根，具足實相身諸根。  
 第四十二不失定意願。經云設我得佛，佛作方國土諸菩薩衆，聞我名字，皆悉速得清淨解脫三昧。住是三昧，一發意頃，供養无量不可思議諸佛，世尊而不失定意。若不爾者，不取正覺。釋云：聞名者，方國土菩薩衆聞彌陀名號。定現身得三昧。散臨終得三昧。今言速者，獲也。得者證也。

清淨者無染無感之義也。解脫者無生忍也。得忍之後，雖遊歷諸佛之國，供養无量億如來，住不動定意，後而不失，不動三昧也。

頌曰

佗方國土菩薩衆，若聞彌陀願名號，  
 供養无量諸世尊，不失不動三昧定。  
 第四十三心得尊貴願。經云設我得佛，佛作方國土諸菩薩衆，聞我名字，壽終之後，生尊貴家。若不爾者，不取正覺。釋云：聞彌陀名號，信行者可往生極樂。何云生尊貴家乎。答曰：修行彌陀本願者有二種往生。一者順次往生。是即本願生往生。是復宿善。若人聞彌陀名號，作修行。因入中天上執心深，故不遂順次往生者，或生天上梵王帝釋家。自其家遂往生。或生人中長者居士婆羅門家。乃至生金銀銅鐵勝帝王家。自彼自在，遂往生極樂之願望也。故生尊貴家者，指彼等善根之家也。

頌曰

若人不遂往生者，即生尊貴得福財。  
 第二生必得正念，決定往生得大悟。  
 第四十四具足德本願。經云設我得佛，佛作方國土諸菩薩衆，聞我名字，歡喜踊躍，修菩薩行，具足德本。若不爾者，不取正覺。釋云：佗方菩薩聞彌陀名號，起信修行，歡喜踊躍，修德本，往生已後行而無不修。善而無不，得故具足修功德本也。問云：若然者，修萬行，豈非難行耶。若言難行，者何第十八願廢一切諸行，但以念佛爲本願耶。答曰：就此有二義。一者菩薩行者大乘之行。然念佛即二藏中菩薩藏。二教中頓教二者。德本者名號也。即所皈萬德具足三十六義故也。

頌曰

佗方國土菩薩衆，聞名歡喜修大行。  
 具足德本是大願，三十六義圓融故。  
 第四十五常見諸佛願。經云設我得佛，佛作方國土諸菩薩衆，聞我名字，皆悉速得普等三昧。住

是三昧。至于成佛常見。无量不可思議一切諸佛。若不爾者。不取正覺。釋云。普等三昧者。正受三昧也。正受三昧者。名見佛。若人得正受三昧。見十方諸佛。如晴夜見星焉。

頌曰

佗方國土菩薩衆。聞名速得普三昧。若得正受三昧者。常見十方一切佛。

第四十六隨願聞法願。經云。設我得佛。國中菩薩隨其志願。所欲聞法。自然得聞。若不爾者。不取正覺。釋云。前願明他方菩薩得忍見佛利益。此願明自國菩薩聞法利益。問云。法華經云。一聞法華經。決定成菩提矣。然彼國菩薩隨願聞法者。聞何法。得何益。耶。答曰。彼因聞法功德。當來可成菩提。此必晝夜六時聽聞。聞法功德。證得無漏之勝益焉。

頌曰

極樂國中諸莊嚴。水鳥樹林常說法。其法圓頓實相義。聞者自然諸根淨。

四一〇

第四十七住不退轉願。經云。設我得佛。他方國土諸菩薩衆。聞我名字。不即得。至不退轉者。不取正覺。釋云。前願明國中菩薩聞法之益。今此願明他方菩薩聞彌陀名號。得金剛不退之位焉。

頌曰

佗方菩薩聞名號。即至金剛不退位。聞法利益日增進。還施化他慈悲門。

第四十八得三法忍願。經云。設我得佛。佗方國土諸菩薩衆。聞我名字。不即得。至第一第二第三法忍。於諸佛法。不能即得不退轉者。不取正覺。釋云。問此願者。四十八願終也。何不舉自國聖衆得菩提。佗方菩薩得菩提。耶。答曰。佗國者。有淨土。有穢土。或淨土菩薩得自在神力者。至極樂世界。聞彌陀名號。秘本國勝位。弘極樂之聞法利益。或穢土菩薩樂生安樂。悟聞法不思議之功德。凡佗方者。所化之國也。舉佗方利益。以爲功德。問云。見上大經上卷末說。六根清徹。

益之處。見寶樹者。證得三法忍。今此願何明。佗方菩薩聞名號。得三法忍。此云何通釋。答曰。彼明寶樹形說之道理。此明教主化佗之功德也。問云。三法忍者。何者乎。答曰。經云。一者音響忍。二者柔順忍。三者无生法忍。是也。就此有三義。一云。觀經上品上生文云。光明寶林演說妙法。聞已。即悟无生法忍。云。今以彼經一案。此經。明信彌陀五智。稱名號者。更不待彼益。臨終乘金臺之時。得無生忍。釋坐時。即得无生忍。是此不信。五智。修難行者。至彼之時。花合。譬如處胎內。住宮殿。然疑盡。障滅。後見寶樹。聞妙法。得忍也。若依此義。是依漸教後分之意。判此者。音響忍。初二三地。柔順忍。者四五六地。無生忍。者七八九地。二依實義。言之者。縱言坐時。即得無生。爲弘彼國依正之德。明重每聞法。得益之功德也。音響忍。者。彌陀宣唱之深法。悟無生忍。故立此名焉。柔順忍。者。蒙光觸者。聞說法。悟无生忍。故立此稱焉。無生法忍。者。悟法。

附錄 彌陀本願疏

身究竟之理也。色法始不生。本有之色也。空法始不生。本有之空。悟此理。故名无生法忍。指一心之性相。名爲忍智。是於無生之一忍。立三忍之稱也。我建超世願等之十一行。偈者。本願之流通也。其義如別紙釋也。

頌曰

極樂世界常威儀。依正二報皆說法。見色聞法得無忍。音響柔順無生法。

夫以彌陀本願者。人中之目。足天上之骨髓也。願往生之人。誰不依憑乎。彼在世之章提者。因於禁苦。厭於娑婆。依於見佛。悟於無生。花嚴云。念佛三昧。必見佛。觀經云。以見諸佛。故名念佛三昧。計知夫人見安樂能人。得彌陀本願念佛三昧之人。末世之凡夫者。聞於本願。發於三心。於臨終。見佛之時。應念佛三昧者。在世與末代。正雖異。願生安樂之國也。矧云。若佛滅後。諸衆生等。我等何作卑下。嗚呼。不圖有御詔。整承諸无所。于故障。仍焚沉水香。於三尊前。請加可。

四一一

彼於二尊願。當夜有一高僧現於夢枕。告言予是沙門善導也。因汝信心深重。今來命汝。自今已後。指三定名義教相。應以二藏三法輪。定判淨土宗。更以余相承戒儀。可授有心之道俗。敢勿依先來教相。云云。

爰憑身夢寤後。異香貽於草菴。聖容若在于時。悲喜滿內心。落淚隣外儀。自爾已來。聞難易聖淨之名目。就二藏三輪之教相焉。今此之義疏者。即非余愚作。是京師之傳說也。賢者一見之後。勿令佗見矣。

于時建曆辛未二月八日。正月二十一日御札。同二十三日到來。抑就淨土宗元意。御不審少々記給畢。

因茲以愚意拙答。令進之候之處也。又四十八願義疏。依仰立其名。巨細事等。申合御使候畢。恐々謹言。

二月初八日 沙門 源空 彌勒菩薩御壇前

先日所令申付淨土宗不審惡問難多々。及見賢答。辭念立散候畢。又本願義疏。偏如謁光明院大師。深銘肝腑。爲悅不少。恐々謹言。

三月十三日 沙門 貞慶 勢至菩薩御禪室 彌陀本願義疏

大勢至菩薩經云。衆生有五過。即生惡道。何等爲五。一者不淨說法。二者出家還俗。三者无智受信施。四者以平形念珠念佛。五者超越次第。論念珠。依此等科。流轉惡道。一不淨說法者。或飲酒。不過一宿。而入道場。或行淫。不浴淨水。直入道場。不用開眼。或不用神分。若如是說者。其佛即盲目。亡者墮地獄。修善孝子。并聽聞隨喜人。皆墮地獄。二出家還俗者。其科過五逆。設利。益燒。恒沙堂。人不可利。還俗人。三無智受信施者。羅刹吸其氣。獄卒惱神。四以平形念珠者。皆是外道弟子也。非我弟子。佛弟子。我遺弟。必可用圓形念珠。五超越次第者。因妄語之罪。

必墮地獄矣。彌陀本願義疏

### 十 決定往生祕密義

決定往生祕密義

黑谷 源空

光明遍照

十方世界

念佛衆生

攝取不捨

問於念佛衆生。親緣增上緣等。有三緣。蒙攝取益。彼至無漏寶國。順次有何甚深義哉。答可有識深心。一者親緣者。彼阿彌陀如來。是一切衆生本有常住本覺如來。彼國種種莊嚴。即是如來內證法身實相功德顯故。阿彌陀如來者。我本有常住明了身體也。又彼國種種莊嚴。我心本覺應用故。彼本有常住之實相名號。是心本覺明了體故。是心即阿彌陀。是心即彼國種種莊嚴。

莊嚴。故和尚言。此心外更無異佛者也。判。是故心本覺圓明阿彌陀如來覺知。煩惱罪障自元。虛憊法。故其體相全無。豈無虛空雲。月一明了。如是稱名號。無始生死罪障惡業煩惱。忽消。明一法界空。我明心者。彼本覺阿彌陀。彼彌陀我念佛心無異體。喻水解則水成。水自元非異體。故稱是名號。流入大海。雖經劫如元不水。我迷妄煩惱水。解。本覺清淨心水。歸入。雖經無量劫。無生死流轉故。念奉阿彌陀如來本覺法身。我本覺常住身體顯。今極樂依正二報。是依正二報。我心外思。雖乞願難生。自元彼依正二報。我今本有常住心故。一念彼境界悉現。故和尚釋言。標心爲說。西方樂。欲使齊歸入正門。正門即是彌陀界。究竟解脫斷根源。又云。歸去來。他鄉不可停。從佛歸家。還本國。一切行願自然成。本國者。我覺常住心體是也。心體自元清淨。本有體覺歸本國云也。顯我心現極樂體。故云親緣也。二近緣者。彼阿彌陀。

陀如來自元我本有常住心故。欲見即現。念彼阿彌陀心自元即阿彌陀也。故念佛心即現阿彌陀。是故和尚念佛給從口佛出。此佛自外不來。唯我本覺了佛明現給。故云近緣也。問曰。我等是心。雖念佛爾不現佛。如何。答曰。心體念佛。雖本覺明了。被覆果縛穢身。不現本覺圓明心佛應用也。此穢身終盡時。心清淨可現無邊應用。喻雖月必明。如覆雲故。不現其光用。雲晴如施光用四天下。我覺了心又如此。有漏果縛身雲消滅。心一可明。法界空。和尚權者無漏身。即此身現應用可知。問前之煩惱障皆是覺虛憒法。無其體。依何果縛身。一何不現心體覺了應用佛哉。答煩惱罪障付心未顯色。故心了本覺無漏體。煩惱罪障即成無漏體。無其別體。此故名虛憒法。今果縛穢身。是色法顯故。未成無漏體。故障心體應用也。問成身體無漏體。故身若成無漏體者。可障何心體應用哉。答雖心色一

時節異。縱雖心無漏。色法過去業熟法故。不轉變。即無漏體。證者人應用入定現給也。是則心應現。有漏身非應現。聲聞證羅漢果。有餘涅槃時。虎狼難不免也。有餘涅槃者。指有漏穢身也。故此身終時。心一明法界可現無邊應用。法界即極樂界也。極樂界者。即我念佛心。此心城極樂界故。欲見者。即現。故云近緣也。三增上緣者。自元阿彌陀如來。我本有明了體故。彼歸如來。心本意清淨。聊無障者。煩惱障。惡摩之使。是虛憒法故。真實無漏心體且無障也。故云增上緣了此心無疑者。三心自然具足。其故稱無漏真實本願名號。故云真實。彼阿彌陀如來本覺明了體。我本有常住心體同體。一心信心深心云。我本有明了心。即阿彌陀如來了。心清淨。煩惱罪障不穢。阿彌陀佛本意心。我明了心相續不相離。故云迴向發願心也。我等衆生無始以來。差虛憒法。生死有漏輪迴不知數。雖然幸依善知識。得覺我本意常住心城極樂

也。可得歸本國事唯有命終時。依此不思議法力可知。乞願立遂往生者。必我引攝來迎給。我前立遂往生者。必佛臨終夕可來臨。佛願不虛者。必此一事。盡令成就。諸佛同體慈悲。我哀愍覆護給。一見後。納箱底。不可有御披露。是甚深不可說法門也。

出自天台小部集釋。

### 十一 本願相應集

#### 本願相應集

源空聖人作

それあふいて本願のちこりをたづねれば。煩惱具足のわれらがためなり。またく聖人のためにあらず。まことにこの道理をこころへて本願の他方に乗ずべし。

一問いかなるを他力とも自力ともなづくるぞや。答まづ他方に乗ずといふは。我身はこれ煩

惱具足の凡夫なりとしりて。もろくの妄念おこるといふとも。かゝる悪心あるわれらが身はいかにして彌陀の本願には相應すべきとうたがふこころゆめ／＼おこす事なくして。煩惱具足のならいなればとこころへて。ふかく彌陀の本願をたのみて往生をねがふべきなり。

二問彌陀の本願はもとよりうたがふにあらず妄念のちこるをいかにこころえてかの本願をたのむべきぞや。答まことにとも。さこころうるまことにいみじうましましける彌陀のちかひかな。かゝる妄念のちこるあさましきわれらをすてずして。むかへんとちかひたまへるたのもしさとふかくおもふべし。まことにこの佛の願にあらずばいかにしてか生死をはなるべきとこころえて。こころのうちにおもひはんべりて。たすけたまへと願力をたのむべし。また善心おこらん時にもおもふべし。われらがこころのいみじ

くてもこるにはあらず。これも彌陀佛の御たす  
けにて一念の善心もあるとおもふべし。また  
貪瞋等の妄念もあるとおもふべし。また  
のわれら。曠劫よりこのかたの火宅をいで  
ざる身なれば。まことに佛の本願他力をたのま  
ずばいかにしてか生死をいづべき。たゞ理をま  
げて佛たすけさせたまへともふべきなり。か  
やうに善悪の心のおこるにつけても。みなこれ  
佛力の御たすけなりとさとりて。願力をたの  
むをもて一向の他力に乗ずとはまふすなり。  
かくのごとくこゝろを念々にわすれざるを。  
十人は十人ながら往生すとはまふすなり。こ  
ゝをもてあらく、他力に乗ずるかたれとすべ  
し。つぎに自力といふはわれらがごときの煩惱  
具足せる凡夫の修行すべき行にはあらず。これ  
聖人の修行する道なり。聖人といふは菩薩な  
り。此の聖人たはもとわかれがごときの凡夫  
なりしとき。本願の他力に乗じて彌陀の淨土に

往生したまへるひと。かの淨土よりこの娑婆世  
界に菩薩となりてきたりて。よの／＼衆生をこ  
しらへて。彌陀の淨土にとつけんがために。こ  
の自力の行をば修行したまへるなり。このひと  
／＼はすてに惑を斷じ果を證せるひとなり。か  
ゝる菩薩たちの修行なればこそ。妄念をもあこ  
さず。煩惱をもまじへずして。まことにたうた  
き心性の妙理をあらはし法性の源底をまきは  
むることにてさふらへば。かくのごとく餘教の  
修行は煩惱妄念をまじへずして修行する行な  
るがゆへに。造惡の凡夫のためにたふるところ  
にあらず。これをもて自力のおほきなるかたち  
とす。この道理をこゝろへずしていまのときの  
往生をねがふひと。おほくみづからゆゑしき妄  
念をやめてまふすこそ眞實の念佛となるなれと  
こゝろうるゆへに。他力をたのむといへどもこ  
ゝろは自力をばげみて生死の畜里にながくめく  
るなり。かくのごとくのことば自力をばげむひ

とはまことにかしらの火をはらふがごとくすれ  
ども。身心をのみつひやしてまたくその利益な  
きものなり。

三。問ことばに他力と號すれども。こゝろには  
自力をばげむとすると云は。なにこゝろをさす  
ぞや。答善心あこるときにはわがこゝろのいみ  
じくてあこるとおもふがゆへに。ことばには他  
力をたのむといへどもこゝろには自力にかへり  
て彌陀の本願にはよりつかず。また妄念のあこ  
るときはあこるをいとひてあこさじとするほど  
に。本願をばこゝろにかけずしてたゞわが身の  
わろきことをのみなげきかなしみて。かゝるわ  
ろきこゝろにては往生はいかにとうたがひて。  
佛の願力をばたのまざるものなり。かくのごと  
く卑下心をなして。かゝるわるきこゝろへやう  
にては往生かなはじともふは。すなはち本願  
をうたがふものなり。かくのごとく疑心をあこ  
すものは。うちには本願をたのみながら臨終も

あしく往生せざるものなり。これひとへに自力  
をばげみて他力をたのまぬと申也。

四。問彌陀の本願は十惡五逆をすてずしてひか  
へたまふに。なんぞわがこゝろよくてぞ往生は  
せんするとおもふこゝろは自力のこゝろなりと  
て。さらはれて。かの五逆等の重罪にもすぐれて  
佛の願にはすてらるべきぞや。まことにこれ不  
審なり。いかゞこゝろへさや。答かの十惡五逆  
は惡業なりといへども。佛の願力に乗じてかな  
らず往生すべし。またかの自力の修行をばげむ  
ものは。たとひ善業を修行すれども佛の願力を  
ばたのまらずして自力をたのむがゆへに。佛の本  
願にももれて往生をとげざるなり。まことに佛  
の願のかたより衆生をすてたまふにはあらず。  
これ衆生のこゝろより佛の本願をとをさかり  
て。平等の本願に不平等のとがをいたす者なり。  
これまたく本願の手づゝなるにはあらず。たと  
へをもてこれをこゝろうるに。おほきなるかは



あり。これいづれぞといへば即これ生死の大海なり。このかはのしをば極樂と云ひ。ひんがしのきは娑婆の火宅なり。このかはにほほきなるふねあり。このふねといふはゆる阿彌陀の大願のふねなり。かのふねは行業のあしおれたるも。また戒定慧解等の智慧のまなこしむたるものも。乗じぬればかのふねのちからにてかの極樂世界のきしにはいたりつくなり。

五。問いまこの願力のふねに乗ずることはいかなる因縁があるや。答まことにこのふねにいたりつくにはほくの道をえたり。この道といふは機にしたがへる八萬の教門なり。いはゆる華嚴阿含方等般若のふねいかだ。法華涅槃のむまくるまも。戒定慧解等の六度萬行のみち。みなこの大願の大船にをくりとつくる方便のみちなり。まことにこのみちなくしてはいかにしてか。十惡五逆のとたえをこえて。この大願のふねには

乗すへきや。すてにかたのごときの大道をふみめぐりて。この南無阿彌陀の弘願一乘道にはいるなり。いさ自力唯心をあらためざる者は。この本願のふねにあしをいれてのらんとするに。このひとこゝろにおもふやうは。ふるさとのことをおもひて大事の用事をまうけて。ふねよりあしをあげて。なほおしかへるひとなり。かくのごときの一とはおなじく念佛を修すれども。自力唯心をはなれざるひとなり。かやうのひとはすて佛の不思議の願力をもて。凡夫をわたしたまふといふことをしらすして。彌陀の佛智不思議智等の五智をうたがひて信ぜざる人なり。

この道理をもてこゝろうるに全く佛のすてたまふにはあらず。たゞこの衆生の自力唯心のとがなり。またく佛の本願のとがにあらず。ふるさとのことをおもひいてかへる人のとがなり。このかへる人は自力唯心をはなれざる人なり。唯心の次第をくはしくたづねれば。妄念のこころ

われらが。いかにしてか往生すべきとうたがふこゝろなり。これよくこゝろにわかまへて。ふかく不思議の願力をたのしみて。かの无爲の淨土にまいるべきなり。かやうにさとりをぬれば。十惡五逆もみな往生し。五障三従の女人なれども蓮臺に乗ず。まことにかゝるほくの道をふみめぐりて。願海の一道にいるなり。かへりて生死に流浪せんことは。かなしみのなかにほほきなるかなしみなり。

へなり。しかるにまさしく出離のみち彌陀の願海に歸するにはしかざるなり。しかるにいまこの念佛の一道にはあらず。凡夫のいりがたきがゆへに阿彌陀の三字の功德をわかつて八萬四千にひらきて。一切衆生の根機にまかせて修行せしむるなり。さてこの宿善をもてふみめぐりて南無阿彌陀佛の大願の一乘には歸するなり。かゝるがゆへに一代五味の法輪萬行諸波羅蜜の功德みな彌陀の功德にそなへたり。かくのこどくこゝろへて三世の諸佛もみな彌陀一佛の利生方便の智慧のいたりなりとしるべし。しかるに俗諦恒沙無量の功德はまた彌陀一佛の内證の妙理なり。山河大地みな彌陀一佛のひらきたまふとこゝろの妙行なれば。功德として功なきにあら

六。問萬事顯密二道のなかに。一切の功德法門は生死をいづる直道にあらずや。たゞこの念佛の一門のみ出離生死のみちなりといひて。なんぞ一切諸教の功なきになすや。答まことに功なきにたりといへども。その利益なきにあらず。その利益ありといふはあになきにいはずや。彌陀の願海にいることはかの諸教の方便によるなり。かの諸教功なきにたりといふは。かの諸教のなかりたるに凡夫の生死をいでざるゆ

ず。かやうにこゝろうるを觀門とまふすなり。この智慧といふはみな三心なり。またこれ法身の如來の智慧なり。この智慧をえつるはよこまに三途八難の業因をとめて。すみやかに無

漏無生のさかひにいたるなり。これすなはち觀佛三昧なり。かやうにさとりえてやがてこのころをもて。佛たすけたまふとちもふを念佛三昧とはまふすなり。この念佛三昧の躰はすなはちこれ阿彌陀佛なり。三世の諸佛のなかには如来のみ凡夫を二わたしたまふ佛にておはしますなり。餘はみなこの佛の方便なり。たゞしかくのごときの諸佛もひとをわたしたまふかたは。阿彌陀のいはれにこそ利生のみちをばあらはしたまふなれとしりて。ふたごころなくしてこのちもひに住して。念佛をまふさせたまふべきなり。

七。問よろづの佛出世したまふに。惡を制するをもて本懷とす。なんぞいま妄念はちこころも彌陀一佛に歸せよとのみいひて。懺悔の法をもちるざるは。かへりて邪見にあらずや。答御難もともしかるべし。たゞし惡をとめて善を修するは三世の諸佛のちほきなる教なり。いかなる

ひとかかの禁戒をそむきて。ほしいまゝに惡業をちかさんや。しかりといへどもわれらが妄念は對治の法をまうけて。あふいて彌陀に歸することはそのゆへあるべし。いかんとなればつみをつくらじ妄念をちこさじとはげむは。すべて佛道修行のならひなれば。懺悔せずばあるべからず。ただし自力の行門によりて。まづ妄念のちこればこれをおこさじとこさじとする懺悔のかなしみに身つかれぬ。また殺業无慚の懺悔には發露涕泣のなみだをながせども。亂想煩惱のかせしはらくもやむことなし。无明住地のなみひまなくたゞへて。法性の月輪あらはれがたし。かろがゆへにあふいて彌陀に歸したてまつれば。罪障を懺悔するなり。すべてかやうに懺悔は自力のちよばざるゆへに。妄念をさへげて彌陀に歸して清淨無漏の懺悔の躰には。これ彌陀の願力にこえたるはなし。

八。問諸教のなかにも滅罪懺悔のやうをときた

まへり。なんぞいま彌陀の願力のみ滅罪懺悔の躰といふや。答かの諸教のなかにとくところの滅罪の法はみな彌陀の願力に歸して生すべきなり。かろがゆへに觀經の下品下生にいたりて滅罪の機能をひらくには。十惡五逆の重罪もみな一念十念の功によりて滅除して淨土に往生すとはときたまふなり。かやうの正念に住してかまへてちこさじとこそかなしめども。凡夫のならひなればまたちこころなり。これをかなしむゆへにこそ佛に歸して懺悔すべけれ。かろがゆへにいまいだしたまへる所の義文は。方便懺悔の義にはあらざるなり。

九。問いま彌陀に歸して懺悔すといふはいかんが懺悔すべきや。答ていはく。いはゆる妄念のをこらんとさには。ちもひをへだてず。とさをへだてず。日をへだてずして阿彌陀佛たすけたまへとちもひて。名號をとなふればすなはち罪障みな滅除するなり。かの佛の清淨无漏の懺悔に

あづかりて滅罪のちほきなる躰とすべし。これらのことはりに住して。ちからのちよばんにしたがひて惡業をちこさるべきなり。ちからをよばざらんとさには佛たすけたまへとちもひて。行住坐臥にこころをばげまして。よるひるわするゝことなく。佛の本願にこころをかけて念佛すべし。たゞ南無阿彌陀佛とまふすは別したる行などはちもふべからず。ただわれらたすけたまへ阿彌陀佛とまふすことはりなりとこころをて。こころには佛たすけたまへとちもひて。くちには名號をとなふるを三心具足の念佛とはまふすなり。三心といふについでちほくの義ありといへども。たゞ自力をこころえわきて彌陀の他力の本願にすがりて。眞實心のみぞ生死をはなるべきとちもひて。まめやかに往生をねがふて決定往生のちもひに住して。佛の本願をもて造惡の凡夫をわたしたまふことは決定なりとしりて。すこしのうたがひもなく決定のちもひに住

して。まよす念佛を三心具足の念佛とはまよす  
なり。さてかの淨土に往生しよはりてのちに。  
證をひらきてたちかへりて一切衆生をことごと  
くわたさんとあもふをもて。往生をねがふをす  
なはちこれ廻向發願とはまよすなり。かくこゝ  
ろえて念佛をまよすべきなり。これはこの宗の  
大事なり。ゆめく懈怠すべからず。

## 十二 西方發心集

### 西方發心集

法然上人御作

夫念佛三昧妙行末世有緣之要業。重罪消滅之秘  
法。凡夫往生密門。五劫思惟本意。四十八願根  
元。諸佛證誠大善。釋迦勸進之大利。萬行超越多  
善。八萬法藏之惣體。時機相應之教門。罪人橫  
超之頓法也。六方同心之證誠なれば。十方衆生

の疑惑解。兆載修行大善なれば五逆勝法露消。平  
等無上願なれば善惡共引攝。十方超過國なれば  
凡夫亂想嫌はず。娑婆厭便あり。有爲之苦惱目  
見へたり。淨土開望あり。微妙快樂無極。木石  
非誰厭はざらん。畜類非何願はざらん。然稀欣云  
へども堅固信心至さず。僅勤と云へども。正し  
く決定業住せず。心猿枝に移てしづめ難。意馬  
境に馳て不<sub>レ</sub>留。口には名號を唱れども。心は五  
塵に染。手には念珠をひねれども。思は四方に馳。  
外には通世の相を示せども。内には名聞の望胸  
に滿。言には往生の事を談ずれども。身には輪迴  
の業を造。流轉生死を知らざれば。厭心不<sub>レ</sub>實。淨  
土依正を觀ぜざれば。願心も誠ならず。彌陀の本  
誓に信の發らざれば。疑心止がたし。淨土の莊嚴  
に思を留されば。往生の行不定。淨土の正業た  
る念佛は今生の爲にすたれ。往生の正因たる信  
心は。名利の故ぼださる。當<sub>レ</sub>知往生の大なる  
怨は只是我心也。心は第一の怨と云へるは。云

はれたるをや。口惜哉や殺盜姦を恣にして曠劫  
より以來輪迴す。根哉貪瞋癡を逞して未來無窮  
に難<sub>レ</sub>出。我身ながら何我爲敵とならん。我心た  
りながら何我爲に敵たるや。名利を好は我爲に  
似たれども。我を縛する生死の繩。利養を求は我  
身を助るに似れども。我を滅す流轉の劍。生死に  
沈も我心。凡夫と成も我心。諸佛と成も我心。諸  
佛は先佛の教に隨て。名利之怨を厭捨。淨土の  
行を營て永く生死の里を出。實室寂光の都に住  
し。三身を顯し。自受法樂障なく。利益衆生自  
在也。我等は名利深くして。諸佛の教に不<sub>レ</sub>隨  
彌々生死に沈入。冥より猶冥に迷行。三因佛性  
ほろぼして憂悲苦惱際もなし。自界他界限もな  
く。今まで苦海に沈也。此心進めば往生不<sub>レ</sub>遠。  
此心退けば輪迴難<sub>レ</sub>出。須進心を師として進心を  
こしらふべし。然則早此心をこしらへて淨土行  
を尋。善知識に近付て穢土の流來を勘へて厭心  
勸。淨土の快樂を尋て願心を勵し。彌陀の本誓を

探て決定之業に住し。雜亂の行を捨て。一心不  
亂に定り彌陀本誓を尋て。決定の心を發して。  
自力の心を捨て、他力の不思議を頼べし。不知  
疑あり。知ぬれば信心あり。知ては勵とも信心  
不<sub>レ</sub>發。知ぬれば信心自然にあり。故心をかたら  
ひて。往生の道を尋知ぬべし。何にも心をかたら  
ひて。名利を厭へ。我心惡に趣すな。我心淨土を  
願へ。我心耻べし。過去の諸佛の教にも、れ。現  
在淨土の利益にも不<sub>レ</sub>預。當來出世の導師にも結  
縁せず。是則我心懈怠なりし故也。我心不信な  
りし故也。これ心の懦弱なりし故をか。耻べ  
し。曠劫輪迴の牢人たる事を。悲べし。多  
多生受苦の迷人たる事を。急や。希に生たる  
人身に。勵や。區あへる誓願を。露命俄に散な  
ば。後悔すとも甲斐あらじ。他力の船に乗せず  
ば。永生死に沈なん。一生の勤苦は須臾の間。  
榮花をば功德池に開。一念十念は刹那因。威報  
一生補處極。罪人橫超の秘法。凡夫易往の密意。

難化濟度の頓救。平等利益の大願也。此法に歸せずば。争か濁世凡夫生死の里を出べき。此門に入ずば。何解脱望みを遂べき。努閑にする事なかれ。穴賢く、忽する事なかれ。曠劫より以來。つれなく用ざりし我心なれば。能々今度も心底探て穢土執心たち往生の信心を可、勸。其言重々在之

- 第一苦與樂何求事
- 第二昇進沈淪何願事
- 第三名聞耻辱何好事
- 第四富貴貧賤何求事
- 第五勝他人思否事
- 第六厭苦行否事
- 第七惜身命否事
- 第八孝養父母報君恩否事
- 第九金箱納獨體錦袋裏腹斷事
- 第十服甘毒死與服辛藥安穩事
- 第十一重病急治否事

第三。問名聞與耻辱汝何を好。心答云名聞を好故に我世路を不捨。我詰曰云何極樂に往生して大名聞を施さんと思はざるや。夫現世の名聞は奇とするに不足。緣愚夫の耳を驚かし。愚意の眼を誘計也。一旦榮花無常の風に散。須臾の快樂殺氣の怨奪はるゝ時は。車を飛せし人を姿を場中にくだし。懦弱太しかりし輩も山野に屍をさらす。加之後生に至ては獄卒杖をふるるとき閻王罪を噴て鐵札に名を殘。銅柱に骸を留現世後世の大耻辱賢聖冥衆の見所。心愛耻に非や。然彌陀自迎。觀音蓮臺にうけ。勢至頭をなて普賢轡をさし九人の菩薩は伎樂歌詠を調。恒沙の聖象圍遶し。十萬億を須臾に超越し上品蓮臺に化生して。十地等覺に昇進し慈悲法界に及。利益を一切に施し。十方賢聖の聞處三世諸佛の見給所。大名聞に非や

第四。問富貴貧賤何をか求むるや。心答云富貴を求る故に四方に追求する也。我詰云然者何安

第十二見刀劍追問怨敵國事

第一。苦與樂何求者我心に問云苦與樂何か求るや。心答云樂を求故に五欲に着せり。我詰云樂を求ば念佛を勤て淨土に往生すべし。何ぞ微妙の樂を不、求。只夢の間の小樂に就。泥梨に沈て永苦を受んとするや。今生の榮花は一期の程。苦果を憶切に結。一世の念佛は須臾の間。往生を蓮臺に遂。何常住の快樂を厭て。刹那の諸欲にふけり。何須臾の念佛をいたみて永劫の苦果を招けるや

第二。昇進與沈淪何をか願や。心答云昇進故に世路を走。我詰云何念佛を修淨土に往生して早十地等覺の位に叶はんと欣ばずして。只幻の如くの味食を盛み。苦果の依身を受。無窮の生死を招かんとするや。有爲の龍職は夢の間の榮。風の間の樂。幾の昇進があるべきや。豈無爲の上位に叶。常住の快樂無退の覺位に等からんや

養往生大富預らんと不、思や。夫現世の富貴を求るには。無量の罪をなし。五道の貧里に留り。三途の牢獄を守る。淨土を願には。南無彌陀佛と唱る一念に。無上大利の功德を得。往生を涅槃に遂。恒沙の福智成就し。位無上大覺に至。汝已貧海の流をくみ昇進石寶にあり。何現世の輕き寶を求て。七覺上財を捨。貧里に留るや。何淨土の妙寶を求て。萬德圓滿の如來の長者とならざるや

第五。問汝他人勝れんと思ふや否。心答云勝他の故に名利を不、捨。詰云然ば何淨土を願ざるや。夫五逆謗法も皆往生を得。田夫野人も來迎に預る東岱の畑を訪は紫雲の淨瑞一非。北芒の露を尋ねれば。金蓮迎攝幾ぞや。如此事を見聞に何勝他の心を不、發や。汝が聲流轉の榮花を見毎に傲慢の劍をのむ何他人の往生を聞と云とも念佛にたてをつく。汝が勝他の心偏頗あるにあらずや。貴人の昇進をすら嫉む。何惡逆の往生を

をねまざるや

第六。問汝苦行を厭や否や。心答云苦行にたへざる故に修せざる也。我詰云然ば何世欲に着せるや。名聞を求むるには身心安からず。自の貧賤を顧るに他の富貴なるを聞。妻子の裸なるを見。奴婢の貧なるを思に賤物の望肉を穿。衣食の愁慄にとる。君に仕へ主に隨へば。刀をふみ氷を渡るが如し。奔波利を求めば遠境を越身の才能に依て手足を疲。貪求するに得ざれば愁歎する事毒の矢にあたるが如し。或はたま〜求得つれば。財寶に依て命を滅し。嚴寒に氷をふみ。炎天に汗を拭て。夜を以て晝につぎ。四方に馳走す。傍輩昇進を見ては瞋毒の劍腹をたつ。怨家の吉慶を聞ては瞋毒の炎胸をこがす。歎哉往生の爲に角ばかり身心を責れば。三昧發得すら得がたからん。況順次往生をや。若汝苦行を厭はば。何身心をつからかすや。心身をつからかさば。何往生の爲にせざるや。口惜哉惡

業の爲に肝膽をくだく事。只是貪欲の爲に身心をつかるゝは覺へざるや。細に勤るに名利を如計堪難苦はなし。故永觀云名利を求る者は今生も猶不安。嚴寒に氷を凌て日夜に經營し。炎天に肝を拭て東西に馳走す。區一有又一闕ぬ。有に付ても愁。無に付ても憂ふ。身心苦勞して安き時有事なしと書給へり。汝名利にたぶらかさる。苦を以て樂と思へり。出離の志なきが故に。易き念佛をば苦行と思へり。往生を願ひ念佛を勤れば。今生もたのもしく。後生も喜あり。名利心なければ衣食叶易し。衣は寒を防を以て色を好まず色は寒をよせがされば也。食は飢を除を以す。味は飢をのぞかされば也。色を好み味を食る程に財産を亡し。身心をも失て今生後世の損をなす也。濁世の罪人を機とすれば卑下の障なし。行住坐臥を嫌はねば。身に易行の便あり。六字に願行を具たれば淨土の行に不足なし。一念は無上の善なれば。正定業に豐也。轉惡不思

議の用あれば。五逆謗法消失ぬ。又往生不思議徳あれば善惡共に行やすし。延れば上一形の勤。つゞみれば下一念の行也。汝何此易行をば苦行といたみて。苦惱をば。たのしと思て。此易行をば不信にして彼沈淪を好や。此往生の業をば背て。彼輪迴の大苦を招や。甚愚也。甚狂せり。甚ほれたり。甚いやし。

第七。問汝身命を惜や。心答云身命の爲に名利を不捨。我詰云己が身の爲に諸慾を求めば何ぞ。身心の爲に淨土を願はざる。今身の爲に苦患を恐れば。何受生の爲惡業をつめる。何一旦の此身をば惜て。多切の我爲に怨なる。刹那の榮花を求て。住常の快樂を欣はざる。須臾の小善をば恐て。遠劫の猛苦をば厭はざる。又情思へば。此身は我爲に無益也。設金玉をなげて養たり共。地獄猛火にやかれん時は。片時の苦にも不<sub>レ</sub>可代。徒犬鳥の胸をのみこやかす。此身を養はんが爲に連々に惡業を造て。三世々塗に墮て大苦を受

しに遂に片時も苦を助さざりし也。いたはりて受しも何かせん。かしづきてもよしなし。此度淨土を行。臨終に生死を捨終焉に往生を遂ん人の爲には。此身尤因あり。いたはる可し貴む。べし此身を捨て何を以てか念佛を唱て蓮臺に可<sub>レ</sub>乗往生を願はずば養ても何かせん。惜みてよしなし第八。問父母に孝養し。師君に報恩せんと思や否。心答云。彼の爲に遁世す。我詰云志肝膽を摧くと云へども。力水莖たらず。適是をそなふと云へども。互癡愛をのみ増して共に生死に沈て浮期なし。三界に流轉して恩愛たふる事なしと説玉へり。淨土に生ぬれば。彌陀の加力を受け。生死を渡淨土に導て。苦惱を除き。快樂に預て。生共死を越。同く正覺を成ぜん。豈大孝に非や。彼につながら。共苦海に沈同牢獄をまもらんは報恩に背なん。去ば恩を捨て無爲に入を眞實報恩者と説給へり

第九。問金箱に調體を納。錦の袋に腹を裹める

人は。汝是に就て翫や否。心答云此思をなす事な  
かれ。且をそろし。且またなし。猶近づくべから  
ず。况や翫や。我詰云汝が云處の糞物は皆男女に  
あり。彼箱と袋と何のかはりめがあるや。往生要  
集云人の身の不淨なる事は繪かける瓶に犬屎を  
入たるが如し。海水を傾て洗共清むべからず。  
智者は是を厭。愚者此を愛すと云へり。薄き皮を  
以裏。綺たる衣を以ていろどれる事。繪かける  
瓶錦袋如し。頭の中のなづき腹の中の五臟。三  
焦。六腑に至まで見時は此身に過たる。またな  
く。うとましまし物やはある。鳥羽鹿の角は莊の  
具にも。しつべし。人の身に於ては身の毛いよだ  
ちて恐しく。またなし。畜類にだにも劣たりと。  
誰か是を知らざる。誰か是を見ざる。かゝる身  
と知ながら色の好にふけり。若にほださる。是  
を愛して日を暮し。是に就て夜を送り一生はか  
なく過ぬ。又後生何ぞ頼や。適難受人身を受な  
がら。空三途の舊里に歸らん事。甚難。偶本願に

あいながら。もだして八難の古郷へ向ん事返々  
遺恨なる可し。早堅固の信心を抽。彌陀の願に  
乗じて。穢土の穢しき身を捨淨土の妙なる形を  
欣ぶべし。  
第十。問汝甘毒を服病死せん。辛薬を服して  
安穩ならんと。身命を惜まんに。いづれをか服し  
てん心答云辛薬を服して身命を助からん。我詰  
云世間の食欲は甘毒の如し。甘に似て人を害す。  
淨土の念佛は辛薬の如。苦きに似て身を助く。  
汝何世欲の毒を飲て苦海人と成り念佛の法薬を  
服して淨土の聖衆とならざる  
第十一。問重病を受たらんに急是を治してんや  
否や。心答て云重病身ををかし殺鬼に命を奪る  
時は鍼灸のいたさも不覺財産のほろぶるも  
不願。我詰云無常の殺鬼は汝が身にそいて月夜  
に命をほろぼす。惡業の病患は汝が心に付て朝  
暮に心をそこなふ。何此病を治せざる。何ぞ殺  
鬼を恐る速不思議の本誓に乗惡業煩惱の病を

偷。無生の室國に生れて無常の殺鬼をまぬがる  
可し

第十二。問刀劍の追を見。恐賊の圍を聞て逃ず  
して安樂に住してんや否や。心答云速可逃我詰  
云老病の猛使は日々に追。無常の怨敵は夜々に  
呵。目の前に顯たり。誰か是を知ざる。乍知  
住着し。見ながらいとほず。くるへりく聞な  
がら逃れず。驚て去れ。とく急て出よ

條々の教義の事淺に似れども出離生死の出門往  
生極樂の入門也。此理を心に浮て穢土の執心を  
たて。懈怠の退心を勤て常住の業に安住して不  
思議の誓に心を入べし。心我に教訓せられて云。  
さては生死に沈ける事。他の答にあらざりけ  
り。是心のすまざる故也。悔哉や名利心にほ  
だされて。生死の獄につながれける事よ。嬉哉  
や彌陀の誓に救れて菩提の都に入らん事急べ  
し。永たゆむべからず悲喜の涙を流して慥慢の  
障をたをしつ

問彌陀の本願に四十八あり。其中に本意なる願  
ありや。答云四十八願皆本願なれども。第十八  
念佛往生の願彌陀の本意也。是弘願也。此れ眞實  
也。是不思議也。親處也。餘の願は是眷屬也。  
是方便也。是助緣也。故善道釋云弘誓多門にし  
て四十八願なれ共偏標念佛最爲親人能念佛々還  
念專心想佛々知人と云へり。是則佛の本意に叶  
故也。互念し互知べし。問其本意弘誓の文いづ  
れぞや。答云設我得佛十方衆生至心信樂誹謗正  
法云是本意の弘願の文也。問設我得佛云は何  
ぞや。答云設我得佛者阿彌陀佛の因位輪王の位  
を捨て鬘髮をそり落て。法藏比丘と成て。無上  
の道心を發。世饒王佛に歸して。度衆生の願を  
發。淨土の相を見せ給。淨土の行を説せ給へと  
請ぜしかば世饒王佛。法藏の請かなつて二百一  
十億の淨土の莊嚴を現じ。二百一十億の行を説  
給ひき。其時法藏菩薩諸淨土の莊嚴を見諸の淨  
土の行を聞て後。五劫が間。思惟の室に入て。

見所の淨土の中にをろかなる所をば嫌捨て妙なる所をば選取て。極樂建立の莊嚴の具をそへて諸佛の淨土に超。罪惡凡夫を不嫌生安かるべき事を計て。聞し所の萬行の中に難行小善を嫌捨。易行の大善を選取て淨土往生の正行をすぐりて諸佛の利益に超て煩惱具足のたぐひの行安からん事をはからひ巧て。淨土莊嚴具をそへて。往生の正定の業を四十八に立一々二願の下に誓言をたつ。此四十八願成就して淨土を建立し。凡夫生ずと云は。正覺を取らしと誓給ふ。此誓言既に成就して。法藏菩薩正覺を成。淨土の莊嚴を圓滿し。念佛の衆生十方に滿て迎攝尊形娑婆通じ。一念十念の凡夫。不思議の本誓を信樂し。分段生死の海を超て安養淨土生る。人雨の降るよりもしげし。此時をさして昔因位時を約束して設我得佛と説給ひし也。問十方衆生とは。いかにぞ。答云十方とは四方と四維と上下とを十方と云。是三界の中の諸の世界也。

善處も惡處も共に所化の國とす。平等の願なるが故に所を殘さざる也。衆生と云は。この娑婆世界の中の諸の凡夫也。惡人も善人も破戒も持戒も有罪も無罪も有智も無智も女人も男子も實賤さも同往生の機とす。一子の慈悲なるが故に。衆生を漏さざる也。如此平等の願に違ながら今まで往生をとげず。生死に沈める事は。只是衆生の厭はず。願ず信ぜず。行せず。名利にほだされ。穢土に着せる故也。信ぜし人は皆生れ。信ぜぬ人はもれ居たり。早弘誓に導つさて。いそぎ信心成就して。最後に正念現前し。一聲十聲唱迎蓮に乗移。菩提の都に生べし。古へ是をつかねて。十方衆生と説給也。問至心とは何ぞや。答云至心と云は眞實心也。身に禮せん事も實に。口に唱る事も實に。意に念ずるとも實に。又惡を去るとも善を勤事も實に。自心も他心も自界他界も厭事。捨る事。かろしむる事。あなどる事。皆實に心の底に露ちり計も三界六道をば

賤所を拙き衆生ぞと。此二つはうらやみ。ふける事なく淨土の功德莊嚴と聖衆の功德莊嚴と彌陀の功德莊嚴と種々微妙に觀々蕩々たり。説法衆會の砌坐禪入定の室あり。技樂歌詠の光庭もあり。池には八功德水をたへ。波苦空を唱へ蓮異光をはなち。樹常樂をしらべ。微妙法を唱ふ。依報正報の功德心も不及し語宣難し。此の淨土の依報を常に心にかけて。たつとみ仰。願うらやみ。只一筋に往生より外に大事なしと思定て。胸の内の家主として喜もあれ憂もあれ。謗もあれ讚もあれ。名聞にすかされず。富とても夢の中のとみ也。貧とても歎くべからず幻の如也。只是露の命の消ぬほど。穢土のなりくせと心得ふせて。はかなき事に傾動せられぬを至心と云也。名利の心ふかくして。往生の思ひぬになく外に貴相を示して。歸依を求め。利養をうかがふ人は。念佛は十二時に唱。かふべの火を拂が如すれども。雜毒の善と成虚假の行と成て。

ふつと往生せずと善導釋し給へり。四句の不同をあげて後世其得失を顯して往生の得不得を知せしむ。行者に四人の品ある可し。一者身に威儀をそなへ口に念佛をたへず。心には本誓を信智し。四に威儀のふるまい。通世の相を顯し。三業の所作出要の爲にして惡惡懈怠の心なし外器をかざつて通世をもうかはず。内心かだましくして。利養をも。へつらはず。名聞思なし貪噴邪偽なし。奸詐萬端なく。雜毒のけがれなく。不可の科なく。外器も精進に内心も賢善にして。内外相應して往生を願ふ人あり。決定往生の人也。當時かゝる上根の後世まれなる可し。不堪云ふ共。是をまなぶべし。二外に貴いみじき相をもほどこさず。内に名聞利養のかだましき心もなく三界をうとみて厭ふ心肝をみて。淨土を愛して願ふ心髓にとをり。本願を信持して胸内に歡喜し。往生を願て念佛に懈らず。外には世間に交世路をわしり。在家に伴て妻子に隨逐

し。威儀更かけて。遁世のふるまい。ふつとなし。然共心内に往生のいとなみ片時もすたれず。身口の二業を意業にゆづり。世路の營を往生の資糧にあてがひ。妻子眷屬を助成と頼み。齡の日々に傾をば往生のやうやく穢土を去と心得て。命終らん時を生死のはてとあてがひ。形をすてし時を苦惱のをはりと期し。佛は此時に現せんと誓ひ影向を柴の樞にたる行者は此時に往かんと期。結跏を觀音の蓮臺まつ。此故にいとがしき哉や。極樂へはやく此息たえよかし。悔哉や。我心惡業の爲めにつかはれける事よ嬉哉我心無爲の都に還往て四生の主と仰がれん事。かやうに心の底をすまして傾動する事なく。縁にあへば悦もあり。愁もあり。をかしき事もあり。腹たつ事も有。をころしき事もあり。うとましさきこともあり。にくき事もあり。いとをしき事もあり。かやうの事共あれども。是一旦の夢の間の穢土のならひと心得て。是が爲にまぎら

かされず彌々厭ひ。旅泊にあれたる宿の氣色にして明しかねたる心地し。とりわき後世者ともしられず。世間にまぎれて。只佛の本誓に乗じて。ひそかに往生する人あるべし。是實の後世者なるべし。是ぞ近代の後世者のなりに相應したる様躰なるべし。此人の心だてを學び。此人のふるまいを。まなばん人は決定往生人も。三は外に遁世の相を示して貴すがたを施し。事にふれて人に勝。いみじく貴事を人に見え聞へばやとはげみ。我は世を厭ふ由を人に語り厭ふ姿を見しつらひよき人を見ては疵を求てそしり。わろき者を見ては愚なる事をにくみ。善人を見ては學ばんとも思はず。愚なるを見ては進んとも思はず己が勝たる事のみ願さんとはげみ。貴人を勝りては我彼にまさりたりと思はれんが爲也。愚なるを。にくみては。我彼にすぐれたり人に思はれんが爲也。此外に名聞をばどこし。内に利養を求るしたく也。是則善導縁給る所

の外現精進のひじり内懷虚假の蛇蝎内外相違の行者也。是必不可者也。惑者也。賢善精進の威儀者名聞にかへて往生の助なし。急走急作の勤行は利養にゆづりて成佛の益なし。善導ことわりて必不可也と釋し給へり。此人をはふるまいをも心だてをも學べからず。往生すまじき故也。四には外には厭すがたもなく。内に願ふ心もなく。無相と號して身に袈裟もかけず。念珠はかしらにかけて手に取事もなく。口には人のとがを問て念佛にたてを。つき。心には衣食をむさぼりて往生の思なし。かゝる人もあるべし。此人はつむに往生すべからず。ふるまいも心だても。此人を學べからず。先の二人は決定往生の人也。往生を願はん人は常に我心の底をさぐりて。此四句の行者按て後の二人を捨て先の二人の心だてを法藏は至心と説。釋迦は至誠心と教。善導は眞實心と釋し給へり。問信樂者いづれぞや。答云信樂と云は深心也。

彌陀の本願を信じて。一念も疑事なきを信樂と名也。いかゞ信するや。深く彌陀の他力本願を信持する也。信持しぬれば疑なし。信持せざればはげめ共信心發らず。深き本願を知ぬれば。信する心も深し。深き本願を知らざれば信する心も淺也。然深き信心定り。本誓を知て深き正業を持て疑なく。とめて攝取の益をかうぶつて往生の望を遂べし。信。二種あり。一自身を信ず。二は他力の佛恩を信ず。自身を信ずと云は是に二種あり。一は罪惡煩惱。二は善惡因果也。罪惡の煩惱と云は經云煩惱深して底なし。生死海無邊。又二河の譬を見べし。又無量壽經の五惡段等を見べし如是煩惱と惡業とによりて無始より生死に沈浮期なかりき。惡業の病重して諸佛の法藥もしるしなく。煩惱の疵深くして菩薩の藥治も力なし。三界の獄に生。法身の惠命いさ難。六趣の間に輪廻して菩提の法體成難し。其より冥に至。いつかは無明の眠をとむべし。夢



より猶夢に沈む。早晚生死の夢を覺さん。無始より今まで生死を離ざりし事は。只横五惡趣をさる名號のつるぎを得不得。横に四暴流を渡る本誓の船に不乗故也。此故善導釋云決定深自身は是罪惡生死の煩惱具足の凡夫也。曠劫より以來常に流轉して出離の縁なしと云は。彌陀の他力の強縁に未あはずと也。今已に釋迦すゝめ教によりて。彌陀の強縁に逢奉て深本願を信じて堅本誓を仰。滅罪を名號にゆづり。往生を弘誓に任ず。彌陀の強縁にあらざれば争か凡夫生死を出まじ。我身のところが重事を信じて彌陀の強縁を深くたのめとすゝめあり。二は善惡の因果と云は善導釋し給はく。世出世間苦樂二種の因果を信じて是等の因果及諸の道理を疑する事なかれ。若疑をすれば惡業をなす。世間の果報すら。うけず何況淨土に生るゝ事を得んやと云へり。惡業を作必惡道の報を受。善因を作。定て善處に生るゝ事を得て樂をうくと知。惡業を

作りし故に惡道に落ち。善業を作れば三善道にのぼりき。然ば是等の因果にかへられて。六道に輪廻しけり今よりは三界の業因を止て穢土の執心をたちて。六道の果を今生にはたし。分段生死を臨終にすつべし。今よりは往生の正因たる信心を建立し。淨土の正業たる念佛をすゝめて。極樂の果報を待。無生の果報を期すべし。穢土の因果を知て。彼をすて淨土の果を知て是を取れと云也。二は他力佛恩と云は此恩に付て二あり。一は現在の他力。二は後世の他力也。現世の他力と云は。誓願に云我於無量劫不爲大施主普濟諸貧苦誓不成正覺と説給へり。此誓願成就の文云。我爲長者居士豪姓尊貴我爲刹利國君轉輪聖帝我爲六欲天主乃至梵王説給へり。是は彌陀佛長者と成て貧しき者を助。尊貴と成て賤き者をかへり。國王と成て民をはぐみ。天主と成て諸天をめぐみ。梵王と成ては。三界をまほり。是等は

彌陀の御本意にあらね共。平等一子の御慈悲にて。十方の衆生を一人も漏さず救はんが爲に。生を十方と共に示して現世の恩をほどこし。是を結縁としてやうやうこしらへ進めて。善本をうへしめ。念佛に歸せしめ。願力に乗しめ。極樂に導て大乘を説。無生に叶はしめんと。たくみて。講給へる五劫思惟の本願兆載永劫の支度也。爰知生々世々に昔より世を渡事も現世の恩を蒙りけり。過去の宿善を殖けるも此佛のかまへ也。今生の念佛も。この佛のこしらへ。當來の往生も本願の故也。成佛を遂も妙觀察智の力也。これほど深思食ける御慈悲をこまやかに勘へて人々能々思知べし。是現世他力の恩のかまへ也。二後世の他力とは是に二あり。一方便の恩。二眞實の恩也。一方便の恩と云は。經に説て云。不可思議兆載永劫菩薩無量の徳行をつみうへて。欲覺。瞋覺。害覺。をなす。欲想。瞋想。害想をもちさす。色聲香味觸法に着せず。乃

至大莊嚴を以て諸の行を具足して。諸の衆生の功徳を成就せしめんと説給へり。是は阿彌陀佛の因位の昔。三僧祇の間三毒の煩惱を止て眞實の善根をつみ。六塵の境外に染ずして。清淨の功徳をうえ。萬行萬善を阿彌陀の三字に籠て。大善となし。難行苦行を稱名に構て易行となし。無福の凡夫に無上の大利をあたへ。無行の衆生に易行正業をほどこし。一聲十聲の功に一切罪障速消三念五念の力に善惡の凡夫定て生る。此恩を蒙らずば懈怠の我等難行に退心をこりて。順次遂かたからまし。此時に非ば。不信の凡夫小善に疑の心おこりて。往生すたれなまじ。今正一念に大乘を備て易行にいさみあり。本誓信心定りて。易往の疑とけぬ。又經云其衆生ありて。此悲にあふ者は三垢消滅て身も心もやわらかになれば。善心おこれりと云へり又云三途勤苦の所にありても。此悲に相ぬれば三毒皆やむ事を得て。又苦惱なし。命終れば後生

には解脱を蒙と云也。是阿彌陀の心光にあふ。人食噴癡心あか消ほろびて。身心やはらかに成て。喜す、ひ心發と云也。然ば三界を厭淨土を願。念佛に歸せしより世の中は。はかなき事思しられ。むしろ心の薄なるなり。我も人も夢幻の如なるを見聞いかりても恨ても。益なし。いかれば功德の財をほろぼす。よしなしと心得て。腹立事もやみ。三界は生死の獄。苦惱のさかいと知極。淨土は菩提の都快樂の所と覺得て。ねてもさめても願ふ心あらば。恐なる心もやみ。不信なりし心も信心となり。退せし心も進心となり。穢土を執せし心も淨土を願心となり。此身を愛せし心は。三菩提の色身を思。此無常の命を。ひさほりし心は。彼常住の命を支度し此六道に迷し心は彼三菩提をそねむ心となる。かやうに。わるき心は。よき心となり。恐なる心は賢心となる。我等が心の賢くて。すゝむには非ず。是彌陀佛の光の我等が愚なる心のや

みを照して厭ふ心のすゝみ。願ふ心のまさり。信ずる心の發る也。三途に墮たる衆生も。此光にあひぬれば。くらき心を照されて。三毒のやみ晴て苦惱を除給ひて。明き心發り。賢心發り信ずる心をこり。念ずる心をこる命終れば往生す。地獄より往生する人もあると云へるは此光にあひし人の事也。此方便の恩を蒙らずば。争か我等懈怠の心を改て進心を發さまし。是後世の方便の恩也。二後世の眞實の恩と云は。是に付て二あり。一には第十八の南無阿彌陀佛大利益の大善也。無上の功德也。是易行也。抑極樂は大乗善根の國。無漏涅槃の境也。難行小利小善を修せば。往生すべからず。易行大利多善を以て往生すべし。若小利小善を以て却てふるとも生べからず。此故に釋迦は不可。以少善根福徳因縁。得生彼國とのべ。善導は隨緣雜善恐難生と釋し給へり。諸の凡夫難行に退心とこりて。輪廻出難し。少善利益よはくして。早

生難からん事をかゝみて難行を易行にかまへ。小善を大善とまろかし。往生の正定業とせらび。六八願已に立て善惡の凡夫にあたへ給へり。若此思なかりせば。濁世の凡夫行じ難き小善にかゝはて往生の素懷とげざらまし。二本誓願不取正覺也。眞實が中の眞實也。是設やすき行を修し。大善を備共猶凡夫の自力の行業ばかりにては生べからず。此教に若不。生者不取正覺と誓言を立て一念十念に善惡の衆生生べくば正覺を取べし。一聲十聲に生ずば。正覺を取じと誓て生るべき故に正覺を成給ふ。誓願力に乗ぜずば凡夫争往生をとげまじ。此故に善導の釋云衆生稱念すれば。必往生する事を得。如來の本誓は一毫もあやまり給はずと云へり。此本誓の願をば。現世結縁の種々の恩。後世の眞實恩中の最極究竟の正恩の正恩とする也。是本誓也。是佛願也。是密意也。是眞實也。眞實に穢土をすつる最後に淨土に生ずる最初。此本誓の不

思議也。又淨土に生て後。二の恩あり。一は方便の恩。二は眞實の恩也。一方便の恩と云は聖果等也。云極樂に往生しぬれば彌陀誓願成就するが故に彼國の報徳にて。三明六通等の諸の妙徳を備へ位必補處に至也。此恩に非ば。何如此種々微妙の徳を備へ。たやすく補處の位に叶はんや。二は眞實の恩と云は云無上菩提の佛果也。阿彌陀佛の妙觀察智の光をかゝりやかし。聖衆三品味聞を照し。大乘演說世を動して等覺一轉の夢を覺し。四智の鏡に五欲の塵なく。三身の月に妄執の雲なし。萬徳本如にして法界一相也。二我山は心地にたはぶれ。二死の業は生涯やみぬ。妙觀察智の恩に顯すは。何を迷の里を出て。覺の都へ參まし。は無生寶國の道也。彌陀五劫の思惟も。釋迦懇勸の勸進も。諸佛證誠の本意も。善導誕生の引導も。凡夫往生の意趣も。此佛果の爲也。是等の子細を思解に初結縁の昔より。中比の往生をはり。當來の正覺なるまで。

無量に構て。五劫まで思惟し永劫まで思食たる  
廣大の御慈悲をさぐりて。渴仰髓腦にとをり。  
悲喜双眼をあらひ。信心金剛に定るを法藏は信  
樂と發し。釋迦は深心と顯はし。善導は信心と  
釋し給へり。欲生我國者何ぞや。答云欲生我國云  
は。迴向也。迴向に三の心あり。一は所修の善  
根を極樂に迴向する也。二決定往生の信心成就  
して異解別解に云さまたげられず。聲聞緣覺聖  
者地前地上菩薩なども變化せる天魔外道にた  
ぶちかされず。決定往生の信心一たび。發して  
より後。往生の暮まで退轉なきを迴向と云。三  
には已極樂に往生しなば。彌陀の加力を受て。  
とく穢土に。かへりて有縁の衆生をはじめ無縁  
の有生に至まで。洩さず救はんと思ふを。迴向  
と名づく。法藏は欲生我國とのべ。釋迦は迴向  
發願心と説けり  
問乃至十念者何ぞや。答乃至十念と者往生の正  
業也。さきに明つる後世の眞實の恩の一心專念

南無阿彌陀佛也。問念佛は一念多念のあらそひ  
あり。何れが正文なるや。答云必一念と信する  
も一也。多念と信するも一也。只念佛往生也と  
心得られたり。一念も往生すと見たり。願成の  
文に乃至一念即得往生と明せり。多念も往生す  
と見たり。小阿彌陀經には云若一日若二日乃至  
七日往生すと見たり。故善導釋云上一形を盡し  
下一日七日一聲十聲に至まで。定て往生すと  
釋し給へり。衆生の命定なければ出息入息をま  
たず。出る氣に南無阿彌陀佛と一念して入氣に  
蓮臺の上に坐して忽無生を證せしむる構也。命  
延るに隨て多念をつゝむに似たり。一念に善根  
の不足なし。一念即無上大利の名號なるが故に  
多念に功德のます事なし。只無上の功德數のつ  
もる也。發心の時より後命の長短に依りて。數  
返の多少はある也。佛の本願に一念多念の數返  
なし。只念佛往生也。一念を信する人は多念の  
往生をささへ。多念を信する人は一念の往生を

あさふ。二人共にひがこと也。遠くは釋迦と彌  
陀との教と願とにたがひ。近くは善導の御心に  
そむけり。こまかに勘るに偏執せばとがを招か  
ん。問若不生者と云は何ぞや。答云若不生者不  
取正覺と云先に明しつる後世眞實の思の中に最  
第一の本誓願密意不思議也。重て明すに不及。  
問唯除五逆誹謗正法と云何ぞや。答云誹謗正法  
と云は五逆とは大乘をそしる罪は諸の罪の中に  
重き咎也。故未造者の爲いましめ。已に犯せる者  
をば大悲を以て救と釋せり。故善導釋云十惡五  
逆等食噉四重偷僧誹謗正法乃至地獄猛火罪人前忽  
遇。往生善知識。急勸專稱。彼佛名。化佛菩薩等。  
聲到一念願。心入寶蓮。と釋し給へり。抑止門に  
依れば除と誠。攝取門によれば生と云へり。先の  
科重して本願を信すれば願力に乗じて生る。罪  
を作れども生とは心得べからず。又五逆誹謗法の  
過なき人も。本願に乗ぜざれば生れず。善人も惡  
人も願力に乗じぬれば往生す。平等の願なるが

故。除と誠なかりせば五逆誹謗法に心あれて。本願  
歸依の心を發さざらまし。救ふ慈なかりせば五  
逆誹謗法さて止なまし。問本誓不思議と云は何ぞ  
や。答云不思議と云は三賢も十聖もつかふ所に  
非ず。唯是佛の密意也。まして凡夫の知べき事に  
非ず。此故に永觀十因云五不思議の中に彌陀の  
名號不思議也。凡夫胸臆の心を以て不思議本誓  
不可疑と云へり。善導眼前に顯れたる世間の  
不思議を以本誓不思議を信ぜしむ。空は能一切  
萬の物を含をさむ。地は能一切の物を載養ふ。明  
は能一切の暗をけし。水は能うるほいをなす。火  
は能物を失ふ。磁石は鐵を吸。琥珀は塵を取。如  
此事世にみてり。此故をば誰か知る。人知ねばと  
て此の不思議の用力なからんや。彌陀の願力の  
不思議も如此。一切の凡夫賢聖もしらね共不思  
議の用力を施さざるべけんや。此本願に多の不  
思議あれ共。一二を出さん。一には轉惡不思議。  
一切輕重の惡業を一念に皆滅。此故善導釋云利

劍即是彌陀號一聲稱念罪皆除と云へり。二には往生不思議。一切善惡の凡夫一念に慈愛を出凡を轉じて聖となす。只迷へる衆生知るまじに。疑をなして。生死に沈まんよりは。悟れる佛の勸に依て。往生を遂べし。又藥は能病をけして凡夫を救ふ。病は藥をけさず。若けされば藥と名く可からず。若藥消なば人を救ふべからず。惡業は本誓を犯さず。若をかされば不思議と名付べからず。本誓を犯されば。凡夫往生せしむべからず。隨彌陀の正覺凡夫に歸べし。釋迦の實語も妄語につべし。六方舌相も口に入べからず。善導の誕生も名のみにして益なけん。豈此理を成ぜざらんや。嘆べし。恐べし。云何彼本誓に疑をなして永解脱の種をたちて三寶に別をなさんや。乞願はくは往生の知識等疑を道理に立。往生を不思議に任せ。正覺を彌陀の説法に期すべし。問十九の願に諸功德を廻向せば其人の前に現せんと誓給へり。是は諸行も彌陀の本願なれ

四四〇  
ば決定往生の業也と心得べしや。答云然者諸の功德を修するは方便門也。實義の要法には非。是を辨ずして。諸の善根を勤て往生の正業とあてがふ人もあり。是は彌陀の本願にくらぶ故也。此修諸功德の行者をこしらへ。すかして。本願念佛の正定の業に少しめんが爲の方便也。正業に非ず。然ば此願成就の文を見るに三輩共に一向專念無量壽佛の行者とこしらへなされて。念佛往生を遂と見たり。明に知ぬ。正業に非と云事を。又觀經の定散二善も要門と成て。要法念佛にて往生をば遂ると見へたり。正業に非。されば善導は若念佛にたくらぶれば。全比按に非ずと釋し給へり。小阿彌陀經には釋迦は小善根と嫌て。執持名號と多らび給へり。然ば三經共に嫌て正業とせずと云へり。速に難行小善の方便を開て易行の大善をつとめて。決定往生を遂べし。方便を信じて。正業の障をなすべからず。問諸の功德を法藏は十九の願に立て。方便門

と云。釋迦は定散二善を説て。淨土の要門とせり。何正業の障と成るとは云へるや。答云諸行を無益也と云には非ず。方便と眞實とを。わきまふる也。方便にかははりて。眞實入ざるを障とば云也。方便より眞實入爲には。尤最要也。方便なくして。眞實に入事なし。眞實に入を方便の要門とする也。修諸功德與三輩諸業。觀經定散本願念佛要法眞實にこしらへ入る。方便信入の益也。故に要門と名く。本願の十念と願成就の一念と三輩の一向專念と下品の十念と小阿彌陀經の執持名號とは要法の眞實也。要法に入る。が故に要門と名付。要法に入して要門にとこほらば。障となる。要法にうつり入れば。要法の助となる。然ば要法に不方便とすべし。要門にとこまりて障とすべからず。昔現世の結縁よりそこばくの方便にこしらへ。うつされて。最後の要門に至て何要法の障となさん。早要門を開て。要法の念佛に歸。五劫思惟の本意に叶

四四一  
て。淨土に往て正覺なるべし。問一向專念の行者の中に諸の大乗等を往生の正業には非ず。雜行と名て蔑に必下云人少々ありと聞。此人とが有りや。答云尤仰べき也。下すべからず。頼處の本願下に唯除五逆誹謗正法と説り。尤慎て敬べし。但諸大乗は妙也と云ども下智は叶難ければ。自身を卑下する計也。上智の人に依れば大乘の巨益なきに非ず。大乘の難く妙なる事を頼み。自身の下智なるを不願機と教と相違あり。我身の機をはからふ可し。大乘は中下の人は通ぜざる故に。抑諸大乘に云處の妙理は往生以後の期する所の正覺也。尤仰て西方界の期を待べし。加之頼所の名號は一切佛法の惣持惣號也。若謗せば頼む所の名號を謗するに成ぬ。全謗すべからず。但往生の正業非すと云計也。西方正覺の時。助成の法鉢也。然ば近くは如如修行の位には。正業の名號にをさまれりと信じ。遠くは西方に行て覺を開かん時は。正覺

### 十三 一向專修之七箇條

#### 問答

沙門 源 空

の法躰と仰べし。努々輕しむる事なかれ。下す事なかれ。其故は法藏の五劫思惟も釋迦の慇懃勸進も正覺の爲也。諸佛證誠の本意も善導垂跡の素懷も此本願の爲也。十二部經の所説八萬法藏の所談も如法をはなれず。三賢十聖の衆僧も凡夫往生の期する所も此大乘の爲也。問淨土往生の友に幾の差別か有や。答云四種の差別あるべし。一は定善の友。十三定善是也。二散善友。三福業是也。此二人は方便の友也。三は專友。上一形より下臨終の十聲に至まで退する事なく。口に稱する念佛也。四には全友。人能念佛佛遠念專念行者一也

此書印本上下二卷に作り。十二問答を上とし。十八願釋を下とす。今便により卷別を立てず。

- 一向專修之七箇條問答
- 第一に諸神を信ぜざる事
  - 第二にもろくのいみけがれをいませざる事
  - 第三にをやの孝養に慕堂率都婆たてざる事
  - 第四に日月の吉凶をいませざる事
  - 第五に萬行を具足せずして成佛する事
  - 第六に无戒破戒にして往生する事
  - 第七に他力往生といふ事
- 第一に神を信ぜざることはなほだもて无道なり。それわが朝は神國として靈驗いまにあらたなり。天照大神の御子孫としてくにのまつりごとをもて世をおさめたまふ。神の威光あらたにしてひとのこゝろもたけきがゆへに他國大國よ

りもうちとられず。かみの守護したまふゆへに佛法も繁昌するわが朝なり。いかてか一向專修の行者としてかみをもちゐざらんや。この不審をあきらめずば專修の行を破すべし。いかん。聖人こたへてのたまはく。專修の行者はこと。にかみをうやまいたてまつること。そのこゝろさしふかし。ただかみにをいて二種のかみあり。一には權社のかみ。二には實社のかみなり。實社のかみとまふすは。あるひはひとの生靈死靈のたましむ。あるひは畜類のたましむ。かやうのものをほくひとをまかし惱すことあるをかみとあがめてやしろをつくり。あるひは今宮わかみやなんどあがむるかみのたくひなり。この實社をあがめ信ずれば今生には諸病を身にうけて。やまひのゆかに年月をおくり。蛇道にをつると七百生なり。かるがゆへに實社の蛇神をば信ぜざるなり。權社の靈神とまふすは往古の如來深位の菩薩。衆生利益のためにかりに神明のかたちを現

じたまふ。和光同塵は結縁のはじめ八相成道は利物のちはりとなれば。今生には七難をまもり九曜の難をのぞきたまふ。來世には來迎引接し佛菩薩となりて往生極樂の本誓を成就す。かるがゆへに權社の靈神をばふかくうやまふべし。實社の蛇神をばそむきて信ぜざるなり。そのとき法皇聖人を禮したまふ。第一の不審をひらきたまひけり。八宗の祖師先徳のひとく、不審をひらひて聖人をうやまひたてまつるなり

第二にもろくのいみけがれをいませざる事。聖人に智海法印とひたてまつりていはく。垂跡のかみをもちゐるときは物忌量とまふして。いみけがれをいむをもてかみをうやまふ禮儀なり。なんぞ本地の佛を信ずればとて垂迹の神明をそむきていみけがれをいませざるや

聖人こたへてのたまはく。それ釋迦一代の聖教には。生死のけがれをいめと、きたることは八萬四千の經論のなかに文ひとつもなきなり。か

みは本地をさがむるをよるこびたまふなり。い  
みけがれをいむとばかりしりて。本地をしらさ  
るをかみはかへりて尉したまふ。いかなる二親  
の重服なりともわがまへにまひりて來世のこと  
をまよさば。社壇よりちりてなんぢを禮すべし  
とかみはちかひたまふなり。たゞし今生のこと  
をいのらばいかりをなしてかみは尉したまふべ  
きなり。さて念佛をまふし後世をいのらばいか  
なる重服のところへも日日夜夜に。かげのかた  
ちにしたがふがごとく影向したまふなり。かる  
がゆへにけがれをいませざるをもて。かみの本懐  
としたまふなり。たゞし後世をねがはず念佛を  
まよさざるが。かみの本懐にそむくものなり。こ  
のむねをしるるとしていみけがれをいませざる  
なり

第三に親の孝養にはか堂五輪率都婆をたてざる  
こと。重源阿闍梨問ていはく。釋迦佛の父淨飯  
大王母摩耶夫人の孝養を報恩のために正覺なり

たきよ。その例わが朝になきにあらず。祖師先  
徳も廟所をつくりをきたまふ。高野は弘法大師  
の御はかどころ。比叡山は傳教大師のはかどこ  
ろなり。かやらの遺跡をのちの世までたてをき  
たまふ。一向專修のひとくごのなかには。をやの  
はかするしせずとまふすこと不孝なれ。そのつ  
みのがれがたし。地獄のたきぎとなるといふ。  
いかん

聖人こたへてのたまはく。そもくこの南州の  
國土は六道のうちには人道なり。六道といふは  
一には地獄道二には餓鬼道三には畜生道四には  
修羅道五には人道六には天道なり。この六道の  
うちをまはるを流轉生死の罪人とまふすなり。  
この欲界色界无色界の流浪をはなれてんがた  
めの佛法なり。いまの專修の行者にをひては觀  
音金蓮臺に乗じ二十五の菩薩を前後左右にめし  
具て。たゞちに阿彌陀如來の御むかひによりて  
極樂淨土に往生してのちは。娑婆世界の六道輪

廻の苦をはなれぬるうへは。いとひすつる六道  
におもむくべきことなれば。はか堂率都婆も  
よふにあらざるあいだ。墓堂五輪率都婆もち  
ゐざるなり。またをやの聖靈地獄の苦をいで、  
極樂淨土の上品上生に往生することうたがひな  
しといへり。このゆへにかならず墓堂率都婆を  
もちゐざるなり。この道理をまふすときはこと  
さらこの專修の行者はさまざまの孝養のこころ  
ふかきなりといへり。他力の念佛によりてなが  
く生死をはなることをしらず信ぜずして。い  
まの世に木石をもて生死をはなれんとおもふ愚  
癡のこころをいむべきなり。六道にして今生一  
旦の財寶をしむにあらず。學者よくくしる  
べし。愚癡のひとくごはこころをがたき一句な  
り。智者はしるべし

第四に月日の吉凶をいませること。證眞法印問  
ていはく。天竺には耆婆偏鵲とて耆婆は藥師。偏  
鵲は陰陽師なり。唐土にも孔子老子顏回閔子騫

四人のものども。文書外典をつくりて月日の吉  
凶をえらびたまふことその例をほし。いかん專  
修のひとくごこれをもちゐざるや

聖人こたへてのたまはく。迷故三界城。悟故十方  
空。本來无東西。何所有南北と大品經にときた  
り。この經文のごときはもとより東西南北の四  
方なしと。佛法の道理をときたれば方角是非を  
いはず。また三十日は三十佛ととかれて。三十日  
はみな佛の日なれば吉日悪日といふとさらにな  
きなり。阿彌陀如來は諸佛の師なり。大日如來。  
阿彌陀佛の變作。また藥師は阿彌陀の舊妻。地蔵  
は阿彌陀の御弟子。觀音勢至。彌陀の兩子なり。  
そのほか諸佛菩薩はみなく阿彌陀の御弟子な  
り。三十日ともに阿彌陀の御日なることその證  
明鏡なり。このゆへに月日の善惡方角是非を  
まよさざるなり。なんぢら今生の人物を相して  
月日の吉凶四方をたて。はうの是非をもちゐ  
て。佛語名號釋尊付屬の遺教。他力念佛をかるし

ひるや。いかてかなんぢらまてとひをすてし。専修の門に歸すべしとのたまふ。そのときに法印をはじめとして主上聖人を渴仰したてまつり。専修の門にいるなり。

第五に萬行を具足せずして成佛すといふこと。成現阿闍梨問ていはく。そのみち成佛の法は萬行を具足して佛になるべし。なんぞたゞ佛名をとふるばかりにて往生すといふこと諸法のなかにその例なし。いかん。

聖人こたへてのたまはく。御難は八宗のひとひとしりがたし。淨土宗のなかにも左右なくするひとまれなり。當家の一向専修の一大事の法文なり。そのゆへはまことに佛になるは萬行を具足せずは成佛なきなり。佛の名ばかりとなへて往生することなきといふ御難はもともそのいはれあり。たゞし他力の念佛をしらざるゆへなり。八宗のひとひとのなかに佛の名號をととなへよといふは。他の佛の名號を稱するところろ

るなり。いま淨土宗には南无阿彌陀佛の六字の名號の功德。こゝろもことばもあよひたさ法門なり。その功德あらくまふすべし。いま阿彌陀佛の三字の功德をまふさば。阿の一字に八萬四千の持戒の功德をおさめて。彌の一字に八萬四千の禪定の功德をおさむ。定といふは坐禪なり。陀の一字に八萬四千の經論聖教のなかの功德をおさめたり。阿彌陀佛五劫のあひだの萬行を三字のうちにおさめたり。末代の一文不知のわれら凡夫にあたへたまふ。そのときわれら凡夫一念三僧祇の戒定惠の三字を。われらがかうべより手あしのつまさきにいたるまでぬきさせたまふを他力の行となづけたり。されば文にのたまはく。行して行する行をこそ行せねば行せぬ身とはなれ。行せずして行する行あれば。行せぬに行ずる身となるといへり。この文をよくよくみるべし

第六に无戒破戒愚癡の男女報土往生するといふ

ことを。顯眞座主問ていはく。諸惡莫作諸善奉行自淨其意是諸佛教とのべて。諸佛に通ずる戒なり。しかるに五戒十戒をよび二百五十戒五百戒三千威儀戒。かくのごとき戒行をむねとして佛となるべし。一戒もたまたませずして極樂淨土に往生するといふともてあつかふなることなり。いかん。

聖人こたへてのたまはく。難は念佛のなかに南无阿彌陀佛の六字に八萬四千の戒行あることをしらす。一切の諸戒を接して持戒となる。これをやぶらざる戒となづけたり。末代の八宗戒をたもつといへども戒をやぶる。専修の行者のたもつ戒はやぶらざる戒なり。文にのたまはく。たもちてたもつ戒をこそたもたねば。たもたぬ身とはなれ。たもちてたもつ戒あれば。たもちぬにたもつ身となると云々

第七に他力往生といふこと永辨僧正問ていはく。一切の諸佛の萬法をときたまふに心佛身の

淨土をさとりあらはせよとこそたまへ。いづれの法にか心のほかに佛をたづね身のほかに淨土をもとむるや。いま淨土宗専修の行者佛を西にをき淨土を西にかまへ。かの西方の彌陀の名を稱して西方淨土にゆかんとねがふこと。諸法のなかにその例なし。八宗九宗の所談にもその儀なし。誑言妄語といひつべし。慈じて釋迦一代のをしへ八宗九宗の談するところ。心のほかに佛をもとめ身のほかに淨土をねがふは大外道なり。またく佛法修行のひとにあらざといへり。かくのごとくならば専修の行者をば外道なりといひつべし。ことに惡人とみえたりとまふすべし。いかんがせん

聖人こたへてのたまはく。御難は一大事の御不審なり左右なくこたへまふすべきにあらず。諸佛世におひて種々无盡に法をとくことはみな衆生自力の法なり。されば過去久遠のむかしより出世の佛は自力をときをしへ。をしへのごとく

さらざれば。成佛すべからず。をしへのごとく行せば成佛すべしとくがをしへなり。自力のさとりなかりせば。いま生死をはなれがたし。かくのごときるところに法藏菩薩正覺をなりき。諸佛にかはりて他力の四十八願をおこし。われ无始よりこのかた自力にて成佛せず。われら他力の本願によりて佛になるべき行を他力の大願となづけたり。いまなほ他力を信ぜずして諸佛自力の法を信ぜば生死をはなる、時尅いまだきたらず。わが朝の八宗のやま〜てらく〜おほくはこれ諸佛自力の行法なり。佛になるべき時尅當來せば。いづくんぞのちにこゝろうべきと云々。このときに山門南都僧律真言法相三論俱舍成實かくのごときの入宗のひとく。聖人の法門を聽聞して七箇條の不審をひらきて。みな道心をおこしたまふ。法皇も聖人より念佛をうけたまふ。そののち公家武家山門南都一向専修の他力の念佛を信ぜずといふことなきなり。

## 十四 念佛得失義

沙門源空

### 念佛得失義

それ念佛往生について。四の不定。四の決定の義あり。四の不定といふは。一つには自力念佛往生不定なり。二つには假名念佛往生不定なり。三つには悪見念佛往生不定なり。四つには慢心念佛往生不定なり。第一には自力念佛といふは。自身をとくのへ。心をすまさんとのみおも

ひて。身に戒行のそなはらぬにつけても。佛の願力をたのむことはなくして。我身をのみなきかなしむあひだ。心にうたがひのたゆるひまなきゆへに。この人は。日ごろはたふとげにみえつれども。おほりに正念に住することかたし。佛の願力をたのまざるゆへに攝取にもあづからず。護念をもかふむらぬゆへに。往生不定なり。第二に假名念佛といふは。名をば念佛に號して。おもひを利養にかけたり。しかるあひだ。人目にはたふときふるまひをしかほにて。内心にはつたなきことをのみたくみて。この世のへつらひのぞみふかくして。さらに後世のかなしみをほぢず。くいず。一念も厭離穢土欣求淨土の志なきゆへに。おほりには。ほぢをあらはすゆへに往生不定なり。第三に悪見念佛といふは。悪人正機の本願とささて。悪はくるしからずと。こゝろへたるひとのこゝろに。をもふやう。かの四重五逆の罪人。なをもて往生にとどこ

をりなし。我身のつみおもしといへども。殺盜淫等の十悪にはすぎず。つみをおとるゝは。佛の本願を信ずるこゝろのあさきなり。佛の本願は。十念乃至一念とたてられたれば。十悪五逆のつみも。たいおほりに一念十念に往生をとくべし。しかるに念佛の數返をかさねんとはげむは。一念往生の本願をうたがふ心なり。本願をふかく信ずる心ならば。なんぞ悪をおそれんとたてたる人は。つみをつくらざれども。心にはつくるとがあるがゆへに。往生不定なり。第四に慢心念佛といふは。慢心に四あり。一には上慢とて。よろづの人をくだして。我にすぐれたるもの。世にあらじとおもふ心なり。二には等慢とて。やんごとなくたふとき人のことを。智といひ行といひ。はしをたてゝも。ちよぶまじき人のやうをみまゝしては。我身もおなじことなり。何事かすぐれんともふ心なり。三には卑下慢とて。あまりに我身をくだして。高慢の人



をみきしては。それははかなしとおもひ。我身はかしこしとおもふ心なり。四には无礙慢とて。よろづの人は。やう／＼の慢心あらん。我身にはいかなる慢心もなしとおもふも。また慢心なり。かゝる心どもは。みな念佛の利益をうしなふ心なれば。往生不定なり。しかればすなはち世間にいみじき念佛者と。人にしられたるも。おほりに思やうにもなくして。本意なくきこゆるは。もしこの四種のとがのなかに。その一にもやとぞおもふべき。よろづのとがは。このよつのうちをばいてず。佛もこのよつのとがをば。ちからあよばせたまはぬことなり。これをもて。おほりまでとおらば。往生すべからず。若おほりに自力は他力にひるがへし。假令は眞へ實にひるがし。悪見は正見にひるがへし。慢心は直心にひるがへらば往生すべし。このゆへに廻心をせざらんともがらはみなもて往生不定といふなり。第一に自力の心他力にひるがへ

らば往生決定といふは。身に戒もたまず。心に妄念もとまらぬにつけても。もとよりわが力にて往生すべきにはあらず。佛の願力にすがりてこそ。このたび往生はとぐべき道理なれば。佛の本願は衆生のちからにならんとちかひたまへり。その御ちからをばたのますして。自力をばげむ心。本願によりつかざるゆへに。佛の本願に。わか心たがひて。行業はよはく。悪性はこはし。かゆへに往生せず。このことはり得心得て。佛の本願は。もとより煩惱具足の我等がためなれば。身のと／＼のはざるにつけても。たすけさせたまへとおもへば。かならず如来の攝取したまふ御心もふかく。護念の御心もあつくして。機感相應するゆへに。往生決定なり。よく／＼この心をしるべし。第二に假名は眞實にひるがへらば往生決定といふは。まめやかにこのたび生死をはなれ。淨土に生ぜんと思へるのこらば。一返なりともまふす念佛むなし

くなさじ。この世はゆめのうちなれば。とてもかくても。後世のくるしみこそ。のがれがたきことなれば。たまたまうけがたき人身をうけ。さひはい。あひがたき佛法にあひて。このたび往生をとげずば。三途の舊里にかへりて。佛法の名字をもさかばこそ。苦患をまぬがるゝ縁もあらめ。うらめしきかな。我心をもてわが身を害せんこと。たれをかうらみ。たれにかうたえん。かまへて。このたび往生の大事をとげんとおもふべきなり。この心を地縛として縁にしたがひ。ことにふれて。假名のこゝろもあこり。名聞のこゝろもあこり。利養の心もあこらんをば。凡夫のくせなれば。かくのごとくの妄念あるぞとおもひて。その心に。こゝろをうちゆるさずして。佛の願力のかたへおしなすべし。なちすといふは。煩惱妄念をこらば。やがてかゝるいたづらものを。御たすけの佛智不思議のたふとさよ。南无阿彌陀佛と。おもひいれてま

ふすこゝろを。おしなすとはいふなり。おしなすといへばとて。またく煩惱のこゝろを制し。妄念のこゝろをとめんとにはあらず。たゞおこるにつけても。かゝる我等をたすけたまふ。大悲の誓願のたふとさよとおもひて。名號をとなふるを。なをすといふなり。第三に悪見は正見にひるがへすといふは。念佛だにまふせば。つみをつくるともくろしからずと。おもふ心をさかさまにして。つみをつくる身なれども。念佛だにまふせば。佛の慈悲大慈にてすてたまはぬぞと信ずべきなり。いづれの佛か。つみをいみじとおぼしめす。彌陀もさこそおぼしめすらめ。されども大悲たふにして。他力の願をおこしたまへり。おほかたは。つみはちりばかりも。生死をいづるさはりといましめつゝ信ずべし。さりながら。つゝしめども。そのかひもななく。いましめどもしるしなく。妄念やまず。悪業もやまざるにつけても。わが身のつたなき分

際をかへりみて。一向一心に彌陀の願力をたのみて。往生をとぐべし。第四に慢心を直心にひるがへして。往生決定といふは。いやしき人もみては。やうぞあるらんとおもひて。あなづりくだすこゝろなければ。上慢のとがをばはなるゝなり。さりながら。それにしたかふべからんものゝ。信も行も。無下にはかなければ。すゝめ教訓すべし。また我より智も行も。される人をば。おもくうやまい。たふとめば。等慢の心はうするなり。佛の平等の願力のゆへに。ひとのたふときもあなづく。我いやしきもあなづく。往生せんことのうれしさよとおもへば。卑下慢のこゝろはうするなり。またかやうに。よくく心えて。わが身には慢心なしともひ。ひとはかやうにも。あざるらんとおもふも。慢心なるべし。たゞすべて我身には。かしこきことは一念もなし。佛の願力によらずば。いかてかかゝるあさましき多きものは。たやす

く往生はすべきぞとおもひて。佛恩のあもさことを信じて。名號をとなふべし。また名號をとなふるよりほかに。よの事をおもはじともおもふも。慢心のこゝろなるべし。悪事をおもふも妄念なり。たゞすべからくは。佛智の不思議をあふぎて。往生をとぐべし。たゞ名號をとなふる心を。本願たのむとはいふなり。凡念佛の行者。よろづの事をおもはんとき。心のそこに。觀念にとこまることなかれ。やがてこえにあらはして。名號をとなふべし。稱名のほかに。決定往生の正業なし。稱名のほかに。決定往生の正念なし。稱名のほかに。決定往生の智慧なし。稱名のほかに。決定往生の信心なし。三心すなはち稱名のほかに。五念すなはち稱名のほかに。四修すなはち稱名のほかに。攝取の利益も。稱名よりあらはる。往生の益も。稱名よりあらはる。無生の益も。稱名よりあらはる。

る。厭離穢土の心も。稱名の中にあり。欣求淨土の心も。稱名のなかにあり。これすなはち。法藏菩薩のむかし。他力本願のゆへ。彌陀如來のいま自在神力のゆへなり。みなこれ南无阿彌陀佛。

## 十五 念佛緣起

### 念佛緣起

黒谷 源空

敬白。娑婆世界一代教主釋迦善逝。極樂淨土本願覺王彌陀如來。光中顯現無數諸佛。隨逐圍繞無邊薩埵。觀音勢至二大菩薩。念佛證誠六方恆沙護念諸佛。總じては西方極樂九品廣大無邊淨土塵數恒沙清淨大海衆。別しては念佛の祖師菩提流支曇鸞道綽善導懷感等の。往生勸進の大師聖靈。すべては佛眼所到同體慈悲の一切の三寶の願海ことに。驚かし發心したてまつる。某甲 堅固の

信心をはげまして一向無二の願海におもむく。そのおほいなる意趣いかになれば无始生死のあいだ六道四生をいふと。有爲輪廻のほど三塗八難をすみかんとす。无明のさけ本心をうしなひて極寒極熱をおもそれず。忘想のねぶりに心王をまよはし悪世惡道をもいとふことなし。かなしきかなや過去の諸佛番々の利益にもすてにも。現在十方の如來代々の方便にもまたすてられて。沈々として泥梨のふちにいたり悠々として无間のそこにしづみなば。なんぞふたゝび人身を受けてとやすく佛性をあらはさん。寒風はだえにとをるゆふべは。ふすまのうちにうつぶしてつらく先生の宿業を案じ。霖雨まどをたぐあかつきは。床のうへにあをのいてや。當來の果報を推するに。たれの人をたのみてか苦惱の獄をいて。いかなるたからをはこびてか閻王のせめをのがれんや。まことにこのことをおもふに五體くるしんで身心やすからず。こゝに有緣

の人きたりてあひすしめていはく。なんぢ知ずやいなや。出離の要道はいはゆる釋迦の遺教これなり。まほきにわかちてふたつとす聖道淨土の二門なり。しかるに聖道門の教法は理ふかく行こはくして根劣のともがら感應ながくたえたり。淨土門の教行は口稱三昧を宗とす修しやすく行じやすし。極惡最下のともがらも信をいたせばしるしあり。これすなはち本願大悲のちからなり。しるべし釋尊は正法のむかし三車をかまへて火宅の衆生をいだしたまふ。彌陀は末法のいまひとつの願をおこして迷倒のわれらをもかへたまふ。かるがゆへに穢土の教主釋迦はしむてゆげとすしめ。淨土の彌陀はねんごろにきたれとよばひたまふ。こゝよりはうなじをたゞいてつかはし。かしてよりは手をひいてむかへたまふ。なんぞ東西二佛の本意を知らずしていたづらに一生をつくしむ。なしく六道にまよはんや。それはやく淨土に生まれんとおもひて往生

をねがはんものは。すべからく諸餘の雜行をさしおきて一向に稱名をいたすべし。例せばかの曇鸞法師は四論の講説をすて一向に淨土に歸し。道綽禪師は涅槃の廣業をさしをきてひとへに西方の行をひろむ。上古の賢哲なをかくのごとし。末代の愚迷むしろこれにしたがはざらんや。いはゆる男女貴賤を論ぜず行住坐臥をさらはず有智無智をたづねず持戒破戒をわかたずたつところの本願は念佛三昧これ也。しかればすなはちひとたび專修の行にいりてふたゝび一向を退するとなかれ。まさしく臨終を期としてひとへに本願をたうとくせよ。もし異學異見邪雜の人きたりて偏執をくはへ疑難をいたさば。すべからくこたふべし。われはこれ淺智愚闇にして經論をしらず。たゞ彌陀の悲願をあふいてふかく來迎を期するばかりなりと。もし本願の由緒をしらんとおもはば。ねがはくは智人にちかづきてひろく聖教をよむべし。いづれの聖教にか彌

陀を非し極樂をそしれる。いづれの淨土にか五逆のもの生まれ十惡のひと住する。かくのごとくゆきやすき淨土へゆかざらんもの。いはんやさらはるゝ佛土にまいるべきや。安養を下品とあとしめて密嚴の淨土をこゝろさすものは。ふねなくして巨海をおよぎ。はねなくして大虛にかけらんとはげむなり。眞言の事理俱密。天台の即身成佛。さくにすしといへども行法たてがたく觀念こらしがたし。菩薩の六波羅蜜。聲聞の四諦。みなたうとしこのめども。大悲おこしがたく小果證しがたし。そのゆへは妄念日にしたかひておこり顛倒とさをあふてきをふ。六字の名號これを稱するになをものうし。樂行はところををてこれまたおろそかなり。いはんや清淨持戒の行をや。いかにいはんや難行苦行の教をや。深理の聖教おほけれどもこれを修するにちからなく。超過の妙行まち／＼なれどもこれをこのむにたよりなし。しかるに念佛を非して

餘行をいたすひとは。とばは清淨にしてこゝろは穢惡なり。稱名をそしり雜行をたつるものは。かたちはたうとくしてたましいは散亂す。是すはなち末法のさだまれる法。五濁のつたなきならなひり。しかればすなはち假名に上上の妙行をたて、内心に下下の妄念をおこさんよりは。末法に相應せる念佛三昧にはしかじ。此身は極惡最下の罪人なり五逆十惡のくもあつし。わが心は貪欲名利熾盛なり三毒四重のやみふかし。佗力のふねに乗ぜずば生死の愛河わたりがたく。超世の願をたのますば涅槃のきしにのぼりがたし。たとひ有智高才の身なりとも法燈をかゝげんことこれかたし。いはんや无間非法のやから勝行をたてんことはなはだかたし。たれのひとか念佛を劣行とせん。經には大善とつけり。いづれのところにか稱名を無下とする。佛ははちすをあげてこれをたとふ。もし小善ならば釋迦の實語諸佛の證誠はなはだもておもから

ず。なにの奇特かあらん。まのあたり星のごとく  
なる經説の現文をみ。うたゝかゞみににたる祖  
師の解釋にむかひながら疑難をくはへんこと。  
これすなはち生盲闍提にあらずや。かなしむべ  
しかなしむべし。娑婆世界は無始生死のすみか  
なり。しめていとふべきをや。極樂淨土はむかし  
いまだみざるところなり。とさらにはじめてね  
がはんやといふは。これみな凡夫のつたなきお  
もひなり。さとれるひとのおもひにはあらず。こ  
ゝをもて釋迦如來は不覺の衆生をすくはんがた  
めに。かたぢけなくも凝然不變のみやこをいて  
五濁難忍のさかひにいりて。機にしたがひて法  
をとさ。こゝろをかゞみて行をさしへたまふ。塵  
數の聖教恒沙の法門。しかしながら娑婆をいと  
ひて淨土へゆけとすゝむるなり。こゝをもて法  
華經には三界無安 猶如火宅 衆苦充滿 甚可  
怖畏ととけり。この文をみるに。もともいとふ  
べきところなり。たれかととまるべき。たとひま

たほとけときたまはずとも眼前の境界をもをみ  
たるなり。ゆへいかにとなれば。ちやをささだて  
子におくるゝかなしみ。去年もさゝ茲年もみる。  
夫にわかれ婦をうしなふなげき。みざる日はこ  
れありといへども。さかざる月はこれなし。月氏  
の大王漢土の明帝は名を後代にとめてたまし  
むは三途にしたがふ。一天の賢人四海の劣夫た  
れか長命のひとあらんや。いかてか死せざるも  
のあらん。これすなはち娑婆世界のつねのなら  
ひとして分段同居のさだまれるとはりなり。こ  
れをさくにおどろかずこれをみるにおそれず。  
いたりてつたなきこゝろなり。无常たちまちに  
せめきたりなばいかにしてかまぬがれん。また  
猛火のそこに墮しなば後悔いよゝさきにたつ  
べからず。梅花かせにとふ。有爲の道理これに准  
ず。紅葉しもにうつる。生死の衰老さとりぬべ  
西し。山のいたゞきにむしあり八珍といふ生死  
をかなしみてよもすがらなく。西海のそこに魚

あり鯢鱈といふ。无常をなげきてひめもすにい  
きつく。魚蟲なを厭離の心あり。いかにいはんや  
人倫としてむしろ欣求のおもひなからんや。淨  
土はこれ不老のところなり。无常轉變の名をつ  
ける水鳥樹林法をとさ衆寶莊嚴まなこにかゝや  
く。教主彌陀如來は妙觀察智の覺王なり。誓願  
諸佛にこへ慈悲法界にみちたり。こゝをもて經  
には我建超世願 必至無上道 斯願不滿足 誓  
不成正覺ととけり。これによりて諸佛の接出し  
たまふ衆生をも彌陀はかなしみてこれをすくひ  
たまふ。五逆の罪人も來迎にあづかる。これた  
れかあだをむすばん。往生の得否は信と不信と  
による。一念としてをろそかならずいはんや十  
念をや。一時なをいるかせならず。いかにいはん  
や一日においてをや。一佛をあをぐ九品の往生  
なにのうたがひかあらん。彌陀の來迎聖衆の讚  
嘆。まさしく最後の臨終を期としてゆめくゝい  
るかせにすべからず。あふぎねがはくば彌陀善

逝。ふしてこふらくは觀音勢至九品蓮臺淨大  
海衆。佛子すてに本願のふねにのりぬれば臨終  
のゆふべにもらしたまはじ。今日光明の益にあ  
づかりぬこの行ちかひて退せざらん。百重千重  
守護加念してとさとして廢退することなく。引  
接たなごゝろにあらん。  
光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨矣  
南無阿彌陀佛  
建久五寅年八月日 沙門源空

本云。右此書者黒谷上人御作。則以御眞筆之本一冊。  
寫之畢。

## 十六 法然上人御法語

われこのごろ念佛を行するものをみるに。往生  
をねがふひとはおほけれども。まめやかに本意  
をとぐるものはまれなり。しかればおなじく念

われこのごろ念佛を行するものをみるに。往生  
をねがふひとはおほけれども。まめやかに本意  
をとぐるものはまれなり。しかればおなじく念

佛をまふせども子細のあるにやと。人ごとにおもひまよひてわが身の振舞。こゝろのもちやういかなるべきとやらんとふかくなげし。また往生のこゝろさしのふかく生死をまそれたるいろなれども。これによりて異學異見の人に誑かされて信心のうかるゝことほきなり。あるひは妄念をとめてこゝろをすまして念佛せよとすゝむるひともあり。あるひは身をきよめ境界をはなれて念佛せよとすゝむるひともあり。あるひは淨土外になし心即ち佛なりと觀ぜよとすゝむるひともあり。あるひは淨土もなし地獄もなしまよひもなしさとりもなし厭べきところもなし願ふべきところもなしとおもふひともあり。これらはみな往生のためには怨なり。妄念をとめてこゝろをすまして念佛せよとすゝむるは自力の修行なるがゆへに本願他力のみちをうしなふとがあり。淨土ほかになし自心佛なりと觀ずるは深理の觀法なるがゆへに愚癡の凡夫か

なひがたきゆへに。これ又稱名念佛の行者の往生を塞咎あり。淨土なし地獄なしまよひもなしととりなしといふは外道の邪見なるがゆへに念佛往生のおほきなる魔縁なりと思ふべし。また人目ばかりに往生をねがふよしをして内心にこゝろさしのうすきを虚假名聞とて往生をとげぬこゝろなり。まことに往生をねがひ念佛をとなふることひまなきにたれども。往生を得がたきことの當世おほきは上よりいふところのあしざまなるかたにおもむきたるものなり。ゆめゆめこれによりて念佛往生のみちをみだすべからず。往生する念佛の行者といふはわが身を愚癡になしかへして。人の子の親のちからよりほかにたのむところなく。從者の主の恩よりほかに待事なきがごとく。ひとへに阿彌陀佛の願力をたのみ念佛の功力のみおめくとして南無阿彌陀佛となふれば。念佛のちからにて无始の罪障もさえ。念佛のちからにて生死の機關もさ

れ。念佛のちからにて諸佛にもまもられたてまつり。念佛のちからにて觀音勢至をもともとし。念佛のちからにて淨土にも生すべしと。ふかくおもふよりほかに他事なく。たのみをかけた願力におもひつくこゝろを往生決定の心とはまふすなり。いさゝかもわがちからとおもふこゝろあるべからず。もしたまゝすむ心あらんときは。これも本願のちからによりてすむとおもふべし。念佛のまめにとなへられんときも佛の攝取のちからなりとおもふべし。わが身の懈怠ならんときも。わがこゝろの妄念ひまなくをこりまきれんとき。これにつけても本願のちからなくは。いかでかかゝる凡夫このたび生死をはなるべきとおもひて南無阿彌陀佛くととなふべし。となふればそのつみは滅するなり。これを念々稱名懺悔といふなり。よきにつけても願力なり。あしきにつけても願力をはなれてかなひがたきとおもへば。自然に念佛はすゝ

まれて往生のみちにはちかくなるなり。三心といふは一心なり。一心といふはたゞ願力をたのみていさゝかもうたがはざるこゝろなり。うたがはざるこゝろになりおほせぬる上へには。たととなふるよりほかに別の子細なきところに子細をつくるとき。往生のみちにはまよふなり。出離のみちをしるひとはおほしといへども。それには目をかけずしてたゞ本願他力の往生の一道におもひつきて念佛するひとを決定往生の人とはまふすなり。この信心立ぬるひとは百千人がなかに一人もむまれぬはあるべからず。たと信じても信じ。たのみてもたのむべきは六字の名號ばかりなり。あなかしこく。

建仁元年二月

源空九歳

本云右此御法語者。以在光明寺一御眞筆書寫也。

### 十七 諸書に出たる法語

一。浄土宗安心起行の事。義なきを義とし。様なきを様とす。淺きは深きなり。只南無阿彌陀佛と申せば。十惡五逆も。三寶滅盡の時の衆生も。一期に一度善心なきものも。決定往生遂るなり。釋迦彌陀を證とす。

建曆二年正月二日

源空

これは知恩院に藏する護念經の奥書なり。

一。浄土宗の肝心。此度往生し候事は人によらず候。誰々も唯申せば。たすかるとばかり心得て。世に類ひなき惡人なれども。南無阿彌陀佛と唱へれば。一念にても往生を遂候なり。此外に心得候へば。往生しそこなひ候。

清淨華院に珍蔵すと

一。佛説に任せて六字をととなふれば。佛の本願に乗じて必往生を遂候。別に心得ば往生しそこなひ候。永觀堂に藏する。什寶なるよし。

一。一書にいはいく。鎮西上人云。或日こゝろしづかなりし時。故法然上人仰られてはいはいく。

阿彌陀佛の極樂浄土は是念佛往生の浄土なり。自然具足の三心といふとあり。穴賢あなかしこ。うづ高く。ことくしく三心を申なす事は。あそろしく無道心の人の申事也。無智の人少しき事を習ひて。地獄に落すことに候なり。これは忍藏上人の手書なりと

以上吉水法語集に出づ。

一。高祖聖人云。待曉天。商客驚。鷄鳴。猶喜。願浄土。行人得。病橋。偏樂。

傳通記釋抄に出づ。又蓮如上人のお文に、法然上人の御詞に云く浄土なれがふ行人は病患を得てひとへに之を樂むといへりとあり。或書にこの御詞は蓮戶筆談に、建曆二年壬申正月病牀御枕屏風に御自筆にて書けたまふと云云

一。道心をば盜て發したるがよきなり。一言芳談に出づ

一。元久乙歳。蒙恩恕。今書。選擇。同年初夏中旬第四日。選擇本願念佛集内題字。並。南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本。與釋禪空。以

空眞筆。令書之。同日空之眞影申預奉。圖書。同二年閏七月下旬第九日。眞影銘以眞筆。令書。南無阿彌陀佛。與。若我成佛十方衆生。稱我名號下至十聲。若不生者不取正覺。彼佛今現在成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生之眞文。又依。夢告。改。禪空字。同日以御筆。令書。名之字。畢。

出子致行信證文類

一。親鸞御同朋の御なかにして。御相論のことさふらひけり。そのゆへは。善信が信心も上人の御信心もひとつなりとおほせさふらひければ。勢觀房念佛房などまうす御同朋達もてのほかにあらそひたまいて。いかてか上人の御信心に善信房の信心ひとつにはあるべきぞ。云法然上人のおほせには。源空が信心も如來より給はりたる信心なり。善信房の信心も如來よりたまはせたまひたる信心なり。さればたゞひとつなり。別の信心にてをはし

まさんひとは。源空がまいらんずる浄土へは。よもまいらせたまひさふらはじとおほせさふらひしかば。當時の一向専修のひとくのなかにも。親鸞の御信心にひとつならぬ御こともさふらふらんとおほえさふらふ。歎異抄に出づ。

一。あるとき鸞聖人黒谷の聖人の禪房へ御参ありけるに修行者一人御とも下部に案内してはいはいく。京中に入宗兼學の名譽まします智慧第一の聖人の貴房やしらせたまへるといふ。この様を御とも下部御車のうちへまふす。鸞聖人のたまはく智慧第一の聖人の御房とたづぬるはもし源空聖人の御と歎。しからばわれこそたゞいまかの御房へ参する身にてはなべれいかん。修行者まふしてはいはいくそのとにさふらふ源空聖人の御とをたづねまふすなりと。鸞聖人のたまはく。さらば先達すべしこの車にのらるべしと。修行者をほきに辭しま

ふしてそのをそれありかなふべからずと云々  
鸞聖人のたまはく求法のためならばあながちに隔心あるべからず釋門のむつひなにかくるしかるべきたゞのらるべしと。再三辭退しまふすといへども御とものもとに修行者かくるところのかご負をかくべしと御下知ありて御車にひきのせらる。しかうしてかの御坊に御參ありて空聖人の御前にて鸞聖人鎮西のものとまふして修行者一人求法のためとて御坊をたづねまふしてはんべりつるを路次よりあひともなひてまいりてさふらふ。めさるべきをやと云々空聖人こなたへ招請あるべしとまほせあり。よりにて鸞聖人かの修行者を御引導ありて御前へめさる。そのとき空聖人はたとかの修行者をにらみましますに。修行者また聖人をにらみかへしたてまつるかくてや、ひさしくたがひに言説なし。しばらくありて空聖人をほせありてのたまはく御房はいづくの人

ぞまたなにの用ありてきたれるぞやと。修行者まふしていはくわれはこれ鎮西のものなり求法のために華洛にのぼる。よて推參つかまつるものなりと。そのとき聖人求法とはいづれの法をもとむるぞやと。修行者まふしていはく念佛の法をもとむと。聖人のたまはく念佛は唐土の念佛か日本の念佛かと。修行者しばらく停滯すしかれどもきと案じて唐土の念佛をもとむるなりと云々聖人のたまはくはてさては善導和尚の御弟子にこそあるなれと。そのとき修行者ふところよりつゞ硯をとりいだして一字をかきてさ、鎮西の聖光房これなり。この聖光房ひじり鎮西にしてをもへらくみやこに世もて智慧第一と稱する聖人をはすなりなにかははんべるべきわれすみやかに上洛してかの聖人と問答すべし。そのときもし智慧すぐれてわれにかさまばわれまさに弟子となるべし。また問答にかたばかれ

を弟子とすべしと。しかるにこの慢心を空聖人権者として御覽せられければいまのごとくに御問答ありけるにや。かのひじりわが弟子とすべきこと橋をたて、もをよびがたかりけりと。慢慥たちまちにくだけければ師資の禮をなしてたちどころに二字をさ、げけり。兩三年の後あるときかご負かきをひて聖光房聖人の御前へまいりて本國懸幕のころさしあるによりて鎮西下向つかまつるべし。いとまたまはるべしとまふす。すなはち御前をまかりたちて出門す。聖人のたまはくあたら修行者かもとどりをさらでゆくはとよと。その御こえはるかに耳にいりけるにやたちかへりてまふしていはく。聖光は出家得度してとしひさし。しかるにもとどりをさらぬよしをほせをかうぶる。もとも不審このをほせ耳にとまふるによりてみちをゆくにあたはず。ことの次第をうけたまはりわきまへんがためにかへり

まいれりと。云々そのとき聖人のたまはく。法師にはみつのもとよりあり。いはゆる勝他。利養。名聞これなり。この三箇年のあひだ源空がのぶるところの法門をしるしあつめて隨身す。本國にくだりて人をかるんじしたがへんとす。これ勝他にあらすや。それにつけてよき學生といはれんとをもふ。これ名聞をねがふところなり。これによりて横越をのぞむこと所詮利養のためなり。このみつのもとりをふりすてずば法師といひがたし。よてまふしつるなりと。云々そのとき聖光房改悔の色をあらはして負の中よりあさむるところの抄物どもをとりいで、みなやきすて、またいとまをまふしていでぬ。しかれどもその餘殘ありけるにや。ついにあほせをなしをきて。口傳にそむきたる諸行往生の自義を骨張して自障障他すると。祖師の遺訓をわすれ諸天の冥慮をはいからざるにやとをほゆ。かなしむべし

ぞるべし。しかればかの聖光房は最初に繁  
聖人の御引導によりて黒谷の門下にのぞめる  
ひとなり。末學これをしるべし。

口傳抄に出づ。

一。われとして浄土へまいるべしとも。又地獄  
へゆくべしともさだむべからず。故聖人無谷  
聖人の御のおほせに源空があらんところへゆか  
んとおもはるべしと。たしかにうけたまはり  
しうへは。たとへ地獄なりとも。故聖人のわた  
らせたまふところへまいるべしおもふなり

執持抄に出づ

一。上人聖のたまはく。いにしへわが大師聖人  
源の御まへに。聖光房。勢觀房。念佛房以下  
の人々おほかりしとき。はかりなき諍論をし  
はんべることありき。そのゆへは聖人の御信  
心と善信が信心といさゝかもかはるところあ  
るべからず。たゞ一也と申たりしに。この人  
々とがめていはく。善信房の聖人の御信心と

我信心とひとしと申るゝこと謂なし。いかで  
かひとしかるべきと。善信申て云。なとかひと  
しと申さるべきや。其故は深智博覽にひとじ  
からんと申はこそ。まことにおほけなくも  
あらめ。往生の信心にいたりては。ひとたび  
他力信心のことほりをうけたまはりしより以  
來。全くわたくしなし。然聖人の御信心も他  
力より給らせたまふ。善心が信心他力也。故  
にひとしくしてかはるところなしと申也と申  
侍しところに。大師聖人まさしくおほせられ  
て云。信心のかはると申は自力の信にとりて  
の事也。すなはち智慧各別なるがゆへに信又  
各別也。他力の信心は善惡の凡夫ともに。佛  
のかたよりたまはる信心なれば。源空が信心  
も善心房の信心もさらにかはるべからず。た  
ゞ一なり。我かしくて信するにあらず。信  
心のかはりあふておほしまさん人々は。わが  
まいらん浄土へはよもまいるたまはじ。よく

くこゝろをらるべき事なりと云云こゝに面  
々舌を卷。口を閉てやめにけり。

本願寺聖人親覺傳給に出たり。

一。法然聖人の仰せに。我菩提所をば造るまじ  
きなり。我跡は稱名あるところは。すなはち  
我跡なりと仰せられけり。また跡をとよらふ  
といふて。位牌率都婆をたつるは。輪廻する  
ものゝすることなりと仰せられける。

山科蓮聖記に出づ。

一。空聖人の御まへに女人あまたいたりけるに  
仰せられけるは。かくのごときの女人。彌陀  
の本願にすがりて。西方の浄土にまいらずし  
ては。無數劫にも女身を轉じがたく。无量世  
にも成佛をとげがたし。无始よりこのかた女  
身を受け。一切心にまかせざることは。がな  
しかるべきことなり。たゞ女身をあらためざ  
るのみにあらず。三途入難にしづみ。六道四  
生にめぐりて。とこしなへに苦患をうけんこ

と。後悔すとも誰れかすくはん。しかるに阿  
彌陀佛の本願にあひたてまつりて。名號をと  
なへ弘誓をたのむがゆへに。いきたまなこ  
とぢんととき。女身を轉じて男子となり。穢土  
ちをいで、浄土にむまれ。須臾に安養の往生  
をとげて長時に無量の快樂をうけんことは。  
よろこびのなかのよろこびにあらずや。かる  
がゆへにゆめ／＼念佛にももうからずして。  
一向に彌陀如來に歸したてまつるべきよし  
さくときおほせられければ。その座につらな  
りける女人。慚愧のたもとをしぼり。隨喜の  
なみだをながしけり。

女人往生問答に出づ。

一。あるひととよていはく。念佛すとも三心を  
しらは往生すべからずとさふらふなるは。  
いかゞしきふらふべきと。師のいはくまこと  
にしかなり。たゞし故法然聖人のおほせごと  
ありしは。三心をしれりとも念佛せずばその



詮なし。たとへ三心をしらすとも。念佛だに  
もふさは。そらに三心は具足して極樂には生  
ずべしとほせられしを。まさしくうけたま  
はりしこと。このごろころをあらはすれば。  
まことにさもとほへたるなり。

後世物語開書に出づ。

一。或人念佛の不審を故聖人に奉問曰。第二十  
の願は大綱の願なり。係念と云ふは三生の内  
にかならず果遂すべし。假令通計するに。百  
年の内に往生すべき也。云々これ九品往生の義  
意の釋なり。極大運者をもて三生に出でざる  
心。かくの如く釋せり。

一。阿彌陀經の已發願等は。これ三生之證也  
と。又云阿彌陀經等は。淨土門の出世の本懷  
也。法華經者聖道門の出世の本懷なり。云々望  
むところはことなり。疑に足ざる者也。

一。我安置するところの。一切經律論はこれ觀  
經所攝の法也。

なし。深心の釋にいたりてはじめて念佛の行  
をあかす所也。

一。往生の業成は念をもて本とす。名號を稱す  
るは念を成せむがため也。もし聲をはなる  
とき。念すなはち懈怠するがゆへに。常恒に  
稱唱すれば。すなはち念相續す。心念の業生  
をひくがゆへ也。

一。稱名の行者。常途念佛のとき。不淨をは  
かるべからず。相續を要するが故に如意輪の  
法は不淨をはくからず。彌陀觀音一體不二  
也。これをおもふに善導の別時の行には。清  
淨潔齋をもちある。尋常の行これにことなる  
べき歟。惠心の不論時處諸緣之釋。永觀の不  
論身淨不淨之釋。さだめて存するところなる  
歟と云。

一。善導は第十八の願。一向に佛號を稱念して  
往生すと云へり。惠心のころ觀念稱念等み  
なこれを攝すと云へり。もし要集のころに

一。地藏等の諸菩薩を蔑如すべからず。往生以  
後伴侶たるべきが故なり。

一。念佛はやうなきをもてなり。名號をとのふ  
るほか。一切やうなき事也と云へり。

一。諸經の中にとくところの極樂の莊嚴等は。  
みなこれ四十八願成就の文也。念佛を勸進す  
る所は。第十八願の成就文なり。觀經の三心  
小經の一心不亂。大經の願成就の文の信心歡  
喜と。同じ流通の歡喜踊躍と。みなこれ至心  
信樂の心也と云へり。これらの心をもて念佛  
の三心を釋し玉へる也と云。

一。玄義に曰く。釋迦の要門は定散二善なり。  
定者息慮凝心なり。散者廢惡修善なりと。弘  
願者如大經說。一切善惡凡夫得生と云へり。  
予が如きはさきの要門にたへず。よてひとへ  
に弘願を憑む也と云へり。

一。導和尚深心を釋せんが爲めに。餘の二心を  
釋したまふ也。經の文の三心をみるに一切行

よらば。行者においてはこの名をあやまちて  
む歟と。

一。第十九の願は諸行之人を引入して。念佛之  
願に歸せしめむと也。

一。眞實心と云ふは行者願往生の心なり。矯飾  
なく表裏なき相應の心也。雜毒虛假等は。名  
聞利養の心也。大品經云捨利養名聞。又大論  
述此文下云。當棄捨雜毒者。一聲一念猶  
具之。無實心之相也。翻內矯外者。假  
令外相不法。內心眞實願往生者。可遂往  
生也。云々深心といふは疑慮なき心也。利他眞  
實者得生之後利他門之相也。よてくはしく釋  
せずと。觀無量壽經に若有衆生。願生彼  
國者。發三種心。即便往生。何等爲三。一者  
至誠心。二者深心。三者迴向發願心なり。具  
三心者。必生彼國といへり。往生禮讚。  
釋三心畢云。具此三心。必得往生也。若  
少一心。即不得生。然則尤可具三心也。

一至誠心者。真實心也。身行禮拜。口唱名號。意想相好。皆用實心。總而言之厭離穢土。欣求淨土。修諸行業。皆以真實心可動修之。外現賢善精進之相。內懷惡惡懈怠之心。所修行業日夜十二時。無間行之。不待往生。外顯惡惡懈怠之形。內住賢善精進之念。修行之者。雖一時一念其行不虛。必得往生。是名至誠心。二深信之心也。付之有二。一者信我是罪惡不善之身。無始已來輪迴六道。無往生緣。二信雖罪人。以佛願力。為強緣。得往生。無疑無慮。付此亦有二。一就人立信。二就行立信。就人立信者。出離生死道雖多。大分有二。一聖道門。二淨土門。聖道門者。於此娑婆世界。斷煩惱證菩提道也。淨土門者。厭此娑婆世界。欣極樂修善根門也。雖有二門。閱聖道門。歸淨土門。然若有二人。多引經論罪惡凡夫不得往生。雖聞此語。不

生退心。所以者何。罪障凡夫往生淨土。釋尊誠言非凡夫妄說。我已信佛言。深欣求淨土。設諸佛菩薩來。罪障凡夫。言不生淨土。不可信之。何以故。菩薩佛弟子。若實是菩薩者。不可不乘佛說。然已違佛說。言不得往生。知非真菩薩。是故不可信。又佛是同體大悲。實是佛者。不可違釋迦說。然則阿彌陀經說。一日七念阿彌陀佛名號。必得往生者。六方恒沙諸佛。同釋迦佛。不虛證誠之。然今背釋迦說。云不得往生。故知非真佛。是天魔變化。以是義故。不可依信。佛菩薩說尚以不可信。何況餘說哉。汝等所執。雖大小異。同期佛果。穢土修行聖道意。我等所修正雜不同。共欣極樂。往生行業淨土門意。聖道者是汝有緣行。淨土門者我有緣行。不可以此難彼。不可以彼難此。如是信是名就人立信。次就行立信者。往生極樂行難區。不出二

種。一者正行。二者雜行。正行者於阿彌陀佛之親行也。雜行者於阿彌陀佛之疎行也。先正行者。付之有五。一謂讀誦。謂讀三部經也。二者謂觀察。觀極樂依正也。三禮拜。謂禮彌陀佛也。四稱名。謂稱彌陀名號也。五讚嘆供養。謂讚嘆供養阿彌陀佛也。以此五合為一。一者一心專念彌陀名號。行住坐臥不問時節久近。念々不捨者。是名正定之業。順彼佛願故。二者先五中除稱名已外禮拜讀誦等。皆名助業。次雜行者。除先五種正助二行。已外諸讀誦大乘。發菩提心。持戒勸進行者等一切行也。付此正雜二行有五種得失。一親疎對。謂正行親阿彌陀佛。雜行疎阿彌陀佛。二近遠對。謂正行近阿彌陀佛。雜行遠阿彌陀佛。三有間無間對。謂正行係念無間。雜行係念間斷。四回向不回向對。謂正行不用回向。自為往生業。雜行不回向時。不為往生業。五純雜

對謂正行純往生極樂業也。雜行不爾。通十方淨土乃至人天業也。如此信者。名就人行立信。是名深心。三回向極樂。欣求往生也。善導與惠心相違義事。善導は色相等の觀法をば觀佛三昧と云へり。稱名念佛をば念佛三昧と云へり。惠心は稱名觀法合して。念佛三昧と云り。

一。餘宗の人。淨土門にその志あらむには。先づ往生要集をもてこれををしふべし。そのゆへはこの書はものにこそるえて難なきやうに。その面をみえて初心の人の爲めにまさ也。雖然真實の底の本意は。稱名念佛をもて專修專念を勸進したまへり。善導と一同也。

一。餘宗の人。淨土宗にそのこそるさしあらむものは。かならず本宗の意を棄べき也。そのゆへは聖道淨土の宗義。各別なるゆへ也とのたまへり。以上は法語なり。

一。淨土宗の大意とて。をしえさせたまひしや

うは。三寶滅盡の時なりと云ふとも。十念すればまた往生す。いかにはひや。三寶流行のよにむまれて。五逆をもつくらざるわれら。彌陀の名號を稱念せんに。往生うたがふべからず。またいはく淨土宗のころは。聖道淨土の二門をたてし。一代の諸教をささむ。聖道門といふは娑婆の得道なり。自力斷惑出離生死の教なるがゆへに。凡夫のために修しがたし。行じがたし。淨土門と云ふは極樂の得道なり。他力斷惑。往生淨土門なるがゆへに。凡夫のためには修しやすく行じやすし。その行といふは。ひとへに凡夫のためにをしへたまふところの願行なるがゆへなり。總じてこれをいへば。五説の中には佛説也。四土の中には報土也。三身の中には二身也。三寶の中には佛寶なり。四乘の中には佛乘なり。二教の中には頓教也。二藏の中には菩薩藏也。二行の中には正行也。二超の中には横超

也。二縁の中には有縁の行なり。二住の中には正住也。思不思議の中には不思議也。またいはく聖道門の修行は。智慧をさはめて生死をはなれ。淨土門の修行は愚癡にかへりて極樂にむまると。云これ淨土宗大意なり

一。和尙の御釋によるに。決定往生の行相に。三の機のすぢわかれたるべし。第一に信心決定せる。第二に進行ともにかねたる。第三にたい行相ばかりなるべし。第一に信心決定せる機といふは。これにつきて又二機あり。一にはまづ精進の機といふ者。又これにつきて二機あり。一には彌陀の本願を緣するに。一聲に決定しぬと。ころのそこより眞實にうちくんと。一念も疑心なくして決定心を多てのうへに。一聲に不足なしともへども。佛恩を報せむともひて精進に念佛のせらるゝなり。また信心多ての上には。はげまざるに念佛はまふさるべき也。この行者の中には信心多たりと

おもふて。その上によるこふ念佛ともへども。いまだ信心決定せぬ人もあるべし。それをばわがころに勘しられぬべき事也。たとひ信心はとつがずとも。念佛ひまなきかたより往生はすべし。二には上にいふがごとく決定心を多ての上に。本願によて往生すべき道理をばあふいてのち。わがかたよりわが信心をさしゆるかして。かく信心を多たりともひしらす。われ凡夫なり佛の知見のまへにはとつかずもあるらむと。ころかしこくおもふて。なほ信心を決定せむがために念佛をばげむなり。決定心を多ふせての上に。わがころをうたがふは。またく疑心とはなるべからざる也。精進の二類の機かくのごとし。これをば第二の信行ならへる行相の機としるべし。次に懈怠の機といふは。決定心を多ての上によるこひて佛恩を報せむがために。常に念佛せむともへども。あるいは世業衆務に

もさえられ。また地體懈怠のものなるがゆへに。おほかた念佛のせられぬ也。この行者一向信心をばげむべき也。はげむ機につきて。また精進懈怠のものあるべし。精進といふは常に本願の緣せらるべき也。緣すればまた自然にいさぎよき念佛も申さるべし。この念佛は最上の念佛也。これをあしくころをて。この念佛の最上におほゆれば。この念佛を往生をもし。また願にも乗ずらむともはむはわるし。そのゆへは佛の御約束。一聲もわが名をとなえむものをむかえむといふ御ちかひにてあれば。最初の一念こそ願には乗ずることにてあるべけれ。また常に本願の緣せらるればたのもしきころもいてくべき也。その時このころのよく相續のせらるればとて。それを多て往生すべしともふべからず。かくのごとくおもはく疑惑になるべきなり。ころのゆるからむときは。往生の不定におほ

ゆべきがゆへに。たゞおもふべきやうは。我  
かたより一分の功德もなく本願の御約束にそ  
なえしところの念佛の功德も。瞋恚のほむら  
にやけぬれども。かの願力の不取正覺の本誓  
のあやまりなきかたより。すぐわれまいらせ  
て往生はすべしと返々もおもふべき也。懈怠  
のものといふは。衆務にさまたげられもせ  
よ。本願を縁する事のまれにあるべきなり。  
まれにはありといふとも。いさゝかも一念に  
とるところの信心のゆるがずして。その時は  
又決心のおこるべきなり。信心決定の中の  
二類の機かくのごとし。これ第一の信心決定  
せる機としるべし。今上にあぐるところの四  
人。眞實に決心をだにもえたらば。精進に  
てもあれ。懈怠の機にてもあれ。本願を縁す  
るころねは。たとへば黒雲のひまより。ま  
れにてもつねにても。いでむところの満月の  
光をみむがごとくなるべし。信心の得不得を

ば。おのゝわが心にてしりぬべし。事ふれ  
て一念にとるところの信心ゆるがずば。假令  
よき信心としるべし。これもとことわりばか  
りにて信心あり。ころゆるくべからずとま  
じなひつけむ事は要あるべからず。散心につ  
けても。いさゝかにても。ゆるぐころあら  
ば信心よはしとしるべし。信心よはしとほ  
えば。懈怠の機はなほ信をばげむて。本願を  
縁すべき也。それになほかなはずば。かまへて  
行相におもむきはげむべきなり。精進の機は  
一向恒所造の行相におもむきてはげむべきな  
り。行相は正助二行を一向正行にても。また助  
業をならべむとも。おのゝ意樂にまかすべ  
き也。第三に行相をばげむ機といふは。上にあ  
ぐるころの信精進懈怠の機の。我信心決定  
せるやうを。ころによくあひむじほどく  
時。我信心決定せず。やゝもすれば行業のお  
こるにつけ。信心の間断するにつけて。往生

の不定におぼゆるまではなけれども。また決  
定往生すべしともおぼえぬは。信心の決定を  
せざるなりと勘えて。一向行におもむきて。  
はげむをいふなり。この機は懈怠のいでき。  
念佛のものからむ時は。おどろきて行をば  
げむべきなり。信心もよはく念佛もあろそか  
ならば。往生不定のものなり。この人またあ  
しくころえて行をばげむ。この行業をもて  
往生すべしとおもはゞ。疑惑になるべきなり。  
今念佛の行をばげむころは。つねに念佛あ  
ざやかに申せば念佛よりして信心のひかれて  
いてくる也。信心いできぬれば。本願を縁する  
也。本願を縁すれば。たのもしきころのい  
てくる也。このころいできぬれば。信心の守  
護せられて。決定往生をとくべしころうべ  
し。これにつきて人うたがひていはく。念佛を  
はげみて信心を守護して往生をとくべきなら  
ば。はげむところの念佛は。自力往生とこそ

なるべけれ。いかゞ他力往生といふべきや。  
今自力といふは聖道自力にすべからず。いさ  
ゝかあたえていえるなるべし。答いはく念佛  
を相續して。相續より往生をするは。またく  
自力往生にはあらず。そのゆへはもとより三  
心は本願にあらず。これ自力なり。三心は自  
力なりといふは。本願のつなにおひかれて信  
心の手をのべて。とりつく分をさすなりとこ  
ころうべし。今念佛を相續して。信心を守護  
せむとするに。三心の中の深心をばげむ行者  
也。相續の念佛の功德をもちて。回向して往  
生を期せば。まことに自力往生をのぞむもの  
といはるべきなり。また念佛はすれども。常  
に信心もあこらず。願を縁する事のつねにも  
なければとて。往生を不定におもふべからず  
そのころなけれども。たゞ自力を存せず。  
すべて疑惑のころなくして。常に念佛すれ  
ば我ころにはおぼえぬども。信心のいろの

したひかりて。相續するあひだ。決定往生を  
うるなりとしるべし。そのころはたとへば  
月のひかりのうすぐもにおほはれて。満月の  
體はまさしくみえずといえども。月のひかり  
によるがゆへに世間くらからざるがごとし。  
行相の三機のやうかくのごとし。詮ずるとこ  
ろ信心よはしとおもはゞ。念佛をばげむべし。  
決定心えたりとおもふての上に。なほころ  
かしてからむ人は。よく／＼念佛すべし。ま  
た信心いさぎよく。えたりとおもひてのちの  
念佛をば。別進奉公とおもはむにつけても。  
別進奉公はよくすべき道理あれば。念佛をば  
げむべし。地體は我ころをよく／＼按じほ  
といて。行にても信にても。機にしたがひて。  
たえむにまかせてはげむべき也。かくのごと  
くころをえてはげまば。往生は決定はつる  
べからざるなり。これは三機  
分別なり

一。或人云阿彌陀佛の慈悲名號餘佛に勝。并に

本願の體用の事。設我得佛十方衆生至心信樂  
欲生我國乃至十念若不取正覺。云々。十  
方衆生と云は。諸佛の教化にもれたる常没の  
衆生也。この衆生をあはれみおほしめすか  
たに。諸佛の御慈悲の阿彌陀佛の御慈悲にお  
なじかるべし。これは總願に約す。別願に約  
する時は。阿彌陀佛の御慈悲は。餘佛の慈  
悲にすぐれたまへり。そのゆへはこの常没  
の衆生を。十聲一聲の稱名の功力を以て。  
無漏の報土へ生ぜしめむと云ふ御願によて  
也。阿彌陀佛の名號の餘佛の名號にすぐれ  
たまへると云も。因位の本願にたてたまへる  
名號なるがゆへに勝たまへり。しからずは報  
土の生因となるべからず。餘佛の名號に同ず  
べし。抑阿彌陀佛の本願と云は。いかなる事  
ぞと云に。本願と云は。總別の願に通ずとい  
へども。言總意別にて。別願をもて本願とは  
なづくる也。本願と云ことは。もとのねがひ

と訓する也。もとのねがひと云は。法藏菩薩  
の昔常没の衆生を一聲の稱名のちからをも  
て。稱してむ衆生を我國に生ぜしめむと云こ  
と也。かるがゆへに本願といふなり。  
問本願について。體用あるべし。その差別いか  
んぞ。答本願と云は。因位にわれ佛になりた  
らむときの名を。となへむ衆生を極樂に生ぜ  
しめむと。ねがひたまへるゆへに。法藏菩薩  
の御ころをもて本願の體とし。名號をもて  
本願の用とす。これは十劫正覺のさき兆載  
永劫の修行をはじめ。願をおこしたまへる時  
の法藏菩薩に約して。體用を論ずる也。今は  
法藏菩薩は因位の願成就して。果位の阿彌陀  
佛となりたまへるがゆへに。法藏菩薩おはし  
まされば。法藏菩薩に約して。本願の體用  
を論ずべきにあらず。たゞしあたえて云へば  
本願の體用あるべし。體と云について。二の  
ころあるべし。一には行者をもて本願の體

とし。二には名號をもて本願の體とす。まづ  
行者をもて本願の體とすと云は。法藏菩薩の  
本願に成佛したらむ時の名。一聲も稱してむ  
衆生を。極樂に生ぜしめむと願したまへるが  
ゆへに。今信じて一聲も稱してむ衆生は。か  
ならず往生すべし。この能稱の行者の往生す  
るところをさして。行者をもて本願の體とす  
とはころうべきなり。問我佛に成たらむ時  
の名を。稱せむものを生ぜしめむと。本願に  
は立たまへるがゆへに。名號を稱する者を。  
やがて本願の體ともころうべしや。答これ  
について與奪の義あるべし。與て云へば行者  
の正く蓮臺にうつりて往生するところをも  
て。本願の體とし。奪云へば往生すべき行者な  
るがゆへに。當體能稱の者をさして本願の體  
とすべし。行者について本願の體と云時は。別  
に用の義なし。蓮臺に托して往生已後の増進  
佛道をもて用とす。これは極樂にての事也。次

に名號をもて本願の體とすと云は。これも成佛の時の名を稱せむ衆生を。生ぜしめむと願じたまへるがゆへに。信じて名を唱てむ衆生はかならず生ずべければ。名號をもて本願の體と云也。名號を唱つる衆生の往生するは名號の用也。今名號をもて本願の體とすと云は。法藏菩薩の御こゝろのそこをもて。本願の體とすとひつる時は。用といはれつる名號也。しかるを今はまさしく。名號をもてば本願の體と云也。事によりてかはるなり。喩ばとしびのひかりをもてこゝろうべし。ともしびのあかく。もへあがりたるは。火の體なり。燈によりて關はれて明なるところの光は火の用なり。この光の明なるをもて體とする時は。その明の中に黑白等の一切の色彩のみゆるは用なり。かくのごとく用をもて體とも云事。常の事なりしるべし。行者の往生するをもて。本願の體と云ことは。實には名號を

稱せずして。往生すべき道理なし。名號によて往生すべし。しかりといへども。かくのごとき事は約束によりて云時は。行者の往生をもて本願の體ともいはるべし。名號を本願の體と云時は。稱する行者の往生するは名號の用なり。しかれば行者はあるひは本願の體。あるひは名號の用にも決定すべきなり。この道理によて本願の體に約してこゝろうれば。本願や行者。行者や本願。本願や名號。名號や本願と。たゞ一に混亂するなり。用に約してこゝろへつれば。名號や行者。行者や名號といはるべし。詮ずるところは體なくば用あるべからず。用は體によるがゆへに。本願と行者。たゞ一ものにて一としてはなれざるなり。問法藏菩薩の本願の約束は。十聲一聲なり。一稱のうちに法藏菩薩の因位の本誓に心をかけて。名號をば稱すべからざるにや。答無沙汰なる人は。かくのごとくおもひて。因

位の願を緣して。念佛をも申せば。これをしえたるこゝちして。願を緣ぜざる時の念佛をば。ものならずおもふて。念佛に善惡をあらするなり。これは無按内のことなり。法藏菩薩の五劫思惟は。衆生の意念を本とせば。識揚神飛のゆへ。かなふべからずとほしめして。名號を本願と立たまへり。この名號はいかなる亂想の中にも稱すべし。稱すれば法藏菩薩の昔の願に。心をかけむとせざれども。自然にこれこそ本願よとほゆべきは。この名號なり。しかれば別に因位の本願を。緣ぜむとおもふべきにあらず。問本願と本誓と。その差別いかんぞ。答我成佛の時の名を稱せむ衆生を。生ぜしめむと云は本願也。もしひされましまくは。佛にならじと云は本誓也。總して四十八願は法藏菩薩のむかしの本願也。この願にこたへたまへる佛果圓滿の今は。第十九の來迎の願にかぎりて。化度衆生

の御方便は。おはしますべきなりと云なり。阿彌陀佛の名號は餘佛の名號に勝たまへる本願なるがゆへなり。本願に立たまはずば。名號を稱すとも無明を破せざれば。報土の生因となるべからず。諸佛の名號におなじかるべし。しかるを阿彌陀佛は。乃至十念若不生者不取正覺とちかひて。この願成就せしめむがために。兆載永劫の修行をおくりて。今已成佛したまへり。この大願業力のそひたるがゆへに。諸佛の名號にもすぐれ。となふればかの願力によりて。決定往生をもするなり。かるがゆへに如來の本誓をさくにうたがひなく往生すべき道理に任して。南無阿彌陀佛と唱てむ上には。決定往生とおもひをなすべきなり。たとへばたきものにほひの薫せる衣を身にきつれば。みなもとはたきものにほひにてこそありと云とも。衣のほひ身に薫するがゆへに。その人からはしかりつると云がて

とく。本願業力のたきもの、句は名號の衣に  
薫し。またこの名號の衣を一度南無阿彌陀佛  
とひきしてむものは。名號の衣の句身に薫す  
るがゆへに。決定往生すべき人なり。大願業力  
の句と云は往生の句なり。大願業力の往生の  
句。名號の衣よりつたわりて。行者の身に薫  
すと云道理によりて。觀經には若念佛者。當  
知此人。是人中芬陀利華と説なり。念佛の行  
者を蓮華に喩ることは。蓮華は不染の義。本  
願の清淨の名號を稱すれば。十惡五逆の濁に  
も。そまらざるかたを喩たるなり。また觀世  
音菩薩。大勢至菩薩。爲其勝友と云り。文の  
こゝろはこれも往生の句身に薫せる行者は。  
かならず往生すべし。これにて善導和尚も  
三心具足の者をば。極樂の聖衆に接したまへ  
り。極樂の聖衆と云は。因中説果の義なり。  
聖衆となる道理あれば。當時よりして。二菩  
薩も肩をならべ。膝をまじえて勝友となりた

一。われひかし出離の要道にわづらひて寢食や  
すからず。多年心勞ののち往生要集を披覽す  
るに。序にいはいはく。それ往生極樂の教行は濁世  
末代の目足なり。道俗貴賤誰れか歸せざらん  
ものぞ。たゞし顯密の教法その文ひとつにあ  
らず。事理の業因その行これとほし。利智精進  
のひとはいまだかたしとせず。予が如き頑魯  
のものにあへてせんや。このゆへに念佛の  
一門によりていさゝか經論の要文をあつむ。  
これをひらきこれを修するにさとりやすく行  
じやすしと。序は畧して一部の奥旨をの  
ぶ。さとし念佛の一門によると。文にい  
りてくはしくさぐるに。この集に十門をたつ  
そのなかに厭離穢土欣求淨土極樂證據等の三  
門は行體にあらず。しばらくこれををく。殘る  
ところの七門は念佛の助成なり。第四の一門  
はすなはち正修念佛なり。これをもてこの宗  
の正因とす。このゆへに予往生要集を先達と

まふといふこゝろなり。命終の已後は。往生  
して佛果菩提を證得すべきに於て。當座道場  
生諸佛家とさたまへり。かるがゆへに一念  
に無上の信心をえてむ人は。往生の句薫せる  
名號の衣を。いくへともなくかさねさむとち  
もふて。歡喜のこゝろに住して。いよく念  
佛すべしと云り。これは四箇  
條同答なり

一。四種往生事

- 一 正念佛往生 阿彌陀經説
- 二 狂亂念佛往生 觀無量壽經説
- 三 無記心往生 群疑論説 懷感作
- 四 意念往生 法鼓經説

法鼓經言。若人命終之時。不能作念。但知  
彼方有佛。作往生意。亦得往生。云云

以上四方指南抄に出づ。但彼抄中載する所の法語多しと雖  
も。今は和漢兩語燈錄。勅修御傳。及九卷傳等に見えざるも  
のな此に抄録するのみ。

して淨土門に在るなりと。そのうち黒谷  
の報恩藏にいりて一切經披覽五遍云々そのと  
き。光明寺の觀經義とみたまふに極樂國土を  
高妙の報土とさだめて往生の機分を垢障の凡  
夫と判ぜられたる義理を見るに。奇異のちも  
ひやうやくうごき。別してまたかの疏を三遍  
披覽したまふに。第二遍にいたるまではいま  
だその宗義を得ず。これすなはち本宗の執心  
をさしはさみて聖道の教相になつむゆへ也。  
第三遍にいたりてつぶさに本宗の執情をすて  
一心詳覈のときふかく淨土の宗義を得た  
り。たゞし自身の往生はすでに決定しをはり  
ぬ。他のためにこの法を弘通せんとおもひた  
まふに。もし佛意にかなふやいなや。心勞の夜  
ゆめにみらく。紫雲發誓として日本國におほ  
へり。くものなかより无量のひかりをいだす。  
ひかりのなかより百寶色のとりとびちる。く  
ものなかに僧あり。かみはすみぞめしもは金

色の衣服なり。手とふていはくこれたれとかせん。僧こたへていはく。われはこれ善導なり專修念佛の法をひろめんとす。かるがゆへにその證とならんがためにきたれるなりと云云。善導はすなはちこれ彌陀の化身なれば詳敷の義佛意にかなひけりとするこびたまふ。立宗懷なり淨土願記に出せる所と稍異なるが故に之を録す 御述

一。出離の道にをいては淨土にあらでは生死をはなれがたく念佛にあらでは淨土にひまれがたし。いはんや末代にいたりてをや。いはんや凡夫にをいてをや。しかれば彌陀稱名の一行は諸佛おなじくす。め三國ともにもてあそぶ。なかんづくに疏をつくり釋をまうくることおほくはすなはち貴寺の高僧二宗の先達か。しからば當寺の禪徒なんぞあながちにこれをとおしめん。いまこゝろみに靈場にひざまつきてほしひまゝに文を釋し義をのぶ。かつは冥鑿をおそれかつは衆勸をおそる。およ

らんにつきてもいよく佛の本願をあふぐべし。そのゆへは彌陀の本誓はもと凡夫のためにして聖人のためにあらずといへる文によりてなり。あふぐべし信すべし。これは白河の房にこれを聽聞して發心せりと云ふ。耳四耶といふは天野四郎の轉名にて。入道教阿の事なり。 一。決定往生のひととりて二人のしなあるべし。ひとつには身に威儀をそなへくちには念佛を相續し心には本誓をあふぎて四威儀のふるまひについて遁世の相をあらはし三業の所作出要にそなへたり。外には賢善精進の相あれどもうちには愚癡懈怠の心なく行儀をまかはず渡世をもちはず。心かたましくして利養をへつらふこともなく名聞のおもひなく貪瞋邪偽もなく奸詐百端もなく雜毒のけがれもなく不可の失もなく。まことに外儀も精進に内心も賢善に内外相應じて一向に往生をねがふひともありこれ決定往生のひとなり。かゝる上根の後世者は末代にまれなるべし。ふ

附録 諸書に出たる法語

その念佛を信するものは極樂にひまれて永劫に樂果を證し。誘するやからは地獄に墮して長時に苦惱をうく。たれかこれを誹謗せん。たれかこれを信ぜざらん。東大寺供養のときの説法の御開なり 一。凡夫出離の要道淨土の一門念佛の一行にしくはなし。その機をいへば十惡五逆四重謗法闍提破戒破見等の罪人。その行を論ずれば十聲一聲いかなる嬰兒もとなへつべし。その信をいへばまた一念十念いかなる愚者もあこしつべし。もとより十方衆生のためなればいづれの機かもれ。たれのともがらかすてられん。十方衆生のなかには有智无智有罪無罪凡夫聖人持戒破戒若男若女老少善惡のひと乃至三寶滅盡のときの機までみなこもれり。たゞこの本願にあひ南無阿彌陀佛といへる名號をさゝゑてんもの若不生者のちかひのゆへに彌陀如来遍照の光明をもてこれを攝取してすてたまはず。罪おもく障ふかく心くらく解すくなか

たつにはほかにたふとくいみじき相をもほどこさずうちに名利の心もなく。三界をふかくとみていとよこゝろきもにそみ淨土をねがふこゝろ體にとほり。本願を信知してむねのうちには歡喜し往生をねがひて念佛ををこたらずほかに世間にまじはりて世路をわたり在家にとまひて利養にかたどり妻子に隨逐して行儀十分に遁世のふるまひならず。しかりといへども心中には往生のこゝろさし片時もわすれがたく身口の二業を意業にゆづり世路のいとなみを往生の資糧とあてがひ妻子眷屬を知識の同行とたのみてよはひの日々にかたぶくをば往生のやうやくちかづくどとよろこひいのちの夜々におとろよるをば穢土のやうやくとをさがるどとこゝろをば穢土のやうとを生死のをはりとあてがひかたちをすてんときを苦惱のをはりと期し。佛はこのとき現前とちかひて影向をしばのとほそにたれ



行者はこのときゆかんと期し結跏を觀音の蓮臺にまつ。このゆへにいとがしきかな往生。とくこのいのちのはてねかし。こひしきかな極樂。はやくこのいのちのたへねかし。くやしきかなわがこゝろ生死のひとやをすみかとして惡業のためにつかはるゝこと。うれしきかなわがこゝろ無爲の都にかへりゆきて四生のあるじとあふがれんこと。かやうにこゝろのうちをすまして廢忘することなく。たとひ縁にあへばよろこびもありうれへもありおかしきこともありうとまじきこともありはづかしきこともありいとをしきこともありねたきこともあり。かやうのことあれどもこれは一旦のゆめのあひだの穢土のならひとこゝろをてこれがためにまぎらかされず。いよ／＼いとほしく。たびのちにあれたるやどにとまじりてあかしかねたるこゝろにして。よそめにはとりわき後世者ともしられず。世の中にまぎれて

ただ彌陀の本願に乗じてひそかに往生するひとあり。この二人のこゝろだてを彌陀は至心とをしへ釋迦は至誠心ととし善導は眞實心と釋したまへりとぞ。これは諸洛の發大谷にて或人に示されたる御詞なり以上拾遺古德傳。正源明雅抄等に出づ。但彼の書中載する所の法語多しと雖も。今は和漢兩語燈錄。勅修御傳。及九卷傳等に見えざるものか此に抄録するのみ

一。學六十卷一事畢重通世之由啓師。師云。乃至通世年闕身衰後事也。若盛程暫山上止住勤。公請營論議。我山莊可成云。仰去事侍。更以不思寄事也。其故五千上慢起。無上尊等慢。憍薩史彌忝思。懸百福莊嚴掌。摩竭調達親打損。千輻魚形跌。見者無厭德值。須達老婢。被厭。惡薰能伏用爲善。早俱伽利。被失。在世如。此况滅後哉。所以五濁亂漫境。凡聖雜居。接。六趣四生依所。心濁詔曲所也。雖紅頭合。咲心中。鑿三毒劍。雖芝蘭語芳。思外十惡矢。つまよる。愛見羅刹計。間求戒品浮囊疵。結業商客滿市。善根油鉢易傾。憍慢八島高遊。邪

見之林。噴恚蚺蝮深騷。隨眠叢。邪見外道背。如來聖教。放逸尼乾至三寶誹謗。爾決擇趣趣時人是可云曲。論談仰望他理非可云成。如是存交衆之志片時更無之申給。皇圓聞之左様慢心住論談事實然也。衣座室三住修行何可苦哉。即入廣大慈悲室。着柔和忍辱衣。坐諸法空座。可好般若波羅蜜道也。更不許通世。善弘申給。我有三望。叶給通世可思留。若所望一不叶給。者通世可許。關梨聞三所望者坊舍聖教坊領也心得。最安事故思給。早々何事所望問給。淚流申。春花盛無落花恨。者可通世思留。若風花空散世間不定可許。通世。是。一月半秋影滿。光傾者。不可有厭世之思。晚秋半闌庭前草枯。霜。籠片虫露。可弱者彌可發心之便。是。春草暮秋葉落。四序之易移猶餘所事可思成。眼前無常人皆難免者也。夫如來萬德之像猶隱。沙羅林之曉烟。釋提十善之簪。遂萎歡喜園之夕露。凡生

者必滅之理會者定離之悲。凡聖共難免者也。爾則朝烟欲尋歌仙之居跡。山宮上之霞幽々。夕嵐欲訪先賢之去廟。故鄉砌之風亡々。誠無常轉變身高不留。生者必滅之質下爲去。火燒。麗質。登烟化。東俗之雲。春霞片々。土埋。俗骨。變。性成。北芒之草。秋露滾々。今日死終明日命際思。兼不知者死期也。加留危世中何々思てかすゝろに可成。食着。狂許。通世。給。勸泣々申給ければ。皇圓不及力。汝爾往。黑谷。慈眼房爲師。云云

一。爰生國師範並母堂。歷數年之後相伴而京上。對面之處相互咽。淚良久不言。乃至上人云。生死解脫者一大事因緣也。自行暗。妙宗。不能益他。依之拋。萬事。求佛道。閱。世路。欲入。眞門。之間。知恩之思如。忘報謝之志似。無。但心中非。不懸連々所。數存也。然者罷下欲。遂。拜面。之處。遮有。來臨。爲。悅。抑往生極樂事尤可。令。決定信心。給。末代凡夫

皆是罪惡之乘生也。眞言止觀深法ニ生難證入。故以ニ口稱念佛一行ニ爲ニ出離解脫要門。此偏依ニ他力之本願。亂想凡夫造罪迷徒。必遂往生ニ者也。云云

一。上人の御船を。神崎の橋の上二町斗りに付く。御送の人々の船も同所に着く。暮の程に及て。傾城五人従女に櫓を押させ。唐笠を指し上人の御船近く参れり。乃至上人。彼れ等が有様を御覽じて。後生の引出物所望こそ情けれ。更らぬだに惣じて過重き事也。同じ女人と云ひながら。汝等殊に罪障深重也。此世は常の栖に非ず。草葉に結ぶ露よりも莫々。我身は假の姿也宿れる水月よりもあだなり。金石に花を詠ずるの客。花と共に無常の風に隨ひ。南樓に月を翫ぶ輩。月に先て隠る有爲の雲に。鳥邊野の朝の霞有りはつまじきの世を示し。船岳山の夕の煙り後れ先立つ愁を残す。花やかなる様貌も蓬の下に朽ち。麗たぐ

ひ無りしも苦の底に埋まるべし。無墓世の習哉。可無墓人身也。各の夢中の假の棲に心を留ずして。淨刹の蓮臺に可係念をと教化し給ひければ。遊君涙を流して申さく。如此愛世を離て。此程に無墓捨身。淨土に生るには。女人の身に取て何なる行をか可勤め侍哉と。上人の云。女人は障り重して諸教に出離を不許。去れども。彌陀如來の本願は殊に女人に深しと見へたり。草提の五障の身たりし。無生を西方に證し。侍女の百惡の姿なりし。往生を淨域に顯はす。然れば。彌陀如來に頼を係け。易行の名號に志を運び。今度難受人身を得たる思出に。心愛かりし六道を離るべし。云遊君共聞之。各隨喜して申さく。今生の御引出物は何にかせん。今の御法門を深く耳に留め侍りぬとて。御前を立ち我船に乗り遷て後。又別の船に傾城を二人乗せて。上人の御船に進て。彼遊君の脇の下

より手箱を取り出して。上人の前に指し寄せ申けるは。莫大の御法門承り侍りぬ。何か御布施をと。思ひ案じ侍れども。聊か御用立つべき物不侍。此御布施は自何に御目に懸られんと覺へ侍る程に。我等が中よりまいらせ候なりと申す。上人箱を開て御覽すれば。引合にて押褰たる物五つあり。取上て御覽すれば。本結び際はより髪をふつと切て褰みたり。上人是を御覽じて涙を流て云。是れ御覽候や。人々女人の身の莊りには。高きも賤きも老たるも若きも。皆髪を以て大切とす。短をば末を續き。無元は形を刷ろひ。一生の大事とする髪を。能々往生は願はしき事なればこそ如此はあらめれ。されば源空は。何と習ひ何と行じければ。今迄如此發心せざりけるぞや。一句の開法に永切の魂を養ふ。此事也とて。かさくどさく泣き給ひければ。見る人も哀み。聞く人も歡喜せり。彼の

傾城どもを被召。上人。剃刀を當て給て各に出家せさす。面々に戒を授て美しく思ひ取給たる道心なれ。彌陀如來の六八の誓願の中に。第三十五本願の女人を引接せんと誓ひ給へり。されば身を本願に任せ。南無阿彌陀佛の聲の下に息き絶へ舉りなば。命欲終時自來迎接の約束に任せて。火の中水の底までも。彌陀の來迎は垂れ給也。此旨を忘る事無くして皆々往生すべきとの給ければ。承りぬとて。御前を立ち我船に乘移て。船を神崎橋づめにつなぎけり云遊流記。正源明。攝津國福原經島に付給ふ。乃至浪底は不立上りたる。長け五丈計成鬼神。其色赤して一入再入の紅の如くなり。上人の左の御膝に。とがひを持せて上人を守り上げ奉る。右の方よりも。同じ長けなる鬼神。其色白して羽雪に似る。是も上人の膝に。とがひを宿して御貌を見上げ奉る。

乃至上人。敢て驚き給はず。御眼の内、眠るが如くして。念佛誦し玉ふ。彼鬼神等。暫く有て申けるは。上人我等程の怖き物や見玉ふやと。上人その時。御目を見開き。源空。汝等よりも遙に怖しき物を随身持ちたる也と仰せらる。鬼神。何物なるらんと申す。上人答云。悪業煩惱是也。無始曠劫より以來。生死に輪廻して成佛の直道に不進事は。只源空が持たる所の煩惱の態也。汝等は今一旦の命を敬し。又未來永々にも可敬。されば爲煩惱賊之所害者と説き給へり。汝等が左様に見惡體を受けたるも此煩惱の故也。汝等を思へば疎からず。曠劫流轉の間。源空も汝等が形を受けたる時も有けん。其時は汝等を父母とも憑み。兄弟とも契り。親友とも成つらん。過去の舊縁を思へば怖しからず。又流轉生死の昔を思へば汝等も不眠。爲父母兄弟一時は恣に無量の罪等を成て。曾て佛法

の名字をも聞かず。其罪の餘習于今不盡。常没流轉の凡夫と成る。されば汝等が有様敢て不怖とて。最も心に閑に念誦し玉ふ。乃至鬼神四人參たり。上人御覽すれば。兵庫にて約束申たりし鬼神也。上人。是等が汝が申せし者共かとの給へば。申入侍し二親は是也。早く長生不死の良藥を與へよと申ければ。上人三尺五寸阿彌陀如來の立像を懸奉り。鬼神に仰て云。汝等あの佛を拜し奉れ。汝等が形は是即生即滅の姿也。彼佛は長遠不死の果報なり。皆々心を開めて聽聞すべし。六道四生の間。二十五有の境には。何の處か死を逃がる者。一人として可有之哉。汝等が委た難不怖全く無常の殺鬼は可怖。己れ等が力強しと雖。魔滅の獄卒には必ずみ負くべし。日々の所作三塗に可沈。夜々に所思入難に入るべし。過去に佛道を修行したらましかば。今生にかゝる受鬼神の形。死苦をば歎

かざらまじ。各命ち長くして親子共に相副はんと思は。南無阿彌陀佛と唱て。今生醜惡の穢身を可捨。此身を捨て畢りなば。此阿彌陀如來觀音勢至無量聖衆と共に來て。汝等を迎ひ取り極樂淨土に置給べし。彼の淨土にては永く生死の根元を絶て。六道に還る事無し。至る所には只無量樂を得て。更に憂惱不可有。勸め給へば鬼神等申云。誠に南無阿彌陀佛と唱へなば。あの佛の御體に罷成るべくやと。上人實に然なり全く勿疑。然者我等に此法を授玉へと申す。手を合て十聲南無阿彌陀佛と授給ふ。又仰て云。之汝等命の有らん程は。此南無阿彌陀佛を忘るゝ事なく常可唱又此佛の御前にて可死とて。此本尊を與へ給ふ。云云。道流記正源明義抄等にも出づ。

一。上人聞て云く。嗚呼哀哉々々是心是佛土なり外に求むべきに非ず然れども我往生は唯爲令一切衆生信念佛也命終只今に非ず

以上十卷傳に出づ。

一。配所は土佐の國と定められ。又月輪殿法性寺の小御堂に留奉り給ふ。ある夜雨ふり風さわがしかりけるに。惡黨五十餘人御座所にをしよせたり。然れども。戒行を先とし。慈悲を宗とし給へる人々なれば。妨ぐるに及ばず。上人を始め奉り。御弟子六十餘人の衣裳を皆剃ぎ取り。其外佛具水瓶などの御重寶ありけるを。隆寛律師の計らいとして。隨身せられたりけるを。皆取りにけり。此惡黨等。後の山を指して入にけり。乃至法性寺の奥。眞澄の池のはたに。惡黨等並居。取る所の衣裳を配分しける所に。上人御入り有て。石のありける座給て。彼の惡黨等に向て言はく。人々有様を見るに。或は諸太夫織藏人皆々恥ある輩也。暫く心を開め源空が一言を聞くべし。今何ぞ電光朝露の須臾の身を以て。盜業を犯し長く永劫の苦をうけんや。浮生は

幻の如し朝に變じ夕に變ず。生死流轉は昔も迷ひ今も迷へり。病ひは死の花なれば無常の風一度びあをひて本末に歸へる色もなし。老は生の終りなれば有爲の雲散じ密に留跡もなし。身を觀ずれば岸の額に根を離れたる草。今日や今生の終りならん。命を論ずれば江のほとりに繋がる船。明日や後生の始ならん。無常の殺鬼は高賢をも嫌はず。賢君をも明王をも何れか終に殘らん。有爲の怨賊は貴賤をも不<sub>レ</sub>論。良臣をも黎民をも誰か獨り留まらん。古より今に至り。凡より聖に及ぶまで人は異なれども此理を變せず。世は移れども此習ひは新たならず。凡。惡道苦患をうくる事専ら煩惱に依て妄執す。妄執の故に煩惱を起す。煩惱の故に苦患を受く。三毒依て銅柱鐵城に墮す。又寒氷紅蓮色は惑業の家より染め出せり。悲哉夢の如くなる一旦の身を食り。永き世の苦因を不<sub>レ</sub>願。歎哉幻に似たる

片時の世を思ひて。來報の苦患を知らず。汝等が威勢にも憚からず。奪精の猛鬼は汝等が弓箭にもあそるべからず。終に炎魔羅にひさまづかんとさ。自業自得果の涙を干すともかはくべからず。願くば今生一世の身を軽く思ひて。後生永代の罪の重き事を思ふ可し。然るに彌陀の本願は十惡五逆をも不<sub>レ</sub>嫌。超世の名號は謗法闍提をも忍らぶ事なし。一稱なれども尚不<sub>レ</sub>捨。況や十念行業をや。十方衆生の願は廣くして道俗をも攝し。光明遍照攝取は遍くして男女に及ぼす。相拂へて此理を耳の底に留めて。往生極樂の素懷を遂ぐべしと。懇ろに教化し給へば。五十餘人の惡黨等。隨喜をなし渴仰を致し。前の罪を恨み後悔の涙せきあえず。面々合掌し十念を受く。乃至次に男の進らせたる行器を開き御覽すれば。思々の水引にて取たるもとより五十餘人まで進らせたり。上人彌よ御なみだ萬行し

て。御手指し上げ給ひて。各是を是給へや。昨日今日に至るまで人の命を害するを能とし。山野のけだもの江河のうろくづに至るまで。彼等が害し殘せる物なし。雖<sub>レ</sub>然。源空が一句の法門に依て。加様に成りぬる事こそ哀れかれ。去れば。源空何と習ひ何と行じければ。今永劫の魂を養ふとは此理也とて。かきくどき泣き給へば。見る人も哀しみ。聞く人も涕泣せり。云云 正源明抄  
一。月輪殿は老々として。上人の御輿の長柄に取り付き給ひて言く。哀れげに長命ほど。心くるしきものは侍べらじ。丸。上人に先き立ち進らせて。訪奉らんと存じ候ひつるに。上人配所に移されましまさば。再會何れの時ぞや。罪無き上人を。土佐の國まで移し奉りなば。愚老が悲泣いかせんと歎き給へば。上人涙を押へて言く。面々の愁涙理り也といへども。有爲の習ひ生死もつて同じ。再會期し難

しと云へども。開法諸縁は累劫芳契也。然れば行末たのもしく思給べし。各心を閉め筆を染めて。源空が一語を書きとめ給べし。縦ひ源空は西海の波に携はると云へども。一句法訓は留まりて眼の前に形見と可<sub>レ</sub>成。設罪は十惡五逆すら往生す況や善人をや。念佛は一念十念も往生すと知りて。而も多念の業をはげまして。一念十念の者往生す何況や多念をやと。心得て申べし。是源空に對面すると思ひて。忘れ玉ふなと。云云  
以上黒谷上人遺流記に出づ。  
一。うたがひながらも念佛すれば往生す。  
徒然草に出たり。  
一。源空曰。姪欲酒肉をもて不淨とせず。諸道の中には智慧をもて清淨のみなもととするなり。  
佐々貴四郎高綱通世して。高野山にありしが。ある時京への便りて。源空上人に逢てと

ひけるは。念佛の時ねむりにおかされて。行をおこたり侍る事。いかゞして此障をやめなんやと尋しかば。上人目のさめたらんほど。念佛し給へとぞ申されし。

一。又曰。皆人のおのれとまのが智恵に迷ひて。ちかき極樂を遠くし。かほどやすき世間をくるしみとなす事は淺間しき事なり。何なる樂みかありて此夢の世に。夢のごとくの智恵をふるまひけるぞ。本來の智恵といはんは。佛教を疑はずして。身命をも打すて。後の世を願ふべし。愚なるかな。はかなき處の身を愛して。永き苦を受なん事を怨しき。

以上和論器に出づ。此の外。後世に成れる諸書の中には。あやしげなる法語多きも。すべて省きてのせず。

生々世々の六親等の。惡道に隨して苦ふかきを濟度するにて候。是は何故ぞと申せば他力の故にて候也。恭くも書に付ても筆の立所もしらざる程涙にむせび候。予が門人にも聖光房。勢觀房。禪勝房。善心房はいつもあやまりせぬ人人にて候。向後も座主などのいらせ給ふ處にげてかへらせ給ふべく候。穴賢。

善心房

源 空 御 判

今源空が申法門は。佛の説給ふ經の文に。設我得佛十方衆生等と云ほとけの願。善導和尚の。若我成佛乃至彼佛今現等の釋義の意なれば。よも誰人成共誹謗はし給はじ。此義さとしといはんは外道天魔の類なるべし。更に所難の趣とりあぐべからず。又一念業成之事平生臨終三寶滅盡之時の機にありと決定せらるべく候。法華堂の座主の智行ぞろはせ給ふさへ。終に情を折專修に成給ふに。今の座主の御坊のの給ふは。

附 錄 興御書 母儀に遣はさるゝ御返事

### 十八 興御書或は印可の御書といふ

昨日殿にて座主の御坊へ參會。法門仰せかけて誹謗し給ふ由承候。不苦候。餓鬼は水を火と見候。自力根性の他力を知せ給はぬが哀に候。只源空が痛所は。内徒と稱する人々の中に。不思議を源空がをしへ候と云へるが淺間敷候。常に申様に淨土の意は。機は十方衆生。心は助け給へと思計。行は一念も十念も決定往生也。佛願に順ずるが故にと。相承する外に全く別の法行も示もなし。されば父母が愛執の中より生たる。生れ付の三毒五欲の機。乃至臨終に火車の現する時。始て一念唱て無量劫の間の重罪をも。今生の十惡をも五逆をも。一念の間に能滅し。火車の轆をかへし。華臺の來迎あり。機は三寶滅盡の時の族までも。只一念南無阿彌陀佛と申せば。極樂世界の七寶の臺に生れて。正定聚不退の位になりて。二度輪回の郷にかへらず。剩へ

四九〇

雀の轉るに異なるべからず。予は一切經を二十六箇年をへて。五返迄見盡して六宗の達者にあひて申極め。今淨土宗を建立し候。更に私にはじめて申立にあらず。異人にはとをさかるべきにて候。貴房形見と候間爲念佛證據。予が影進之候

此原本は京都新黒谷金戒光明寺に在り。

### 十九 母儀に遣はさるゝ

#### 御返事

附母儀よりの御文

一筆とりむかひ參らせ候。御坊はるかに見奉らず。あけくれ御ゆかしくこそ思ひ參らせ候。われ／＼今日明日をこそしがたきやうにこそ候へ。たゞとにかくにあさましき身にて

四九一

候。ちと御下候て御覽じ候へかしと思ひ  
なり。さも候はずば。やすくしやうじをは  
なるべきやうをこま／＼としるし給へ。それ  
をりんじうの善知識。上人とたのみ候べし。  
申たき事あめ山にて候へ共。筆をとめ參らせ

候。以上母  
體御文

條々におほせられ候。ごしやう一大事の御心が  
け。まことに／＼かんようにて候。そも／＼ご  
しやうと申事はとをからず。こんじやうにての  
御心もちにて後世もあらはれ候。さればちごく  
ごくらくもようならず目のまへに御さ候。まづ  
にんげんの有様は。たかきもいやしきも。ふつ  
きもひんなるも。いろ／＼さま／＼かわれど  
も。思ふ事はたへぬものにて御座候。人のふつ  
きゑいぐわを見さしして。うらやましくおもへ  
ども。そのふつきのうへにもなやみはあり。子  
がほしひ妻がほしひ。又はにくきものをねた  
み。又はおもふ人にわかれかなしび。それ／＼

に物を思ふ苦があるものなり。ひんなるものは。  
とほしくしてあぢきなく。人にあなどられいや  
しめられ。たま／＼人なかへ出ても。かたすみ  
にかぐみ。物い／＼かはす人もなし。あらあさま  
しのわが身やと。おもはずして。思ひてかなは  
ぬ事をねがひ。苦をせむる事これみな三がいり  
んゑのたねとなりて。くるまの庭にめぐるがご  
とし。六道にまよひちごくよりちごくに入て。  
くるしびをうけ。つみをつくる轉のかなしさよ。  
おにといふもわがころから。ちごくといふも。  
八かん八ねつ。三づの大河。つるぎの山。して  
の山などいふも。こと／＼くわががうりきに  
てつくりなして。心のおにと身をせむる。ほし  
ひ。おしひ。いとしひ。かなしひ。がまんしや  
まん。とんよくしんがこりて。よにふかくと  
んぢやくして。みやうりみやうがにつのり。人  
によくいはれほめられ。いつとても人にまさり  
たきなどいふも。がうりき也。ちごくをつ

くり。くるしびをもとむる事にて御さ候。されば  
ほけきやうにも。三がいむあん。ゆによくわた  
く。しゆくじうまん。ぢんかふる。じやうし  
やうらうびやうし。くげんによせ。とうくは  
しねんふそくと。とかれ候。此もんのころ  
は。三がいのうちによすき事なし。ひの家の  
うちのみいろ／＼さま／＼くるしびの身なり。  
これをつねに御心得候べし。しやうじつ。し  
つ。やみつ。おひつ。かゝるくるしき事は。いつ  
までもさかんにしてやむ事なきよの中ぞといふ  
事を。ほとけもか様にもしへたまひて。にんげん  
は思ふ事のおもふやうに候はず。いのちありた  
きとおもへども。いとをしき人にもはなれ。に  
くき人にはそひすむまじきと思ふところにも  
すみ。すまずかなはぬ事あり。すこし程へだつれ  
ば。あひたき人にもあはず。見たきものも見  
られず。おやにさきだつ子もあり。子にさきだ  
つおやもあり。わかさをさきだて。おひたる

がのころもあり。かゝるさかさまの事のあるゆ  
へに。あらぬ思ひをする事も。此よにりんゑせ  
しゆへなり。なにかたのしび。なにか思ひのあ  
るべきぞ。けふはゑいぐわにほこりて。よにな  
びかぬさうもくもなき程の人とても。あすはほ  
るぶるならひにて。おちふれかなしびあり。けさ  
までははなやかに。いろかもふかくみだれがみ  
の。まゆずみにほひ。たぐひなきその人も。ゆ  
ふべには野邊のけぶりたちまちに。よりそふ  
人もとをさかり。ひとりかばねをさらす。たぐ  
／＼よのなかは。あさがほのはかなきわざにた  
わぶれて。けふやあすやとうちくれて。何かほ  
だいのたねならん。たぐ一すじにのちのよの。  
いとなみあるべし。此世はゆめのうち。とても  
かくてもすぎゆけば。うきもつらきもむなし  
く。たぐまほろしの身のうへに。こそやこと  
し。きのふやけふも。うつりかわれるよの中  
は。千とせ萬まんも。たぐ一すいのゆめのうち

には。よろこびさかへもあり。かなしびあめ山  
なす事もあれども。さめぬればあとかたちも  
なきもの。あら。なにとものうきよや。あら  
いたづら事どもや。あさましやと。よき事もあ  
しきもいらぬことわざかなと。ふつと思ひとり  
て。あふ人ごとくにうちわらひ。すこしもこゝろ  
に物をためず。ながれみづのながるゝごとく。  
ともかくも。あるにまかせて。むねにしばしも  
物をおもはず。けふやしなん。あすやしなんとお  
もひ給はゞ。物をたくわへてもなにせん。人に  
つらくあたりても。人がつらくあたるとも。よ  
もしらぬ身に。さぞあらばあれと。あくねんま  
うねんちこり。腹がたち心にかなはぬ事あれ  
共。よしゆめかうつゝが。わがよにあればこそ  
うらめしく。かゝる事もあれと。よくくくおも  
ひとり候はゞ。なにの思ふ事もなくなり。ゆ  
うくくこゝろやすく候はん。われも人もぐち  
には後世大事といへども。心ふかくあさまし思

ひいるゝ人は。まんにんに一人もなく候程に。  
かまひてくわすれ給ふまじく候。よもかりの  
よ。身もかりの身。すこしのあひだにむやく  
の事を思ひ。つみをつくり。りん多まうしうの  
ゑんぶのよに。二たびかへり給ふまじく候。さ  
きに申候ごとく。いろく様々しなこそかは  
れ。あしひ。ほしひ。いとをしひ。かなしひ。  
あつき。さむきとおもふが。みなわがこゝろに  
て候。こゝろといふものは。さらくたいなき  
ものにて候。それを思ひつゞくるほどに。しう  
しんとなりて。りん多する事にて候程に。ふつ  
とこゝろはなきものよ。心がちにともなりて身  
をせむるなれば。心こそあだのかたきよ。ぼん  
なふがちこりて。こゝろがつみを作り出して。  
かゝるくるしきくるしきをうくる事。ぼんぶな  
ればはらもたち。いつくしきものが。をしひほし  
ひとおもふ一ねんがちこるとも。二ねんをつが  
ず。水に糸をかくごとく。あらあさましやとは

らりと思ひきり。なに心なくむねんむさうにし  
てあはしまし候はゞ。それこそまことの御心に  
て候へ。いかに日々にねんぶつ申ても。こゝろ  
によも山の事を思ひ。あくねんまうねんこも  
るなれば。ぼとけにはとく候。こゝろにはな  
に事を思ふとも。くちにねんぶつさへ申せばほ  
とけになるといふ人は。それはあまりの事。こ  
ゝろはとてよくならぬ。申ねんぶつをたより  
にして。ぼとけのすくひ給はんとちかひにて。  
それをあやしく心得て。こゝろにはなに事をあ  
ふとも。ねんぶつさへ申さば。ぼとけになると  
ばかりすゝむる人は。じやけんにてあさましく  
候。おなじくは心をよくくまもり。むやく  
事をおもはざるこそ。まことのねんぶつにて  
候。系かうなどもたゞ何共なく。一切しゆじや  
う。われ人びやうどうく。一勺の水を大かい  
にいろれば。大かいの水となるごとく。すこし  
のせんもびやうどうと思ひ給ふべし。われとい

ふものも人といふものも。みなもととはひとつな  
り。さらにへだてなければ共。しやうせしよりこ  
のかた。めんくこゝろく。われと人と  
べちくありとおもひつゞけて。人はがまん  
をおこすとも。われはよかれ。人はわるかれと  
おもふにより。それががうりきとなり。ちごく  
にちち。六道をめぐり候。これをりん系と申  
候。まとのこゝろざしある人は。人のあしき事  
あらば。わが身のうへにうけてかなしみ。人の  
よき事あらばわが身にうけてよろこび。なに事  
もわれ人へだてなく。あしかれとおもはず。人  
をそしらす。ねたまず。にくげいはず。つらか  
らず。たよりなき人を。ことばのひとつもやわ  
らかに。おとなしやかにひきたてゝ。すこしの  
物もにあひくほどこして。人をたすくる心  
こそ。大じ大ひのきやうやうにて候へ。たとひ  
世上のならひなれば。何かとうちまされ。とや  
かくやうちくらし。又ひるがへして。あさまし

のなせるわざを。あらうらめしのよやと。ふつと思ひ入たまは。つみもたまらず。されはて。かならずしやうじをはなれたまふべし。病中の御きづかひは。此身はぢごく。地水火風のあつまりて。五躰六こんをつくりなせる物なれば。みなかりもの。あつめものにて。家などに竹はしらをあつめて作りなしたるがごとし。此身をつちと火と水とかせとがよりて作りて。こゝろがぬしとなりてぬれども。心なき物なれば。すがた見えず。かたちもなし。まして主さへなき程に。わが身といふものはなきものなり。此五躰六こんの身をうけたるによりて。あるひはぬつさにおかされ。あるひは寒におかされ。風におかされ。いろ／＼のものがおこりて。くるしひかなしき事。けしからずあれども。五躰の身をうけたるやくなれば。かゝるあさましき苦しき事をうくる事よ。二たび此身をうけじと思ひきりて。とても此身はすて物なれば。ねたくばね。

あきたくばあき。こゝろのまゝに身をもちくるしみ。すて物とよかく思ひきりて。わがこゝろにまかせられ候べし。いかなるちしき上人。そのかみ。しやか佛ぼどのによらいも。五躰に身をうけ給へば。やまひのくるしみ。しやうらうびやうくとて。なくては叶ぬ物にて候。りんじうなどの事も。こと／＼くしやべつはなきものにて候。つね／＼の御こゝろがけさへふかく候は。い。しなばしぬるまで。いさはいさるまでと。打まかせてあるがよく候。せんねんまんねんいきても。一たびはおひたるも。わかきも。しなてかなはぬものにて候。會者定離はにんげんのならひなれば。たれになごりかあしき。又此世にいますすこすみたき。あらかなしや。いましぬかよなど。は。かまひて／＼おぼしめすな。左様にもへばりんゑして。しやうじのうみにたゞよふものにて候。しぬる事ちかづくなれば。かならずさくらんしては。だんまつのくる

しみとて。五躰はなれ／＼になり候へば。いかほど苦がなふては叶はぬものなり。何とくるし候共。そのくるしびに打まかせて。しなばしぬるまでと。なに心もなく。ゆる／＼とおぼしめし給ふべし。くれ／＼此御こゝろもち。わすれ給ふまじく候也

### 二十 答平重衡書

附重衡奉 上人 書

我生武家。自幼少業弓馬。又狩山野殺禽獸。強氣日益而不成柔和。不知文學。而風月雪霜不囚心。萬物不察而無知事愁。空然而送年月。彌向今度之因。亂逆。囚敵歸罪而被渡洛都。是武士之乍。謂尋生前之耻辱不淺。自生而到今之間。夢中之遊而更無益。故未來之罪。輪迴之業不可盡。幸

時到。貴僧之近行李。故予求免後生罪之間。乞願教化者也。成慈悲功德善根。雖信佛道。難成佛者可。有故。立戒行深禁給也。然今如予者。無慈悲。無成善根。於戰場者多殺人。先名利。利今又當刃上死事。彌墮修羅事無疑。今悟未來過思之者。心體狂亂。及後嘆。是共。何之有益哉。一命者不省惜。只此來世之入罪事悲而已。如予者欲救未來事者。猿猴之如。臨月難絶及者。然一時之善心者。昨日之不。如惡謂而已。故責而者。發一毛之善心。救大過罪。拂安執之雲。詠清樓之月。免火宅之苦艱。常樂到蓮臺者。有難事之極也。予到今。事武勇。而徒送年月。然今此當罪過。發然而如醒夢。恐然而悔過事而已。今是一念起事者。相是罪可成。因緣也。若又今不相是罪者。定而不可起此



念。是以思自惡事。移善心。然何為可。何為不可也。唯何事。可成時也。予頃來雖重罪業。依之罪。請觀念世上。人生之煩惱難盡。譬雖極榮花。會難定。昨日者朝廷列座而合上意。事思。衣冠盡美麗。共爭威勢。雖連門前車馬。今日者又被為遠流。昨日者更不。如朝生而夕死。尋常是皆夢中之夢也。此理少者。雖似知。人欲之去。濁無到清淨。去忘念。忘執難決定。不到是處。濟不及處。可救給也。

予命既日有限。然是身此儘而死時者。忽墮地獄。三世之業。因何時盡哉。湛如來之本願。相合時者。惡業重雖。女人成佛說給教者。有難勸化也。如我等。愚癡蒙昧之淺間。鋪謂成罪人。定可給濟也。然予未安心決定之間。此旨細可示給。比來罪不知遁處。故有疑處。更不決定。

難去難止者。愛着之可成道。移色溺愛而

未厭離。已別妻別子之愁。深而本心暗。今已及未後。一定可難悟入。然問何與為覺。此念。可正。是迷也。

予為囚。不免刑罰。到後世。有耻辱名。事悔悲。胸中未安。彌妨心神。彼是其欲多而心中安無。問暇。是勞苦之自為。思者。早歸五體五行分散。而只是願極樂往生。片時有命。則却而積忘念。皆人遂可往命途者。去此火宅。早生淨土。改空名。可受尊名。

被行。是罪事。是先世之可成報。然又今生之罪報。未來流轉。而業因不可滅。嗚呼悲哉。罪業深身。與生何以報之也。是相思則身心驚亂。而暫安。歷萬劫。此業不可盡。朝夕長酒宴。遊行愛女色。暇日者好殺生。出山野。不辨理非。執人疎佛神。而不悲後生。是一而無免處。故責而者。年來之惡行。今爰散解而。其旨記而。上人誠之願者。乞未來救罪。

予在鎌倉時。不思議之夢。夢想。主君之有命。上洛則。東方有山。其邊結草庵。衆生濟渡。給貴上人在。然向我授法。倡運。夢既覺。然無遠處。不思議。因緣正上人。元來罪業可滅之入教。予雖惡人。如此有難見夢事者。祖佛不去給也。偏有賴。歡喜之淚不淺。今是知識之上人之時。不生者。不能知佛法。其罪彌可為極重。然幸是時合。貴上人之預濟渡。散疑亡重罪。極樂為往生事。是一世之不可有宿緣者。

有。何事如之哉。

予罪人為身而。上人不願尊意。捧素文事。雖無惡。依成罪人。欲助後生。予年來之惡行。惡心散解。而願勸化之慈悲。此度取失太事者。何時可生上品哉。然間不移時刻。上人予可解給惡業感者。恐惶敬白。

正月九日

平重衡花押

源空尊師

予命時量難之間。是嘆聞召給。淨土門安心之旨。可示給。如我等惡人。俄成佛之有教者。其一通尊筆。可示賜。雖不及反惡心。可歸念佛。今此疑惑心。而相果者。悲哉六道迷蒙。于萬劫。流轉而不可盡。偏濟渡之勸化者。上人之慈悲與心。此度之後生。可救給。尤淨土門之有難說法。難聽聞。未決定者。難成了解。今此罪業身。而直成佛得達之聽。干要者。彌難。

簡書用文之旨。命胸臆。而感淚灑袖。今是因罪未來。迷蒙愁嘆。尤為至極也。然年來之惡行。惡心。一有散解事。是則如來之相。合本願。仍。是其之罪皆亡滅也。譬惡逆有惡念。其旨悔懺散解。而忽翻惡心。一向賴如來。修念佛者。極樂為往生也。

生武家。臨戰場。伐人命。事是臣之忠也。譬又為獵漁家業。何無妨。然問今迄之忘念。有欲事。不可深悲。只是過去罪數。而悔悲更無益。自。

其悔者今日之信起。只可唱念佛。淨土門之教云者。何之無戒行。無雜行。恐礙蒙昧而不讀經釋。一度奉願如來者。更無疑事。唯報謝念佛申。他行不為。一向一心修念佛。是外更無事也。則皆西方極樂濟賜也。

今當刃死事。後生無覺束之事。必不可疑。譬者溺水入火當刃死共。一度奉願如來。一念本願相合。無不為成佛。又或者及末後不願如來。一偏之念佛不唱。既發起而只今願如來。往生者決定與相極而唱念佛者。今迄之諸惡業已滅而為成佛也。喻罪深為女人共。可濟賜之本願者。更無疑事。今此乍勸化聞。往生不定思。為疑則更不成佛者。然間先能可為決定也。如來之仍本願。心安遂。往生之有難與一向思入。動靜坐々不怠。念佛可唱。疑之有心已死則迷三惡道。流轉業因無盡事。故決定往生思。信心深而專修念佛。輩者。直極樂遂往生者也。

信實心歡法義。有難思者。是謂信心。故信心有則。無疑決定本願相合。不用戒行。不用他教。唯一念唱名即涅槃也。淨土門之法是外無教。

成佛者自力遠以者難成。皆是他力因方便成也。其以何者。或者見惡人有為發起者。觀無常有發起者。是皆他力也。汝今為因洛都。天一生之及末後。菩提心起者。是罪業却而成宿緣也。尚問愚老決其疑則。淨土之行者與成也。急極樂為往生也。是以可察。尤今因時罪被為刑罰事雖可。悲。然共是因緣免未來得安心。而年來之亡罪。被為成佛事。誠可有難信也。必不可悔悲。只何事及時節當來。是可為菩提之種。為汚名殘末世之事。不可痛。今汝之名者是武之尋也。伐敵囚敵事。是時因運也。強而是事。胸者。恐之到也。不可耻不可悲。少

後生之不成妨。善哉惡名者是空而。實不可求。今生者暫時之火宅者。被竊空事。自為未來之妨者。信之道可願也。只未來之成助者。無如念佛。去外物一心不亂。彌陀之名號而已唱誦。則眼前來迎在而。供往西方之淨土。

愛愁之事尤難厭離者也。是愛念強而欲離者却而彌思者也。然間只其儘相思而不可屈。或者愛子想妻者。人情者。下品下知之凡夫心。以何而離是也。強而欲離之其間者。日月相送而何無益。只妻子乍相作思。可修念佛。少度不有妨故。如來之本願者。恐痴惡業之濟賜女人謂也。况男子哉。

其世上之不定為。老茂若茂。皆我先。人也先立時之間之為煙果而已。誰一人茂無殘止者。位尊共不有願。富貴榮花茂不有久。朝生者夕者早空歸去。愛誰之墳墓。皆是我朋友也。是不常乍見乍聞。我命之不知短。朋友送野

邊。次又我送事不知。只子孫之見未事相思。甚凡夫之愚迷也。必世短不可惜。長不可羨。過千年更無別。無益身而自及老衰不短。如短。萬花得香雖美麗不有長。黃鳥出谷。歸去已早。杜鵑一聲茂不遇夏中。四壁之蟲之音茂不及寒冬。四時移反事者。天理之自然也。仍是慰心養氣。因不定有味。若又人情之長而不死。萬物無移反事者。何之無益無愁無悲無樂。日々我欲盛而剛敵相起。子殺親臣。君而鳥獸可同群。眼前無常之乍見衰。無知物哀。未來無悲事。皆地獄之耕種。察萬物之道理。可思菩提。人皆竊名利而忘其身也。願者早遁世而。只一心不亂修念佛。可離外相者也。是信心者云。然共是一切不可限。譬雖不發心。仕君仕父母。又勤家業。唯其儘修念佛。有信心者。尚彌是有難也。強而為法體。遁世。以不有謂可。發心而可人者可為發心。難為人者其儘俗體而可念。

何之有害也。若強而爲發心不遂終則却是破法。菩提之妨也。

仍時不運成囚人。別故鄉在異鄉。愁情幾重事理也。是我一人之愁不可思。世人皆是也。此苦艱之凡體早離而可到極樂。只是道義敷也。爲先爲後。皆一度者往道也。少度不可惜。

於鎌倉夢相之告有事。是則如來加護也。疎略不可思。未佛法入而有罪業悲賜。此度濟未後之太事思召賜也。然尙悔罪業欲改。未後之事彌可也。必只是不入戒業不入餘行。知惠才覺及不入。只唱念佛不可他思。

尙是往生者決定也思而不可疑。一度頼如來置上者。無不濟賜云事。爲其報謝只唱念佛。臨終可爲正念也。是外無勤事。無念事。唯如來本願之慈悲有難也。眞實歡喜而念佛不怠。此信心者也。一日片時共。信心者與成。

不可有油斷。念佛之因功力。罪業共滅之間。年來之事可心安。此度我等成佛也。眞頼母鋪思定而。至臨終者唱名不可怠。

既及臨終時者。向西方合掌而。一念彌陀唱名即涅槃之唱。文而後念佛十返可唱。命既終與否直極樂往生也。愚老歸依而淨土門之得安心事。是偏開宿緣也。此度是節相應而遂素懷事。誠有難可思也。淨土門之安心干要之旨書送之間。正是趣可相守。自是外更無他。必決定而可遂往生也。今愚老教化有疑則者往生者不定也。自始終至迄之教之旨。治心中無疑。決定而片時唱名不可有油斷者也。

正月十日 沙門 源空 花押

平重衡中將公 愚答 此の往復の書は百萬遍知恩寺の寶庫に在り。讀み難き文字少なからず

### 二十一 熊谷入道方へ狀の御返事

はるかかの程。わざと人を上給候。悦入候。さりながら事あたらしき御尋に候。淨土宗の肝心。此度かならずく往生し候事は。人によらず候。誰々も唯申せば助るとばかり心得て。世に類ひなき悪人なりとも。南無阿彌陀佛となへれば。一念にても決定往生をとげ候なり。此外に別に心得候へば。往生はしそこなひ候。又それのはらのあしき事。京にも御所中にも。かくれなく候。是非に御なをし候べく候。はらあしくとも往生は決定御遂げ候べく候。源空が一期の程は。中を違可申候。念佛がなま中なるとして。しばりたく事。經釋に見へず候。此度目出度なをし候よしにて。御音信候へ穴賢。又勢觀房へ書てさづけ候。金色の名號あまりほしさに。押てとらるよしうけ給候。是は罪がくるしか

らぬかの御尋承り候。たとひ罪にならずとも。他人のものをさへて取る法や候。其上大なる罪にて候。いそぎかへされ候。是も腹のあしきからある事にて候。志はあはれに候ほどに。名號出て參らせ候。つぎの歌は。眞如堂の如來よりさづけ給ひ候歌にて候。金色にしたく候へども。いそぐ便宜にて候程に。墨のまゝ參せ候。京と國と程遠く候ほどに。しるべに。判を加へて參らせ候。惡筆にて人の見候處もはかりながら。師弟の契約にて候へば。かつうは形見に候穴賢。

建永二年正月朔日 源空 熊谷入道殿

尙申候。金色の名號は。勢觀房舍兄の臨終に。光明感じ候とて。なをさら秘藏候。かべに書て授くべきよし申候へども。瑞光が候しほどに。元のをこひてとむ候。ひらにかへされ候へ。たのみ申入候。くれぐれ短氣なる事しかるべか

らず候。穴賢く。

これは真如堂縁起に出たり。遠州のある寺に其真蹟を蔵すと。

### 二十三 和歌

五〇四

しめのうちに月はれぬれば夏の夜も

あさをそこむるあけのたまかさ

いかにしてわれ極樂にむまれまし

彌陀のちかひのなき世なりせば

以上拾遺古縁起に出づ

和くる神の光の影みちて

秋にかはらぬみしか夜の月

我が祈る日吉の神よかひあらは

思のことにさはりあらずな

以上十卷傳に出づ

て後我身にそへるたからには

南無阿彌陀佛にしくものはなし

吉水法語集に出づ。この外安心用意集。念佛明要抄。正源明義抄等に数首の和歌を出せるも極めてあやしげなるゆへに之をのせず。

### 二十二 御兩親の位牌の下

#### に題せる御辭

雖一日他生縁。恩愛難止謂。尙親子者三世宿縁如輪迴之故。舍利弗者排兩親父母惠達。下品尼屈者爲六親一挑一燈。我又爲報謝。父時國西光。母妙海記位拜。則爰修入。是雖他國往不離身。念佛廻向不念。是則自行化他可成眞實信心。悉皆成佛不可疑。敬白。

承安三癸巳曆三月十五日 源 空

これは百萬遍知恩寺に蔵する什寶なり。中央に南無阿彌陀佛と書し。其の左右に兩親の法號及逝去の年月を記し。下にこの辭を題せり。

### 跋

昨秋以來法然上人全集を纂修するに當りて、努めて大師上人の著作及説話等を蒐集網羅せんと欲し、料を諸方に搜索して其の眞偽を考へ異同を按して、漸く之を繕梓するとを得たり。本文の中輯を分つと八項を立つると都て八十九あり、附録を二種に分つ、第一は則上人の紀傳にして三篇あり、第二は則眞偽未詳の書を列ねたるものにして、二十三篇を收む。案ずるに上人の著作なるものは、長西錄に記する所によれば八部あり、即無量壽經釋一卷、觀無量壽經釋一卷、阿彌陀經釋一卷、阿彌陀經懺法一卷、往生要集料簡一卷、淨土初學鈔一卷、選擇念佛集一卷、淨土五祖傳一卷、これなり。此録は上人の弟子覺明房長西の撰述せる所に於て、時代尤も初に在るが故に乃信憑するに足るべし。但し其の中に於て餘の七部は收めて本集に在り、ひとり阿彌陀經懺法のみは之を求索すれども未だ獲ると能はず、語燈錄にも之を編せず。景耀の眞宗教典志に此書未だ檢せずといへり、或は既に亡逸せるか、甚だ惜むべきなり。上人の入滅を距る六十二年にして、即文永十一年十二月望西樓了惠、漢語燈錄十卷並に拾遺二卷を纂録し、翌十二年正月又和語燈錄五卷並に拾遺三卷を纂輯して以

て上人一代の言教を結集せり。此の兩錄十八卷の中には漢和二語にわかれて、上人の著作は勿論、書牘、説話の類に至るまで殆ど網羅して餘す所なし。當時若し此の纂輯なかりせば、大半の遺文は恐くは散佚して、末代の明燈空しく其の傳を失ひしならん。望西樓の功尤も偉なるものありと謂はざるを得ず。漢語燈錄に收むる所は總て十七章あり。所謂大經釋第一、觀經釋第二、小經釋第三、如法書寫法則第四、如法念佛法則第五、選擇集第六世に別行するが故に唯標せず往生要集大綱第七、同略料簡第八、同詮要第九、逆修説法第十、淨土五祖傳第十一、善導十德第十二、略要文第十三、初學鈔第十四、諸遺誠文第十五、これに三通あり、没後遺誠文、七箇條起請文、送山門起請文なり。遺北越書第十六、諸方答書第十七、これに二通あり、一は答兵部卿基親書、二は答空阿彌陀佛書是なり。漢語拾遺錄には三章五文あり、即三昧發得記第一、夢感聖相記を附す。淨土隨聞記第二、これに臨終祥瑞記を附す。答博陸問書第三即答九條是なり然るに此の中に於て如法念佛法則は唯標目ありて其の文なし。如何にして此の一章を脱せるか。若くは如法書寫法則と殊なる所なかりしに由るか。今之を獲るべからざるが故に、闕て本集の中に收むると能はず。又淨土隨聞記は勢觀房源智の記する所にして、乃上人の著作にあらざるが故に之を省く。但だ其の内上人の法語にかゝ

るものは皆これを本集に採録せり。又和語燈錄には、すべて二十四章あり。三部經釋第一、御誓言書第二即一教起請文往生大要鈔第三、念佛往生要義抄第四即念佛往生要義問答三心義第五、七箇條の起請文第六即念佛行念佛大意第七、淨土宗略抄第八、九條殿下の北政所へ進ずる御返事第九、鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事第十、要義問答第十一、大胡太郎實秀へつかはす御返事第十二、同妻室のもとへつかはす御返事第十三、熊谷入道へつかはす御返事第十四、津戸三郎入道へつかはす御返事第十五、黒田の聖人へつかはす御文第十六、越中の國光明房へつかはす御返事第十七、正如房へつかはす御文第十八、禪勝房に示す御詞第十九、十二問答第二十、十二箇條問答第二十一、百四十五箇條問答第二十二、上人と明遍との問答第二十三、諸人傳説の詞第二十四、附御歌是なり。又和語拾遺錄に八章あり、即登山狀第一、示或人詞第二、津戸三郎へつかはす御返事第三、是に三通あり、示或女房法語第四、念佛往生義第五、東大寺十問答第六、御消息第七、往生淨土用心第八、是なり。第七の御消息に四通あり、一は唯御消息と題す、二はある人のもとへつかはす御消息、三は熊谷の入道へつかはす御返事、四はある時の御返事なり。此の中、便宜に隨て其の標目を改めたるものありと雖も、而かも悉く類聚して之を本集に収録し、一も遺すところあるなし。

蓋し和語燈錄並に拾遺七卷は其の後跋に記する如く元亨元年七月に初めて開版せり。即文永十二年におくる、四十六年なり。當時了惠すてに七十九歳の老齡に達し、開版の舉を見て深く感歎の詞を述べ、後寛永二十年再び之を上梓す、即雙字の本是なり。今現に世に在り、次て正徳元年十二月、義山改めて此書を印刷す、其の原本は武州金澤稱名寺文庫に藏したるものなり。原本の奥書には、  
和字語燈錄全部七卷、了慧上人所撰集刊行也。予以建武五年仲春與去冬自所按正漢字燈錄草本、同藏武州金澤稱名寺文庫者也。 下總州鑄木光明寺良求  
これに依りて見るに、光明寺良求は建武五年二月、望西樓了惠の撰集刊行せし和字の語燈錄七卷を取て、之を金澤文庫に藏したることを知るなり。然るに了惠の刊行せし所といふは、即元亨開版の本を指すと明かなれば、正徳本は全く元亨の古本を再梓したるものにして、尤も依憑するに足るものと謂ふべし。之を寛永本に比較するに稍差違あり、乃年久うして魚魯の誤を生じたることを知るなり。今本集は専ら正徳本によりて之を載録せり。庶幾くは長夜の大明燈たるを得んか。又漢語燈錄十卷並に拾遺一卷は光明寺良求、建武四年十二月を以て亦之を寫して金澤文庫に藏す、其の記に云く

建武四年七月、得了慧上人所集語燈錄、紳本十八卷、從其初冬至臘月廿五日、與同門老宿四五輩治定之畢、更寫一本藏武州金澤稱名寺文庫者也。 下總州鑄木光明寺良求

これ原本の奥に書するものなり。上の和語燈錄の奥書には了慧上人の撰集刊行する所云云といひ、今この記には紳本十八卷和漢兩錄の紳本云云といふを以て見れば、當時和字の本は刊行せられたりと雖も、漢字の本は未だ鏤刻せられざりしとを知るべし。然れども既に了慧の紳本を得て之を治定したりといへば、此の金澤藏本の漢語燈錄も亦極めて貴重なるものと謂はざるを得ず。後寛永の初に及て白曇至心、豆州藥王山寺に於て適、金澤文庫の藏本を得、因て義山をして對校訂正して以て之を世に出さしめき、是れ即漢語燈錄印行の初なり。至心の記に云く

開祖大師一代法語有和者有漢者、多是門人之所記也。望西樓師嘗集之大成、名曰語燈錄、其和者已刊行矣。其漢者則未也。予曾把各二三本讀之、魚魯倒置、遺字闕脫、往々有之。又背馳大師尋常法語、而卒盾宗義者、間亦有之。予快々措卷默々思付、疑雲未披、陰晦度日、既而自搜枯腸、記得往事。豆州藥王山寺有武州金澤藏本、昔時遊歷之夫所親見也。於是遣弟子某往彼請之、良願不違、不日齋來、予欣然披卷展覽、一過、曾所疑者

果然掃迹。而從來陰晦一時歸晴矣。不亦快乎。想是背宗之徒欲遂邪僻之情。僞誣安頓無根之語。於茲以爲濫托之所據者必也。因使義山法師就彼善本對校訂正去瑕批遺全璧焉。按成藏之當山書室。庶幾綿代不墜地矣。予日已西矣。先欲玉其於成。其以屬刻則亦有日也乎。寶永二乙酉三月十有一日。知恩院四十二世白譽至心記。

之に依て見るに寶永以前すでに漢語燈錄の傳寫數本ありしといへども。謄寫訛脱多く。加之他門の徒擅に文字を改竄して自立の義に雷同せしめたるを以て。薰蕕良に辨じ難きものあり。至心乃之を慨し遠く金澤藏本を索め得て。新たに之を割闢に附し。以て從來所傳の紕繆を匡正したるを知るなり。然るに眞宗教典志に依るに漢語燈錄に新古二本あり。古本は寫傳して京都小川西福寺に在り如何存否傳持の由序は往生要集釋卷尾に記する如し。新本は寶永二年白譽至心其の徒義山をして之を按刻せしむ。刪補縱橫殆ど舊制を失す。古本及諸舊籍に載する諸文を以て之を對檢するに。損益する所知るべきなり云云。蓋し教典志の作者は疑を金澤藏本に懷き之を以て虛構にして。至心及義山が古本を刪補改易せし口實に過ぎずとなして。屬言の言を加へたるものなりと雖も。これ甚だ非なり。何となれば此等は事實問題にして。宗論の問題となすべからざればなり。若し藥王山寺に藏せりといへる古本が、

果して金澤藏本にあらずとせんか。何を其の事實を指摘して之が辯駁を試みざる。己れの宗義に合せるものは皆取りて之を眞とし。合せざるものは捨てし之を贗とするが如きは。宗見を先として事實の存否を判断せんとする者なり。危險豈に之より甚きものあるべけんや。且夫れ其の所謂西福寺古本なる者果して幾許の價値を有すべきや。傳持の由序は彼れが安永七年六月に梓行せし往生要集釋卷尾に記すといふを以て。之を索めたるも獲ると能はず。但南條文雄氏の藏書に就きて適々寫本漢語燈錄一卷神興之を得。之を披見するに中に往生要集釋同略料簡同。料簡及同詮要の四篇を收じ。之を寶永本に比較するに篇目章段同からざるのみならず。其の内の略料簡及料簡の二篇は闕て之れ無し。因て今轉寫して之を眞僞未詳の中に採録せり。想ふに此の寫本は西福寺本の謄寫にして。景耀の所謂往生要集釋は即これならん。而して彼れは此の本の少しく寶永本に異なる所あるを奇とし。之を梓行して世人をして至心等の言ふ所に疑を懷かしめんと努めたるものならん。然れども教典志に記する所によりて察するに。其の西福寺本と寶永本とは。略料簡及料簡の二篇を有すると否とを以て大差となすものにして。其の以外は唯字句の少異あるに過ぎざるが如し。若し然れば景耀の所謂古本なるものは。至心の記に言ふ所の魚

魯倒置の古寫本ならん。且夫れ畧料簡及料簡の二篇に就いて試に熟讀するに、唯少異あるのみにして、大旨全く相同じ。是の故に本集の中には唯略料簡一篇を収録して、料簡は之をかゝげず。況や略料簡といへども其の文旨は悉く寶永本中の往生要集釋義の内に之を含有せるに於て、ちや、たとひ又西福寺本は果して一顧の價値あるものとするも、之に依りて金澤本を貶抑せんとするは、乃宗見の骨張に出づるが爲にして、固陋も亦甚しと謂はざるべからざるなり。

又世に西方指南鈔と題する書六卷あり、上人の法語及消息等を滿載す。各卷の奥書に康元元年各卷月日愚禿親鸞八十四歳にして之を寫すとあり。此の書若し眞ならば了惠に先だつ凡そ二十年にして、親鸞は大師上人の遺文を輯録せるものと謂はざるを得ず。然るに其序に記する所に依るに、此書は寛文の初、京都五條に於て始めて鏤刻せしものにして、實に四百餘年間隱没して曾て世に出てざりし所なり。是れ既に怪となすに足るべし。次で天和三年勢州高田齊賢、同地堅松院に於て親鸞眞筆の寫を得、因て前刻を再治し之を世に行ふといふといへども、所謂親鸞の眞筆甚だ疑ふべし。法輪集、二十四輩記等には甲州萬福寺にその眞跡を藏すと記せり。由來古徳の眞蹟と稱するもの、到る處是れ多し。若し眉に唾して之を讀まざれば、恐くは人

の笑を招かん。眞宗の學者率ね此の書を信せず。唯法要義概、先啓目錄等之を眞傳の部に編するのみ。仍是今其の内容を見るに、初に法然聖人御說法事上下二篇は、即漢語燈錄の逆修說法と大同少異にして、字句互に詳略あり。逆修說法の末尾に了惠自ら記して云く、此錄二本あり一は眞字即漢一は假字即和なり。未だ何れか正なるを知らず。今且く眞字の本に就て之を集むと思ふに、此の鈔の御說法事は即和語なり。或は是れ了惠の所謂假字の本か。是非知るべからず。故に今收めて之を附録第二に置く。次に建久九年記は即三昧發得記なり。御夢想記は夢感聖相記なり。たゞ漢和其の字を異にするが故に、用語稍同からざるのみ。次に法語十八條あり、その中語燈錄、勅修御傳等に出さるるものは、之を一括して眞偽未詳の中に編す。次に法然聖人臨終行儀は了惠の臨終祥瑞記、及勅修御傳の諸人感夢の記載等に相似て、而して文は頗る廣し。但上人の所述にあらざるが故に之を載せず。次は七箇條起請文、次の葬家追善事は没後遺誠文の一節。次の源空上人私日記は畧して上人一代の行徳を記す。然れども本傳にあらざるが故に固より之を録せず。次に三機分別は語燈錄等に之れなし。故に收めて附録第二に在り。次は鎌倉二位の禪尼に答ふる書、次の四箇條問答は語燈錄、勅修御傳等にも之をかゝげず。故に今取て眞偽未詳の中に載す。次は大



胡實秀の妻に答ふる書、次は同實秀に答ふる書、次は正如房に、遺はす書、次は越中の國光明房に遺はす書、次は平基親に答ふる書なり。但し後の二文は字句稍語燈錄に同からず、恐くは親鸞の末徒之を改竄したるものならん。次は十二問答、但し最後の一條を闕くが故に唯十一箇問答あり。次は淨土宗大意、次は四種往生事、此の二章は語燈錄並に勅修御傳等に之れ無きを以て、寫して之を眞僞未詳錄に編す。次は黒田の聖人に遺はす書、次は念佛大意、次は九條の北政所に答ふる書、次は熊谷入道に遺はす書、次は要義問答、次は津戸三郎に答ふる書なり。凡そ二十五章、大抵語燈錄等に出だす所と相同じ。眞宗教典志に云く、或は疑ふ此鈔宗祖即親の手に出るに非ずと、今謂く編者の眞僞敢て之を論ぜず、所編の法語は實に是れ吉木の遺文、錄せざるべからずと。是れ亦一種の所見なり。惟ふに此の書は中世眞宗の教徒、名を親鸞に藉りて以て上人の遺文を輯録し、間亦私語を加へて以て自家所立の張本となせるものならん。然れども沙中自ら金あり、遊化彌弘くして何の處に遺言を留むべきや、固より測るべからず。故に今悉く採收して之を本集の後に附するものなり。凡そ此の集の本文に錄する所は、主として漢和兩語燈錄に依りて之を類聚せるものなり。上人の遺文は了惠の手によりて實に今日に傳ふるを得たるものと謂はざ

るべからず。其の傳持の由來は略して上に述ぶる所の如し。但中に於て選擇集は上人の在世既に之を鏤刻して世に別行したるが故に、漢語燈錄にも唯其の標目のみ掲げて本文を錄せず。因て今少しく此の書に就て記すべし。選擇集は建久九年春、藤原兼實公の命によりて選進する所なり。然るに當時誹謗の者をして徒らに紛諍を生ぜしめんとを懼れたるが故に、滅後の流通を期して現前の披露を許さずといへども、建永二年上人遠流の科に處せられて、久しく洛下の往還を得ざりしを以て、門弟等轉た落莫の感に堪へず、遂に建曆元年選擇集上梓の舉を企て、先づ平基親をして序を製せしむ。其辭に云く、決疑鈔凡例に云く、平氏序文諸本同からず、文に増減本に載する所による。

夫以專稱南謨之教門者、直至西刹之要路也。不但釋迦金口之宣、亦爲彌陀素意之願。二日三日執持名號之證、諸佛舒舌十聲一聲必得往生之義。衆生銘肝、爰吾大師空和尚。有一軸文集之書、號選擇本願念佛集。誠是渡苦海之通津、亦爲照長夜之靈光。人無三學橫截、四流弘願。密意斯彰、佛以一行普濟萬機。大悲本懷、方暢隨犯隨懺之行。雖非我分、易修易往之法。須仰他力、不入此門、安到彼岸。我等何幸、遇斯靈典。萬劫一聞、專惜身命。雖然秘密壇行人可闕之、定慧優備、疑即身之觀也。大小乘學者難操之、戒聞精進

愛隨心之法也。惟於願生念佛之衆生者。道俗貴賤誰不歸者。喜哉。天祐神護。濁世之法。酒。否命早通時哉。君威臣悅。淨土之宗教。嘉運大啓。因茲雖知埋壁之誠。還貽彫版之印。於戲。玄元聖祖五千言。令尹早著上下之典。選擇本願十六章。門徒將得摺寫之益。思德之志。古今惟同者歟。于時辛未之歲。建子之月。聊勸意樹。遙傳來葉。云爾。

辛未の歳は建曆元年にして、建子の月は即十一月なり。而して此序は其の下句に成れりといへば、上人恩免を蒙りて歸洛せられたる後、平氏之を悦て乃執筆したるものならん。良榮の決疑鈔見聞に云く、此序並に奥書の意を案ずるに、大師御在生の時、御弟子等修飾刊行の願を大師に呈し、又基親をして其の願末を序せしむ。時に建曆元年辛未十一月なり。明年壬申正月廿五日、大師入滅す。門弟戀慕の思に住し、且報恩の爲め、且流布の爲に、同年九月八日、刻彫の功終ると。又商量鈔に云く、建曆第三壬申源空上人遷化の年、越後法橋なる者、白川法蓮、房信空に謁して互に相議して云く、聖人の在世、壁に埋むの誠ありと雖も、没後の今は此の選擇集を以て上人の在世と仰くべきなり。冀くは彫版の印を開て書寫の勞を助け、普く四海に施さんと。即建曆二年九月八日、板本を出だし、始めて基親の序を載すと。之に依るに、開版は没後方めて之を企たるが如きも、基親の序は其の前年に在れば、良榮の言ふが如く、上人在世の

日、門弟等既にその願を發せるものならん。案ずるに、選擇集の原本と稱する者多種あり。決疑鈔に記する所に依るに、選擇集の本に廣畧あり。略は則高覽の本公に附なり。有る遺弟云く、廣本は執筆の人、初心の者の爲に後に名目を加ふ、自ら少異あり。高覽の本には如かず云々。而して記主良忠の稟承せし所は、即其の高覽の本なりと。又商量鈔に云く、此集廣略兩本あり。有云く、略本は今師の撰述、廣本は真觀房加筆。又有云く、廣本は今師最初の艸書、略本は添削の正本なりと。又元祿開版の選擇集奥書に依るに、此集四本あり。第一は稿本、始章に三經の説時を論ずる者は也。第二は刪本、初め殿下に呈し、及聖光に授くる者即高本是なり。第三は正本、末後修飾刊行し、平氏序を作る者はなり。第四は廣本、門人その文を増證する者はなり。初後の二本は世に行はれず、傳刻する所は第二第三のみ。而かも第三は修飾刊行皆祖意に出るが故に、是を正本となす云々。正本とは即建曆開版の本を指すなり。蓋し高覽本と建曆本とは字句少しく差違あり。三輩章の初の無量壽經下云の六字、高覽本に之れ無きが如き。其の例なり。決疑鈔三輩章釋の下に、若し餘篇に準せば、無量壽經下云といふべし。無きは略なり。故に建曆二年開版の摺本には此の言ありと。蓋し建曆本は上にいふが如く、大師の滅後久からずして刊行せられたりと雖も、後十五年を経て忽

ち絶板の厄に遭へり。即是れ山門の惡徒、大谷の墳墓を破却せし年にして、念佛の障難この時を以て尤も甚しとなすなり。和事始に元久三年山門奏請して、選擇集の板を焼却せんとすといふは信ずるに足らず。元久恐くは嘉祿の誤ならん、それより十二年を経て、延應元年再び此集を上梓す。所謂高覽本印行の初にして、延應本と稱する者即是なり。此の本の奥書にいはいはく

延應第一之曆、沽洗第六之天、按根源正本、直展轉錯謬、即寫印字、用令流布矣。

根源の正本と按し展轉錯謬を直すといふは、所謂稿本並に高覽本と對校して、諸人傳寫の錯謬を匡すといふの意ならん。惟ふに當時建曆の印板既に焚燒せられたりと雖も、其の本猶無きにあらず。然るに今之を棄て、而かも彼の高覽本を印行したる所以は、恐くは義山の曰ふが如く、建曆本を疑ふて、以て門人の手に出づるかと思し、に由れるならん。又權邪輪の註に有人の説を擧げて、此の書即建曆本更に上人の製作にあらず、是れ門弟の選する所なり云云。又有人の説をあげて、上人深智ありと雖も、文章に善からず、仍て自製の書記なし云云とあり。權邪輪は梅尾高辨の著はす所にして、其卷尾に建曆二年十一月二十三日草之了と記するを以て見れば、早き時代より建曆本を批議して、以て門人の所撰と疑ひし者あるを知るべし。然れども

前にもいふが如く、平氏の序は建曆元年に在り。若し然れば建曆本は假令門弟等之を修飾刊行すといへども、而かも良策が言ふ如く、必ずや生前大師の首肯を得て、之を滅後に印行せしものならずばあらず。是の故に尙建曆本を以て正本となすに足るべし。建長以降延應本を刊行する者相紹ぎ、此の本獨り世に流行せり。義山之を慨し、白譽至心に謀りて、元祿九年正月を以て再び建曆本を上梓し、爾後今日に及て専ら此本を用ゆ。今本集に收むる所は即此の元祿開版の本に據るなり。又近代華頂山徹定の撰せる祖蹟跋文に、選擇集の古本に關する一の記文あり、有益の文字なれば左に之を掲げん

宗祖大師眞蹟選擇集有二本。一在大和當麻往生院。一在京都寺街廬山寺。其廬山寺本、蓋艸本而艸行相半、書體不一。又所呈月輪兼實公本今尙在九條殿砂今茲甲申二月、余獲觀往生院本。楷字兼行、筆法秀潤、眞美本也。卷尾有元久元年十一月廿八日書寫了、願以此功德往生一佛土而已、廿有五字。又有元久元年十二月廿七日源空十二字。其下書花押。蓋附訓點時款識歟。傳云此卷我華頂山齋藏也。文中誓阿普觀上人退隱時、徒收該院云。今熟閱卷中字體、撰擇作撰擇、南作南、解微作、辭微、菩薩作菩薩、醜翻作醜、雖作雅、壽作壽、光作光、尊作尊、局作局、攝作攝、顯作顯、溺作溺、血脈作血脈、對

作對唐作肩寂作癸後作癸等作寺戒作或東作東僕作隸之類咸可以證古文字之態  
 裁也又至假字ノ作ウシ作之テ作チホ作ロキ作ヘマ作丁メ作ノ而脈漸愧歸豎厭  
 之類是古假字古音轉也然而世之贗于古字者或抱疑不能審定新古之區別亦可笑  
 耳嗚呼如此卷真字内無比鴻寶可想見大師開宗之大勳也矣所行于世延應板寬永  
 板咸據于此本惜乎書體較異大失古色焉院主德定和尚徵余跋因書鄙見以附卷尾  
 明治十七年三月上浣 大教正華頂山順徹定和南

往生院本及廬山寺本の二本は、義山の所謂稿本か、或は高覽本の舛本か、往生院本の  
 卷尾に元久元年云々の文字あり、元久元年は建久九年に後る、六年なれば此の時  
 再び稿本を淨寫すべからざるが故に、定て此本は高覽本の舛本なるべき歟、因て想  
 ふ、覺如の拾遺古德傳に、選擇集の撰述を元久元年となせるものは、此の往生院本の  
 淨寫の年月を過まりて、以て撰述の年となせるものなることを、又此の記文の註に、  
 月輪兼實公に呈する所の本は假字にして、今尙九條殿砂村文庫に在りといへり、未  
 だ拜見するに及ばざるが故に、之を詳にする能はざれども、或は是れ最古の本なる  
 やも知るべからざるを覺ふ、何となれば正源明義抄に、建久八年初冬、上人先づ假名  
 書の文を製して、之を月輪殿に進ずるに、真名に改めんとを請はれたるによりて、聖

九年正月清書して一本を月輪殿に贈られたることを記せり、此の書輒く信ずべから  
 ずといへども、而かも今の記文と合せ勘ふる時は、或は一分の眞を傳へたるやも知  
 るべからざればなり、果して然らば此の假字本は、義山の所謂四本の外となすか、若  
 くは其の所謂稿本か。

上人の滅後に迄て門弟等の中に、上人一代の行徳及勸化の法語説話等を記述せる  
 もの甚だ多し、所謂二祖聖光の徹選擇集、授手印、淨土宗要集宗要四、念佛三心要集、念佛  
 名義集、念佛往生修行門、勢觀房源智の淨土隨聞記、聖覺の上人傳門記十六、三祖良忠の  
 決疑鈔、淨土宗要集宗要東、決答授手印疑問鈔、傳通記、了惠の臨終祥瑞記、聖光上人傳、及  
 進行集、念佛問答集、物語集、二十八問答、白川消息、閑亭後世物語、並に舜昌の法然上人  
 行狀畫圖御勅修、法然上人傳記卷即九等是なり、是等の著書は上人の眞髓を傳へたる  
 直弟、若くは其の相承を稟けたる門流の師に成れるものにして、其の記する所は深  
 く信憑するに足れり、因て遍ねく之を涉獵して、その中に出づる法語及説話等は悉  
 く之を本集に収録せり、唯時月の切迫の爲に、其餘の諸書を通覽すると能はず、遺  
 漏定めて多からん、希くは他日の補正を待つのみ、中に就て進行集以下數部は作者  
 の名を詳にせず、又多く其の書を獲ず、和語燈錄、日講私記義山の註に、進行集は未だ

得ず、後人の考を待つと。此書恐くは法蓮房信空の撰する所ならん。念佛問答集亦未だ獲る能はず。されど其内禪勝房との問答を記するより見れば、或は彼れの所集か。又日講私記に、物語集とは定て鎮西の物語集をいふならん。了曉の授手印問書に、其師西譽嘗て築紫物語集の事を云云せしを記するより見れば、西譽の當時尙此集在りしならんと云云。若し然れば此の集は鎮西聖光の撰か、或は其の門弟の集か、二十八問答亦何の書といふとを知らず。たゞ其の中俊乘房重源と上人との問答を載すれば、恐くは重源の筆録ならん。白川消息は亦信空の記する所、彼れは洛東、白川の邊に住して、世に白川の法蓮房と稱せられたり。閑亭後世物語は現に世に傳ふ、和語燈錄に閑亭問答集といふものは是なり。此の書古より隆寛の作と傳ふれども、今之を閱するに、處々に隆寛の語を引載すれば、定て其の所述にあらず。恐くは門人の出だす所ならん。此の一書を除く外の數部は、其の本を得べからざるが故に、今姑く和語燈錄に出だす所を轉載するに過ぎず。

上人の傳記として最も古きものは聖覺の上人傳なり。此書安貞元年五月の所撰にして、上人の滅後十五年を経たり。全篇十六門を立つ、故に世に號して十六門記と云ふ。延寶四年之を印行す。又收めて續群書類從に在り。本集の附録第一に載する所是

なり。但坊本標して黒谷源空上人傳といふも、古本には唯上人傳とあり、今之に従ふ。勢觀房の淨土隨聞記の中に亦上人の行狀を録せりと雖も、此の書は法語を記載するを要となすが故に、一代の記事に及ばず。法然上人秘傳鈔は隆寛の所編といへど、信ずるに足らず。又勅修御傳に弘長二年の比、法蓮房の弟子或は隆寛の弟子といふ敬西房關東下向の時、上人の傳を西明寺時頼に進じたとを記せり。良榮の決疑鈔見聞に、黒谷上人傳敬西作也とあり。敬西名は信瑞、世に信瑞の一卷傳と稱するものは是なり。然れども此書今逸せるか、之を獲ると能はず。漢語燈錄の中に臨終祥瑞記一篇あり、了惠の撰する所なり。唯限りて上人臨終の一段を叙するものなりと雖も、文字謹嚴にして事實正確、良に貴ぶべきが故に之を本集の後に附す。徳治の初、叡山功德院舜昌、後伏見上皇の勅を蒙りて上人一代の芳蹟を網羅し、本傳を編修す。名けて法然上人行狀畫圖と云ふ。又勅命によりて撰集せる所なるが故に、世に稱して勅修御傳と號す。四十八卷に別ち、二百三十七段を立つ、行狀の詳悉にして文章の優美なると諸傳に比類なく、安心起行の要義、念佛往生の靈驗、玉をつらね鏡を懸く、是れ即上人一期の紀傳なりといへども、亦大師の遺教剩す所なく、之を載録せり。語燈錄の編集に後るゝ凡そ三十年なるを以て、彼れに收むる所殆ど此に漏るゝものなく、加之治ねく舊

傳舊記を涉獵して、信ずべきものは之を取り、疑ふべきものは之を捨て、力を極め  
歳を閲みして總修したるが故に、紀傳としては勿論、遺教としても亦本傳を以て其  
の準となすを得べし。稿成りて之を奏進するや、上皇御威斜ならず、乃宸筆を染めて  
其の一二三七八の五卷を清寫し、後二條帝亦隨喜して、十四十五廿二廿五廿六卅三  
卅四卅五卅六卅七卅八卅九及び四十二の十三卷を書寫し、伏見法皇も亦第四十の  
一卷を映寫せらる。その餘は皆當時貴顯の筆なり。本集の卷頭にかゝぐるものは、第  
一卷初段後伏見上皇の宸翰、第四十卷第二段伏見法皇の宸翰、第廿五卷第二段後二  
條帝の宸翰なり。豈に前代未聞の盛事といはざるを得んや。今其の正本此傳に正本  
一本を上にいふが如し、副本は後伏見上皇御威斜を恐れて、更には京都知恩院に襲藏し、  
一本を製せられたるものなり、今當麻呂生院の寶藏に納むは京都知恩院に襲藏し、  
現に海内の重寶たり。因て之を複寫して其の全文を附録第一に載す。中に於て上人  
の法語、消息、説話等の、若し語燈錄等に出さざるものは、亦悉く類聚して之を本文の  
内に収録せり。又法然上人傳記は世に轉寫して之を傳ふ。凡て九卷あるが故に、人呼  
て九卷傳と稱す。一卷を上下に開いて十八冊となし、一百七段を分つ。叙説の起盡、文  
章用語、太抵勅修御傳に同く、唯少し略せるのみ。卷頭の序文此書序文二通あり、を始  
め、文中の記事に至て字句全く異ならざるもの多し、此の書作者の名を出さざれど

も、定めて是れ舜昌の作る所にして、勅修御傳の艸本ならん。序に今上人の遷化既に  
一百歳に及ぶの語あり、然るに建曆二年より徳治の初に至るまで、凡そ九十四五年  
あり。若し然れば、勅修御傳編集の年と殆ど相隣る。同時に別人ありて殆ど同文を作  
りて同一人を傳せんとは、恐くは世にあるべからざらん。且夫れ此の書の末尾に記  
する如く、本を九卷に別つとは、九品の淨業にあてんが爲なり。されば開いて十八冊  
となせるとは、十八願に擬せんと欲してなるべし。然るに勅修御傳は四十八卷あり、  
是れ豈に四十八願を表示するものに非ずや。西行の撰集抄に、卷は九品の淨土に思  
ひあて、十に一を殘し、事は八十隨好に思ひよそへて、百に二十を洩せりといへり。  
古より此の類の托事少なからず。今も亦即稿本を九品十八願に表し、献本を四十八  
願に托したるものならざるか。加之義山の行狀翼贊序に、初め舜昌諸家の舊記を編  
攬して編して一套となし、畫圖を附入す。述作既に成て櫃に韞めて自ら之を珍とす。  
後恭く後伏見上皇の勅を承けて之を奏進す云云とあり。想ふに此の櫃に韞める原  
本なるものは、即今の九卷傳にあらざるなきか。然るに義山は、此書の第九に永延よ  
り以來嘉祿に至るまで二百四十年計といへる語あるに據りて、此書の撰述を嘉祿  
中と推せりと雖も、恐くは其れ非ならん。何となれば、彼の一段は上人の遺骨を改葬

して之を嵯峨釋迦堂に藏するを叙するに、筆の因みに釋迦尊像渡來の由序を記して、今改葬の嘉祿三年に至る迄、凡そ二百四十年を經といへるに過ぎざればなり。若し然らば嘉祿は九卷傳製作の年を示すに非るや明かならん。然るに此傳と勅修御傳と上人の法語等を録するに互に出沒なきにあらず。今悉く之を類別して以て本集の内に收め、其の存否同異を各文の終に記す。蓋し九卷傳の價值は毫も勅修御傳に譲らざるを信ずるに由ればなり。

又他門の師及後代末徒の手に成れる上人の記傳、並に法語固より尠ならず。所謂教行信證、歎異抄、口傳抄、執持抄、親鸞傳繪、山科連署記、女人往生聞書、後世物語聞書、拾遺古德傳、十卷傳、正源明義抄、遠流記等數十部あり。蓋し是等の諸書に記する所は或は執見を以て大師の法語を改竄潤飾し、或は事實を紛亂故造して、以て眞を濫るもの甚だ多し。然れども古今之を信ずる者亦少なからざるのみならず、濫次の中必ずしも一人の伶倫なきに非るを以て、今上人の法語若し説話として其中に記載せるものは、皆之を取りて眞偽未詳録に附せり。兼ねて又眞傳と對照して以て反正の介を爲さば自他共に益を受けん。

又上人の著書と稱せらるゝものゝ中に眞偽なきにあらず。了惠の手記せる漢語燈

錄の跋文に云く

漢語語燈錄十卷十七章、並拾遺語燈錄上卷三章、都是二十章。此予二十年來徧索此於華夷、慎檢眞偽而所撰集也。此外世間所流本願奧義一卷、往生機品一卷、稱黑谷作者即僞書也。又有三部經總章列四十八願名目、第十八願名十念往生願者一卷、及問決一卷、金剛寶戒章三卷、並亦僞書也。上人與鎮西書曰、金剛寶戒章是僞書也。予不製如是書。釋迦彌陀以爲證明矣。況又據理而論寶戒所述乃是聖道法門、而非上人之所作者著明矣。今則管見所及、取捨如斯。若有舛差、後賢糾之。又有子遺來哲續之。之に依るに文永の當時既に僞書の流行を見るべし。此中本願奧義一卷、往生機品一卷と稱するものは、今之を搜索するに獲ると能はず。是れ果して何の書をいふ乎。往生機品に關しては聊か説なきにあられども、略して之を述べず。又三部經の總章に四十八願の名目を列ねて、第十八願を十念往生願と名くる者一卷といふは、恐くは今の彌陀本願義疏を指す歟。但し彼の書の中には四十八願の名目を列ねて、一一に之を略釋せりといへども、而かも三部經の總章をあげず。又第十八願を念佛往生願と標して、十念往生願と云はざれば、或は此書にあらざるやも知るべからず。されど彼の願の下に唯十念を釋して一形及一念をいはず。加之後人此の書を印行する

に當りて、多少の改竄を試み、乃願名を改め總章を刪りて、以て了惠の指目を免れんとを努めたるものと解せられざるにもあらず、假令又之を相關せずとするも、而かも世に所謂本願義疏なるものは、定て大師の眞撰にあらざるべし、獨り文義の蕪雜なるのみならず、記載の事項亦疑ふべきもの多し、此書元と笠置貞慶の請によりて、建曆元年二月上人自ら之を撰すと稱す、卷尾に貞慶との往復書を附して此事を記する中、上人は貞慶を彌勒菩薩と稱し、貞慶は上人を勢至菩薩と讚するが如き、殆ど見戯に類するものに非ずや、又其の卷末に夢中の善導を記して、今より先來の教相に依る勿れ、須く二藏三法輪を以て淨土宗を定判すべしと言ふが如き、即宛然たる中世宗學者の口吻を見るべし、然るに淨土布薩式の卷尾に奥書云と題して、今光明院一師に限りて述ぶる所は彌陀本願義疏、一乘戒儀廣本、上下二卷、略本一卷是也とあり、而して其の下に沙門聖覺記之といへど、恐くは後人聖覺に擬托して、以て此の書の信を釣らんと欲する者ならん、次に問決一卷といふは、未だ何の書といふことを知らず、又金剛寶戒章三卷は元祿十年之を印行して現に世に在り、一卷は訓授章、一卷は釋義章、一卷は秘訣章なり、然るに此書の眞偽古來その説紛々たり、了惠は鎮西に與ふるの書を引て、上人既に自ら此の書の僞妄を指示せられたりといへるも、

九卷傳、並に勅修御傳に載する上人自筆の誓文と稱するものには、唯此の如きの事を申さずとありて、贈答共に此の書の事を記せず、是れ聊か不審なりといへども、而かも上人已に金剛寶戒の説を作さずと明言せられたる上は、其の書は言ふまでもなく上人の親撰にあらざるべし、然るに了譽聖問の傳戒論、並に決疑鈔直牒等によるに、上人自ら金剛寶戒章二卷、淨土布薩式二卷、淺略戒儀一卷を作るといひ、淨土布薩式奥書には、上人の作は選擇集、金剛章兩部二卷云云といひ、長西錄附錄何人の附の著作を列ね、まてにも、金剛寶戒章、金剛寶戒釋義章の兩部を列ね、蓮門經籍錄眞撰の部に、亦金剛寶戒章二卷を出だし、其の下に僞造一卷あり、京兆文雄具に之を辨ずと記せり、文雄の論は今之を見ずと雖も、全長の傳戒論私記等に、秘訣章一卷は門人の僞作する所といへり、蓋し秘訣章は上人と門人との問答を記せるものにして、上人の自撰にあらざると文に在りて明かなるのみならず、文中の義旨亦頗る聖道の論に富むが故に、乃僞作の説を生じたるものならん、然れども之を他の二卷に比するに用語義理互に異ならず、恐くは通じて一人の手に出でたるものなるべし、若し然れば其の一眞にあらずんば、即他の二亦僞妄たるを免れず、義山亦僞妄の説をなして云く、金剛寶戒章は蓋し大師の門徒中に異見を生ぜる者、僞て書を著はし、名を大



師にかりて時人を証惑し、殊に宗門の秘奥、大師の實義と稱するならん、長樂寺鏡空上人の奥書に、此書は法本房行空の輩偽作して妄に上人の作と云、全く不可用と云、此の説信を置くに足るべし、又漢語燈錄如法書寫法則の下に、別有廣法則載、般若讚文、恐是偽書歟とあり、此の廣法則果して今傳ふる所あるか、未詳、又和語燈錄の跋文に和字の偽書あるとを記して云く

愚見のをよぶところ集編かくのごとし、しかるに世中に黒谷の御作といふ文あり、ほし、いはゆる決定往生行業抄、本願相應抄、安心起行作業抄、九條の北の政所へ進ずる御返事かの御返事に二通あり、これの文どもは餘の和語の書に文章も似ず、義勢もたがへり、おほきにうたがひあるうへに、古人偽書と申つたへたり、しかればこれをいれず、又廿二問答とて廿六七張の文あり、又臨終行儀とて五六張の文あり、眞偽しりがたし、いさゝかおぼつかなきによりて、これをのぞけり、又念佛得失義といふ文あり、上人の御作といへり、しかれどもこれはまさしくあらぬ人の、つくれる文也、このほかにまことしからぬ文二三本あり、中／＼いふにたらぬ物ども也、をよそ二十餘年のあひだ、あまねく花夷をたづね、くはしく眞偽をあきらめて、これを取捨すといへども、なをあやまる事おほからん、後賢かならずたゞ

すべし、又おつるところの眞書あらば、この拾遺に續くべし、云々

此の中決定往生行業抄、安心起行作業抄、及廿二問答は之を索めたるも俱に獲る能はず、本願相應抄今の本は印本あり、希れに世に傳ふ、今本願寺龍谷文庫の藏書に依りて之を寫す、九條の北の政所へ進ずる御返事も亦之を得ず、然るに語燈錄、勅修御傳等に載する御消息即本集の第六輯を三十九なりを見るに、中に三心を述釋せり、此消息何人に遺はされたるや明ならず、翼贊に、此御文體甚だ禮儀ありて見ゆれば、若は月輪殿の北方へ遺はされける御返事なるにやとあり、されど語燈錄の中に之を收めたるより見れば、御消息は了惠の所謂偽造の御返事にはあらざるべきか、又いふ所の臨終行儀とは果して是れ何の書といふとを知らず、西方指南鈔に法然上人臨終行儀と題する一篇あり、その中に上人臨終の祥瑞、及諸人の感夢を記すると詳なり、されど此の文は長くして唯五六張のみならず、又上人の述作にあらざれば、定めて今の所謂臨終行儀にあらざらん、又現に傳ふる所の摺本の臨終行儀は、上人の撰述といふのみならず、紙數も粗相如けりといへども、而かも漢語にして和字の文にあらず、此の燈錄の跋文は和語の書に就て論ずる所にして、恐くは漢字の本を指すにあらず、若し然れば是非決し難し、但し今現に摺本の世に行はるゝものあるが故に、之を

寫して附録第二に收む。此の摺本の原本は今駿州乘運寺に藏す。奥書に建久元年十月日法然御筆阿闍梨成呼の語あり。又寛永三年十一月三日雄譽靈巖殿を製して、茲の御臨終記は上人の眞筆なると實正にして、叡山の衆徒駿州に下り、之を善然寺増譽に寄進せしとを記せり。章譽智典亦その記を作りて、此の本の乘運寺に轉藏せし顛末を序す。今之を檢するに筆跡秀麗にして當時の書風を存し、加之文中の義旨亦上人の遺音に背かざるが如し。勅修御傳に、建久三年二月上人、後白河法皇の爲に御往生の儀式を定められたるを記し、又聖護院無品親王の病牀に臨みて臨終の行儀を談ぜらるといへば、必ずしも上人の著作にあらずと斷ずべからず。今唯姑く了惠の言に因みて之を眞僞未詳に編するのみ。念佛得失義は一卷にして現に印本を傳ふ。文義淺劣、定て上人の眞撰にあらざるが如し。或は云ふ、高野明遍の作と、未だ其の可否を詳にせず。

又長西錄附録に上人の著述として、凡そ十九部を列ぬる中、金剛寶戒章、本願義疏を初め、其の他に淨土布薩式二卷、圓頓十二門戒儀一卷、略戒儀一卷、三聚一心戒一卷、大原十二問答集一卷、西方發心抄一卷、初重卷物、師秀說相等あり。内に於て淨土布薩式は其の奥書聖覺記之に依るに、上人最後の述作なりと記し、傳戒論並に決疑鈔直牒

等亦大師の自作となせり。然れども古より之を疑ふもの少なからず。大玄の圓戒歸元等には、西山末徒の僞作する所ならんといひ、布薩式辨正には、名を上人に藉りて眞を濫るものといへり。蓋し此書、授菩薩戒儀、本願義疏等と互に交渉を有するものにして、恐くは中世の比相次て世に出てたるものならん。此書の奥書に選擇集、金剛寶戒章は、禪禪師の教相を述べ、天台の戒法を釋したるにして、即昔教なり。今光明院の一師に限りて述ぶる所は、彌陀本願義疏、一乘戒儀廣本上下二卷、略本一卷是なりといひ、而して此の受戒儀即布薩式を最後の述作といふに考ふれば、金剛寶戒の相傳に對抗して別に一旗幟を翻さんと企たるものにあらざるか。其の編纂の體裁を見るに、大旨授菩薩戒儀の敷衍にして、中間戒相を説く處は亦全く法藏の梵網疏を寫せり。加之外典雜書を引用し、文義共に膚淺にして、決して大師の親撰にあらざるべし。或は謂ふ、上人自作の布薩式は亡逸して今傳はらずと、未だその眞否を知らず。次に圓頓十二門戒儀一卷といふは、即授菩薩戒儀則にして、世に黒谷古本と稱するもの是なり。此の書妙樂の十二門戒儀に擬して十二門を開き、圓頓戒授受の法を記せり。略戒儀一卷といふは、所謂机上の法式にして、慧亮說戒の舊儀と傳ふるものなり。案ずるに淨家傳來の戒儀に古來三本あり。一は庭儀の廣本にして、即妙樂の十

二門戒儀是なり、二は堂上の軌則にして黒谷古本と稱するもの是なり、三は机上の法式にして、即略戒儀是なり、後の二本は傳へて上人の作といふといへども、正受戒の下に相承の次第を記して、聖光、良忠、良曉、良譽及了譽等の名を出せば、少なくとも後代の加筆あるを以て、之を本集に採録せず。云云。又三聚一心戒一卷は未だ之を獲ず、勅修御傳に上人抄記の三聚淨戒を津戸三郎に贈られたるを記すと雖も、義山は其の書未だ考へずといへり。又いふ三聚淨戒と云もの十紙ばかりなるありて、大師の御作なりと云、未詳眞僞と、眞宗教典志にも亦之を眞僞未決部に編せり。次に大原十二問答集一卷といふは、即今世に聖覺の記と傳ふる大原談義問書鈔を指せるものにして、顯眞以下十二人の問答を記述し、大原勝林院に於ける文治二年の論談の筆録と稱するもの是なり。増上寺西譽始めて見聞一卷を作り、爾後無絃、玄貞等盛に布衍して之を世に行ふ。慶長中貞安夙に此の書を疑ふて乃三難を立つ、事は出て、貞安問答に在り。三難とは一に元亨釋書中に曾て大原論談の事を記せず、二に鎮西、記主等の諸祖全く此書を用いず、三に其の文中、上人の滅後に渡來せる般舟讚を引く是なり。自ら亦重要な問難といはざるを得ず。然れども此の他に更に疑點なきにあらず。即此の書號して聖覺の記といふといへども、彼の法印は文に巧にして漢和

共に其の長ずる所たり。元久法語の如き、勝尾寺開題供養表白の如き、和文として實に一代の範と作すに足る。又山門に送る起請文は漢文にして彼れの執筆する所なり。然るに其の文字森嚴にして章句自ら法あり、之を今の問書鈔に比するに、その妍媸固より年を同して語るべからざるを覺ゆ。且夫れ所載の義趣往々にして上人平生の勸化に違背するものなきにあらず。所謂極樂遠からずして十萬億刹の西に構へ、彌陀己心に在りて一坐華臺の形を現ずといふが如き、宛として中世禪門摸倣の語なるを見るべし。加之是の如く問者を立て、一一上人の決答を記するとは、金剛寶戒秘訣章、一向專修七箇條問答等皆同一なり。想ふに斯かる筆法の擬托、一時流行し、此等の書相次て世に出でたるものならん。西方發心抄今集には板本世に傳ふ、二卷あり。先啓目錄に太抵義正しといへるも、文義上人の自撰に似ず。文雄目錄には之を僞妄濫眞類に附せり。又初重卷物といふは即往生記是なり。此書輒く披露すべきものにあらざるが故に、省きて之を録せず。云云。師秀說相とは此書未だ考へず。又蓮門經籍錄に此等の著作以外に、淨土名目圖一卷を眞傳の部に編し、僞妄錄の下に彌陀經義一卷、諸神本懷集一卷、七箇問答一卷、興御書一卷を列ぬ。中に於て淨土名目圖一卷といふは、建曆元年八月、上人勝尾寺に於て教相の事を演述せられたるを、

聖覺自ら之を記せりと傳ふるものにして、中に源空上人説聖覺法印記と署せり。了聖聖問之を圖解し、次で展轉敷衍して盛に世に行ふ。布薩式の卷末に淨土名自覺上下上人御作目錄之内編入云云の文字あり。此書かの布薩式と關聯する所あるか。然るに其の文中麒麟聖財論説法明眼論等の偽書を採用し、選擇集の教相に同からざるもの多し。況や上人説と署すといへども、而かも所謂上人の説は僅々數語にして、餘は皆了聖聖問の言なるに於てをや。故に今棄て、本集に收めず。彌陀經義集は元と善導に擬托して後人の作れる所、然るに一本に題して沙門法然集記とあり。諸神本懷集は先啓目錄、眞宗教典志等皆存覺の作となせり。然るに一本に題して沙門源空記といふ。共に論を待たざるなり。七箇問答一卷とは具さに一向專修七箇條問答と稱す。印本あり。智海、重源等各一問を設けて上人之を決す。大原談義問書鈔と意匠相似たり。中に法皇、上人を禮す等の語あるを見れば、或は殿中間答に擬して、後人の執筆せるものならん。興御書は京都金戒光明寺に其の原本を藏す。教典志に、書中叙する所を考ふるに、元久二年四月、眞影を吾が祖即親に賜ふの時、興ふる所の書ならん。文辭簡潔にして具に玄奧を盡くし、眞宗の法義此に由て興盛するが故に稱して興御書といふ。又印可の御書と曰ふと記せり。されど是れ信ずるに足らず。凡そ上人

の滅後に異執紛論として起り、互に正邪を競諍して、各偽書を作り、又法語を改竄して以て自家の地歩となさんと企てたる者甚だ多し。今此の書蓋し其の隨一なるものならん。

又天台小部集釋の中に、決定往生秘密義と題する一篇あり。或は云ふ、此の書上人叡山黒谷に在るの日著はす所歟と。義旨天台に薰し筆鋒玄を鈎りて、固より開宗以後の作と見るべからず。又隆堯の念佛安心大要の中に上人の法語一篇あり。別行本に題して法然聖人法語といふ是なり。其の奥に建仁元年二月源空六十九歳と書し、又此の原本は光明寺に在りといへり。又念佛緣起なるもの一卷あり。正徳五年の印本なり。奥に建久五年八月沙門源空の語を置き、又御眞筆の本に依りて之を書寫すと記す。又眞宗教典志に三心義私記一卷、未檢、眞偽未決部に附すといへり。又世に母儀教導と名くる一卷あり。母儀との往復書を載す。文義上人に似ずといへども、他の疑偽の書と共に之を本集の後に録するなり。涅槃和讃、六字名號探書等に至りては、現に上人の名を有すれども、擬托たると極めて分明なるが故に之を除く。其の他諸處の寶庫に藏する法語、消息等少なからず。中に就て信ずべきものは之を本文の内に載し、疑ふべきものは之を附録第二に編す。